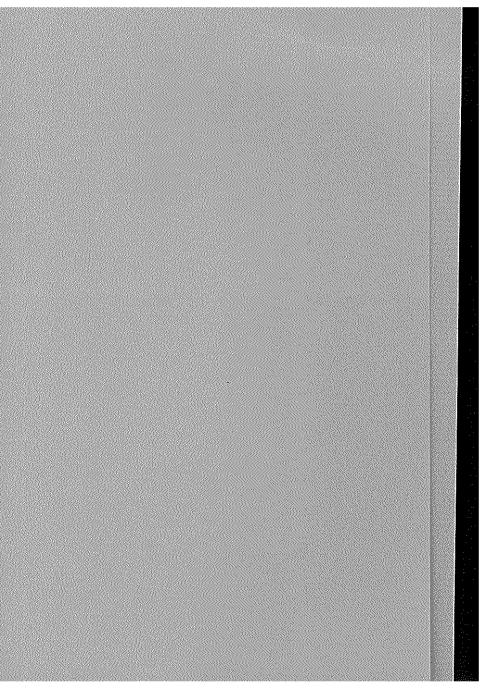
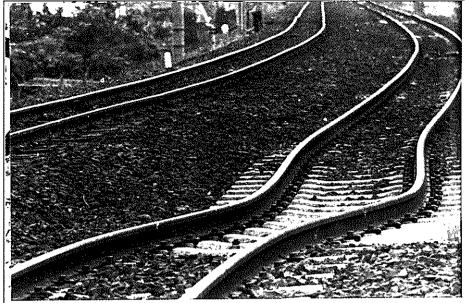
#### 震度V

一'78宮城県沖地震体験記集一



#### 震度V

一,78宮城県沖地震体験記集一



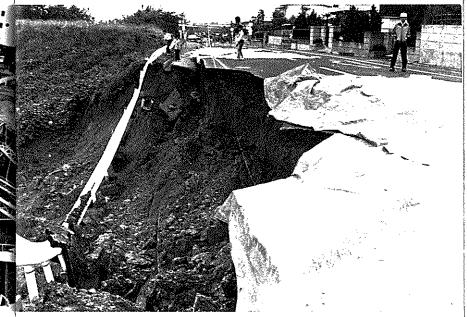
線路もあめのように…… (原町貨物線) 朝日新聞社提供



真暗な市街地をヘッドライトだけを頼りに 河北新報社提供



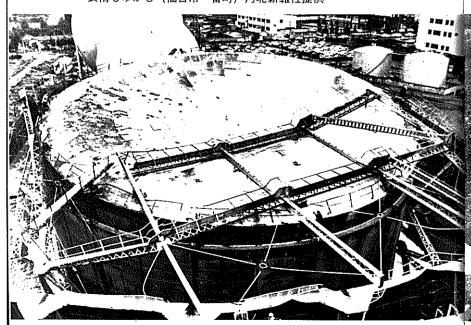
三階のうち一階がメチャメチャ (パロマ仙台営業所)



路肩の崩れが地震のすごさを物語っている(仙台市鶴ケ谷団地)

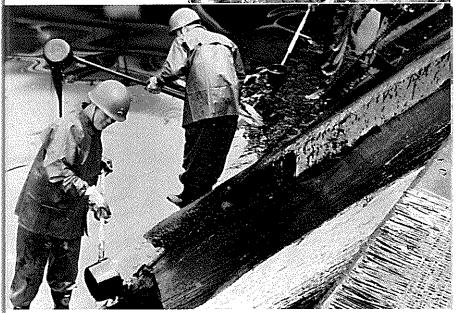


粉々になったショーウインドーの破片を片づける女店員の 表情もゆがむ(仙台市一番町)河北新報社提供



燃上したガスタンク(仙台市ガス局原町工場)河北新報社提供





汗と油にまみれて重油の除去作業に活動中の陸上自衛隊の隊員 第22普通料連隊広報班提供



## 発刊の辞

仙台市長島野

武

全国民の耳目を集めた宮城県沖地震も時の流れには抗しがたく、今や人々の記憶から少しず

つ遠ざかろうとしております。

しかしながら、決して忘れてはならないのが災害であります。

麽「Ⅰ 災害の記録」「Ⅱ 被害実態と住民対応」「Ⅲ 教訓と防災都市」を刊行したところであ 都市型災害と言われたあの地震の恐しさや被害の実態を知っていただくため、78宮城県沖地

りますが、今回引き続き「78宮城県沖地震体験記集」を発刊することに致しました。 これは、色々な職業の人々が、あの時どのように感じ、どのように行動をし、そしてどのよ

うに苦労されたかと言うことと、不幸にして負傷された方や、全壊等の憂き目に遭われた方々

に偽らざる気持を率直に記述していただいたものを集録したものであります。 災害に備える多くの方々に些でもお役にたてれば、望外の喜びであります。

昭和五十七年三月十日

## 第一部 必死の応急活動

「復旧の見込みがない」との連絡深	緑ケ丘地区町内会連絡協議会活動 内	町内会非常時体制発動 平	あの時の血液センター 鈴	居合せた人々からの供血で 伊	待合室から診察室まで泥と血でいっぱい 菅	地震を知らなかったたった一人の人 的	舎房に走れ 関	避難説得に苦労	災害派遣に参加して 佐	五時二十一分津波警報発令 秋	その時、地震観測所では平
井	海	塚	本	勢	原	場		加	藤		澤
					冰		本	藤		Ш	
保	六	安次郎	純	久		直	T	昭三郎	光		朋
夫	郎		郎	信	仁	矢	雄		志	勉	顖
東	町	町	日	伊	3	市	宮	仙	陸	炱	東
北			亦宮	勞	ガロ	立	城	台	上	_	北
電	内	内	城県	愛	, ラ	病	刑 務	豁	上自衛	象	大
	会	会	(日赤宮城県支部)46	(伊勢博愛外科)42	(スガワラ外科)36			(仙台北警察署)21	隊	台	
:	会)······54	会	Ī	Ē	$\ddot{\vdots}$	院) 30	÷	Ĭ	Ě	Ě	:
力 60	: 54	50	46	: 42	: 36	: 30	所) 26	21	隊) 15	台 :12	学)9

震度Vの中の新聞作り 菅	忘れられない大安の日 村	落下した薬品類が発火 鈴	タンクの底板が破損し重油が流れ出る 橋	水もの・びんものは被害甚大 市	何十トンもの印刷機が浮き上がる 今	田んぼ埋め立ての卸町 安	点検とシャッター閉鎖に難渋今	とにかく助かりたい一心だったが 齋	ショーケースが走っていく 大	売上金を袋に入れ屋上へ 小	地震の夜、駅のホームでは 中	地震のため全列車ストップ阿	無我夢中で乗客を避難誘導 佐	信号機の恩恵を今更ながら痛感 高	一一三番へ問合せ殺到 沼
間	<u> </u>	木	本	Ш	野	爨	野	藤	村	沢	村	部	万木	橋	倉
	Ħ	茂		武	智	利		僾	和	昭	重		昭	幸	宏
通(河北新報社)四	造(建 設 省)17	生(東北 薬 大)113	宏(東北石油)108	雄(宮城野倉庫)103	吉(今野印刷)98	雄(マルホン)94	昉(警備会社)93	子(ダイエー)89	子 (藤崎デパート)87	子 (藤崎 デパート)85	子(仙台駅売店)81	穣(仙台機関区)76	吉(国鉄仙台駅)73	助 (タクシー会社)68	佳(電電公社)64

挾まれたSさんをやっと救出 山	閉じ込められた女性を救出 柴	落ちてきた天井と机の間に手が挟まり 大	逃げる途中で右足骨折 葛	長女の右大腿部切断 伊	第二部 悪夢のような惨事	交通渋滞の中、乗客を運ぶ 大	波の上の船のように揺れたバス 支	水道管破裂で洪水 遠	その夜の水道局 安	「配水流量計異常」の報告に観念 長	八百トンのガスホルダーが揺れ、船のよう 岩	一三万戸一斉ガス供給停止 奥	余震の続く中、梯子車で伸梯放水 今	相次ぐ救助指令 佐	一一九番のベルが鳴り続く 藤
本		高	西	膝		沼	倉	野	部	尾	崎	Ш	宮	膝	代
友	Œ	るり子		ますこ		Æ	<b>容</b> 人己	政		真	陽	朥	純	濤	好
之	成		剛			次		雄	毅	_		進	生	逸	作
<u>余</u>	<b>会</b>	至	<b>会</b>	至		交	交	永	永	水	Ħ	Ħ	消	消	淨
社	社		社			通	通	道	道	道	ス	ス	防	防	防
<u>員</u> :	<u>員</u> :	婦:	<u>員</u> :	婦		局	局	局	局	局 :	局	局	局 :	局	局)::
:	•	:	:	:			:		i	•	-	į			i
: 175	: 172	: 170	166	: 163		: 158	: 155	151	147	: 144	141	136	132	128	: 125

宮城県沖地震と仙台市の対応	その時、学校にいた私は	万一の備え	断水で貰い水	こわくておばあちゃんにすがりつく	車体が大きく揺れ、ハンドルが取られそう	我れ先きにとバスへ	とにかく食べる物と寝る所を	目前で地割れ	傾きかけた我が家	谷は生きておった	長い長い十数秒	大黒柱から鴨居が外れてくる	土ぼこりがおさまり、見たら屋根がつぶれている… 伊
仙台	佐	有	奥	ζ.	鈴	桕	佐	佐々木	大	渡	篠	栗	伊
市災	藤	Ш	Ш	ひらきみちこ	木		廢	木	櫾	辺	崎	原	藤
客效		佳	直	みち	秀	しく子	忠	妙	Œ	春	有	凊	多
策本	市	子	子 (小	٤	敏	字	男	子	昭	治	宏	治	多喜子(主
部萬	高	中	示	小	( タ ク	主	国	至	(教	地	自	農	主
務局員・	校	学	学	学	(タクシー乗務員)…		鉄職			方公務	営		
仙台市災害対策本部事務局員28	生 … 224	生 :::: 220	生) 213	生 ···· 210	資)207	媛 ::: 204	員) 201	婦 … 198	員 … 194	頁 ::: 190	業 … 187	業 … 183	媛  179

### 第一部

必死の応急活動

## その時、地震観測所では

北大学教授

東

平澤

陆

朗郎

線で送られて来ている。もう何人かの職員・学生がテレメーター室に集まっていた。「記録計 四カ月前の二月二十日の地震(マグニチュード六・七)を思い出しながら、隣の建物三階にあ 前震がやって来たのは午後五時六分ごろのその時である。仙台で震度二というゆれであった。 が前震である可能性を心配するのがわれわれの習性である。だから「前震である」と確信した ではないか」という疑いを起こさせる。もっとも、やや大きな浅い地震を感じるたびに、 にばらまかれている地震計が強い地震動を記録しているのである。忙しく動くペン先が「前震 は」と見ると全成分のペンがワサワサと大きくいっぱいに揺れ動いている。 るテレメーター室へとわれわれは飛び出した。そこには東北大学地震観測網の全データが電話 地震観測所一階の宿直室で同僚数人とお茶を飲んでひと休みしていた。 本震発生約八分前の 東北地方ほぼ全域 それ

まった。その概略の位置は図式的にすぐ求められ、二月二十日地震の震源の南で、より浅 わけではもちろんないが、「震源は、深さは」が一番気になる。早速震源を決定する作業が始

とが分る。 る震源決定の準備を始めた。その時、ひそかに恐れていた本震がやって来た。 前慶である可能性は否定できない。もっと正確に決めなければと、 電子計算機によ

出しが飛び出して安定を失ない倒れ始めた。「押さえろ」と誰かが叫ぶ。押さえようとし たの 円形テーブルのそばにいた。 かったが、 か もう一方の手は隣にいた学生の肩をつかんでいた。と同時に、「しまった。起こっちゃった」 という苦い思いが心を揺すった。部屋にある機器類はのたうち始め、カード・ロッカーは引き 私は百ぶ程度のテレメーター室のほぼ中央の、すわりが悪くてあまり頼りにならない小さな つかまろうとしたのかは分らないが、とにかくロッカーの倒れるのをふせごうとする人の 上に載っていた計算機のカード入り段ボール箱が落ちてくる。「発電機」と叫ぶ声に、 一階にある手動発電機まで行けるはずがなかったであろう。建物が倒壊する心配はしな 動くな」という声が交差する。停電の直前である。もっとも、あの激しく揺れている 倒れたり落下してくる器物でけがをする恐れは多分にあった。 強い震動に私の片手はその頼りにならないテーブルにつかまり、

損傷も受けなかった。停電の中で、次々に発生する余震の震源決定という徹夜の作業が始まっ 幸いテレメーター受量装置・各種記録計・電子計算機等の主要機器は転倒を免れ、 なんらの

10

協にインスタント・ラーメンを買いに走ったが、自動販売機が停電で動かず、役に立たなかっ であった。このような大騒ぎの中で困ったことは、食べる物がなかったことである。 なしに電話をかけてきたり、あるいは、つめかけてくる報道関係者との応対もなかなかの仕事 に達し、殺気立った雰囲気の中で、地震記録の解析が全員で行なわれた。一方では、 ならない。 た。この地震がまさに本震であると判断するには余震活動に一定のパターンがみられなければ たしか、地球物理学科の地震学講座の人から差し入れてもらって腹ごしらえをした記憶が さらに大きな地震が発生する可能性を簡単には否定できないのである。 緊張が極度 大学の生 ひっきり

仕事をした思い出は決して忘れられるものではないし、忘れてはいけないのであろう。 瞬がきわめて強烈な印象を我々に残した。あの張りつめた空気の中で、全員が必死になって 三年以上経つた今、六月十二日のあの一晩はまるで一瞬間のように感じられる。 しか しその

ある。

(被災地) 仙台市荒巻字霄葉)

# 五時二十一分津波警報発令

(現中央気象台海洋気象部海洋課長)仙台管区気象台技術部長

秋山

勉

プロットし、震源やマグニチュードを求め、津波予報を出すまでの一連の作業をじっと見守っ 着任して間もない頃、管内の地震・津波の訓練が行なわれた。次々と入ってくる地震電報を

日までの地震に関する知識のすべてであった。

的易しい内容の地震の本を二冊貸していただいた。この本に大急ぎで目を通したのが、

赴任の

津波がもっとも恐ろしいから多少でも勉強しておくとよい。とアドバイスを受け、同時に比較

仙台管区へ赴任の内報を受けた昭和五十二年の初め頃、職場の上司から仙台管区では地震、

新人で地震に素人の部長が来たので、きっと大地震が挨拶にきそうだなどと驚かされたりも

訓練とはいえ担当職員は作業を終えた時満面に汗をかいており、

日頃の心構えがうかがわ

私自身も終始緊張していたのが思い出される。

「ツナミチュウイ」を発表した。後で考えるとこれらは本番に備えての得難い 実戦的訓練でも とする震度四の地震があり、 したが、そのとおり、昭和五十三年は地震の当り年であった。二月二十日には宮城県沖を震源 いかと心配したし、 三月下旬には二度にわたって北海道東方沖でM7クラスの地震が発生して 丁度始まったばかりの部課長会では台長室の床が落ちるのではな

る作業のじゃまになるからである。やがて報道陣から、今後の余震と津波の見通しについて見 共同会見場としての会議室に待機してもらった。狭い判定室に押しかけられたら、 動の跡を思わせた。上衣を頭からかぶってその中を走り抜け、二階の津波判定室へかけ登っ た。二台のテレビ中継車と多数の報道関係者が押しかけてきたが、かねてからの手筈どおり、 て、対応の早さに一安心するとともに、 に帰りつくと三号館二階の水道管がひきちぎられて、 した。車内のラジオが仙台管区気象台は五時二十一分に津波警報を発令したと報ずるのを聞 い地震に見舞われた。すでに帰途についていた私は、とっさにタクシーを拾い気象台に引き返 そして六月十二日、 退庁直後の十七時〇六分震度二の前震に続いて十七時十四分震度五の強 一刻も早く職場に戻らなければと心が焦った。 水が滝のように一階廊下に落ちていて激 緊急を要す 気象台

執ようで、次々に入ってくる情報を手で、大汗をかいての応対であった。報道陣が引きあげ一 解を発表せよと迫られ、文案を作成しての記者会見となった。微に入り細にわたっての質問は

小雨の中をタクシーで家路についたが、人っ子一人通らず、激動の後の無気味なまでの静かな 段落した夜半過ぎ空腹が身にしみた。今後の余震対策や災害調査の打合せを終り、午前三時頃

街並みであったのを思い出す。

で紹介記事がのった。我ながら苦笑して恐れ入った次第であったが、よくよく考えてみると立 の夕刊インタビュー欄に大きな写真入りで、「ぐらっときたらこの人が頼り」という書き出し 務実施要領にもり込むこととなった。空腹が身にしみた経験から、非常食をどう確保しておく かもしばしば議論に上ったが、現実的には意外と名案が乏しいことを知らされた。 想定しての職員の確保と、台内の協力体制については、長い時間をかけてねり直し、 信手段、 策についての貴重な教訓を残した。気象台でも職員の安全対策、観測機器の保安、緊急時の通 宮城県沖地震後のある日、地元紙の記者が訪れ、意地悪質問をあびせて帰っていった。 二十八名の人命と三、〇〇〇億円に近い被害をもたらしたこの地震は、同時に今後の地震対 非常電源など幅広く見直しが行なわれた。中でも深夜に大規模地震が発生した場合を 管区の業 翌日

(被災地)仙台市五輪一―三―一五)

場は全くそのとおりだったのである。

からみつめてみたいと思う。

化し、

緑ケ丘地区の災害派遣に従事した。

ぶらな瞳の光を、私は今なお忘れてはいない。

|僕の家を壊さないで!||と叫んでいたあの少年のいたいけな姿と、

必死の思い

に満ち

たつ

## 災害派遣に参 加して

陸上自衛隊第二二普通科連隊

佐

光

志

私は、あのいまわしい傷跡を残した宮城県沖地震に際し、第二十二普通科連隊の一員として あれから三年たって、当時の心情は正直言っていつしか風

遠い思い出の一コマとなりつつあるが、以下私のつたない体験を災害派遣に従事した側

胸をふくらませながら食堂へ、 とそれぞれ帰途についていた。中隊の事務室には、 その日、私の属する第一中隊は、 入浴へと、 一日の厳しい訓練も終わり、 また営外に居住する隊員たちは妻子の待つわが家 残務整理に追われる二十名ほどが、 隊員たちは楽しい自分の時間

時を過ぎてもまだ懸命に執務中であった。

突然、ゴーという地鳴りとともに、 隊舎の窓ガラスは激しくきしみ、書棚は倒れ、 書類が散

乱し、天井がゆがみ、電灯が消えた。中隊付准尉として事務室で残務整理の指揮をとっていた

らも、 私は、 休暇中の隊員や、今この部屋を元気に出て行ったばかりの大学・高校への通学隊員たち すぐさま机の下へもぐりこんで身を守った。一瞬、名状しがたい恐怖と戦慄を感じなが

昭和五十三年六月十二日の夕刻、それはなんの前ぶれもない大地震の襲来であった。

の安全を祈らずにはいられなかった。

中隊は連隊の出動準備命令によって、直ちに災害派遣のための指揮所を開設するとともに、

調査のため、偵察要員がそれぞれの警備担当地区に出動して行った。

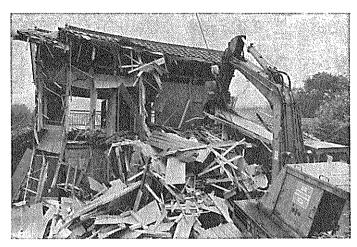
二十一時ごろ、まず約二十名の人員を人命救助のために松島町に出動させた。また、

派遣して、状況の把握に努めていた。 連隊では、 すでに各関係機関への連絡官を、そして県内の主要な地域には被害状況調査官を 駐屯地ではけたたましくサイレンを鳴らし、 消防車が市

に、おおわらわで取りかかっていた。 内の火災現場へ出動して行った。われわれは、 災害派遣のための人員の掌握と、資材等の準備

か りの車を拾ったりして、難儀をしながらやっとの思いで帰隊し、 帰宅途中の者はそのまま引き返し、 休暇や通学中の者は電車が不通のため歩いたり、 市内の被害状況を中隊長と 通りが

#### 第一部 必死の応急活動



二次災害防止のため取壊される家

害派遺準備を完了した。

と懐中電灯だけの灯りの中で、被害の状況も確認できぬまま、

車

あわてふためく乗客を、

乗務員に協力

)整然と下車させた」という報告もあった。

中隊は、電話の不通で隊員の家族や家庭の

ろうそくの光

夜を徹して災

であった某隊員からは「高砂付近で電車が停運用訓練幹部に報告していた。電車で通学中

町 ほどの仮眠をとっただけで、 していた。前夜からの出動者たちは、 水と炊飯支援活動とを、 明け始めるころ、 令された。○五○○(五時)東の空が白々と と出動して行った。 翌十三日早朝、 塩釜市、多賀城市、 連隊から災害派遣命令が下 連隊の主力は鳴瀬町、 息つく暇もなく展開 利府町、泉市への給 再び夜明けの街 一時 松島 間

を 面、鼻をつくすごい刺激臭である。口をあけていると、喉が痛くなる。このドス黒 十四日、連隊は二百名をもって東北石油の海面に流出した汲み取り作業に着手した。 岸壁の五以下から手で汲み上げる作業である。五以下の海面に、 ロープを結びつけ い重曲 あたり たバケ

猛烈な発汗である。 たちの必死の作業は続く。初夏の太陽に照らされ、上下ゴム合羽に身をくるんだ隊員は、 出したら、どのような被害になるか想像もつかない。一刻も早く汲み取らねばならない。 ツを投げ込んでも、 文字どおり汗と重油にまみれてグジャグジャになった身体で身を挺する懸 一滴の海水も入ってこないほどの大量の重油である。 この重油が湾外に流 隊員

る。 ンスの輪がせばまっていく。かくして、汲み取り作戦は成功し、被害を未然に防いだのであ 翌十五日もこの作業は続いた。さすがの大量の重油も、われわれの作業によってオイルフェ

命な作業であった。

(以上山形県東根市に所在)の支援を受け、仙台市緑ケ丘の被災地に出発した。 翌十六日午前六時三十分、第一中隊長斎藤三佐以下九十六名は、第六輸送隊・第六施設大隊

で水が吹き出している。橋げたの沈下のためか、 沿道の家屋の屋根瓦はほとんど地上に落ち、ブロック塀はいたる所で倒壊し、 二時間かかって緑ケ丘に到着した。 車両が通過するたびに大きくバウンドする。 給水管の破裂 心にこの痛烈な光景をいかに受けとめ、

すでに運び出されて、ほとんどの住人は避難していた。 きく傾き、宅地のあちこちには大きな亀裂が横に走り、不気味な口が開いている。 に回転して下の隣家を押しつぶし、新築したばかりの真新しい家の柱がへし折れ、 ごしたであろうこの人たちに、何をしてさしあげることができるのか。他人のこととは思えな 防止のため、 いる人たち。被災以来、電灯もなく、炊事する水も満足にない状態で、不安と焦燥の数夜を過 い。緑ケ丘の被災地は、 れわれ は現場の悲惨さ、異様なまでの町並みの変わりように言葉も出なかった。二次災害 警察官が警戒にあたっていた。 **擁壁で区切られた雛壇状の新興住宅地である。** 避難を準備している家、 悲痛な表情で話し合って 前庭の擁壁が前の 家財道具は 無惨にも大 かり

必死の応急活動 ズタに引き裂かれる、怒りの声である。 後を見送りに来ていたのである。 の方々が、 がいた。 られ、壁が押しつぶされていく。この時、「僕の家を壊さないで!」と叫び、泣き出した少年 ックホーの爪が、主の去った勤労の結晶ともいうべきマイホームに突きささり、 ここでの作業は、 年は五~六歳、この新築したばかりの家の子供なのであろう。取り除かれる家の家族 やっと実現したかっての夢の象徴、 建物の解体を仙台市が行い、われわれ 一家だんらんの日々、生活の中心であった自分の部屋がズタ われわれは、この光景を忘れることができない。子供 充実した何年かを過ごし合ってきたわが家 は残材の搬出をする作業であった。 屋根 の最

いかに育てていくのであろうか。われわれは顔をそむ

け、黙々と作業を続けた。

もらったように思う。そしてまた、「天災は忘れたころにやって来る」平時において、乱を忘 た私には、人生というものの崩壊と再建、たくましい人間としての生きざまを、厳粛に教えて れたように思う。そして「そこにいた人々」とともに悲しみを分け合いつつ災害派遣に従事し た人々、家や財産を失った人々には、自己の体験というにはあまりにも悲惨な代償を払わせら かに超越したものを、厳然とわれわれの前に見せつける。そこに生きた人々、不幸にして逝っ あの宮城県沖地震は、私にとって何であったかと今思う。天災は、常にわれわれの想像を遙

れない、その心構えが肝要と思うのである。

きい音をたてて倒れた。

と共に行っていた。

強い震動を感じ、

身の危険を感じたので外に出たところ付近の建物は大き

この時、

く揺れている。電柱も信号機も大揺れに揺れる。間もなくして隣りのブロック塀がばたんと大

亡し、負傷し、そして多大なる財産が損壊した。宮城県震災史上最大の被害である。

私は仙台北警察署宮町警察官派出所において施設の整備点検を警務課長、

会計課長

昭和五十三年六月十二日午後五時十四分、この一瞬に宮城県沖地震が発生して多くの人が死

#### 避 難説得に苦労

仙台北醫察署外勤課長 (現宮城県警察交通機動隊副隊長)

昭  $\equiv$ 

郎

加

課に 中カーラジオは、「大きい地震で震度五、いまだ仙台では起きたことのない地震でかなりの被 私 「全派出所、 これは大きい地震だ、 駐在所一斉電話で被害の調査にあたるよう」指示し、 急いで帰署しなければならないと直感した。 宮町派出所を出た。 直ちに電話で外勤

害が出た模様です。私自身もはじめての経験です」と繰り返し放送している。

が察知された。声を分析するとこのアナウンサーは五十歳をこしているからである。これは災 私は、 アナウンサー自身が「はじめての経験です」と放送しているところに、ことの重大性

害対策本部を設置しなければならないぞ、と思われた。 帰途交通渋滞がはじまった。堤通りで自動車から降り急いで北署に帰った。この時刻午後五

時三十分、直ちに全署体制の震災対策本部を設置した。

五箇所、ガス、水道、、電気は管内全域がストップ、国鉄仙山線は熊カ根鉄橋の沈下でストッ 当日判明した北署管内の主なる被害は、死者二名、火災一件、 負傷者三十人、塀の倒壊五十

と被害が多くなるかもしれない。概要をとりまとめて報告し午前一時三十分に帰宅した。

プした。意外にも被害が少ない。大いによろこばしい。しかし、調査が進めば明日には、

もっ

につれて負傷者の人数も増え、 翌日から被害の調査が本格的にはじまり、これが当面の外勤課の任務となった。 建物の損壊、 塀の倒壊も著しく増加して、地震の威力その恐し 調査が進む

さが明らかとなっていった。

う新たな局面を迎えたのである。 さらに加えて雨期を迎えて、 大小の降雨が連日続いた。ここで対策本部は、第二次災害とい つまり十数年前に急斜面を崩して造成した団地の宅地や石垣

にひび割れが生じ、ここに雨水が入り地盤が軟弱となり、崩れだしたのである。

新聞、

テレビ

難かしい作業なのである。

強い

あまりに死傷者を生じさせては大変である。ここに私は事の重大性を考えて人命尊重の立

警察

(i)

本来

小の任務

iţ

前段の避難であることに疑いはないが、

後段のマイホ

ì

ムに愛着心が

場にたって指導したのである。

の報道機関は連日この状況を報道した。その一例を紹介すると次のとおりである。 ああわが家崩れる。 泉市で家族七人やっと避難、 危険地帯業者にも責任、 工法

の

欠陥

が原

因 報のみだしである。 側通行に。」これらは、 рq 日連続大雨の恐れ、 六月十二日の地震当日から半月も経過した六月二十七、 降り続く雨、 緊張高まる、 また石垣崩れる、 仙台市旭ケ丘市道が片 八日 の河北新

崩れと家屋倒壊を判断し危険が迫ったときに避難すること。 Ιţ さいという避難からマイホームとその土地をあきらめなさいという指導にも通ずるものであり ħ ΙÍ 北署管内の危険区域は、 そして納得させることである。 ①直ちに身体だけでその家から避難すること。②今後の降雨量と余震を考慮して、屋敷 ならない。 警察は警職法、 この避難誘導を分解すると、 災害対策基本法により危険に直面している住民に対して、 黒松派出所をはじめ、 この仕事は、 先ず危険か否かの判定に始る。 いま危険が迫っているから身の危険を避けな 小松島、 南光台、 を一軒一 泉、 軒巡回して指導 将監 危険と判定すれ の各派出所 避難誘導しなけ 説得 に Ø

ら十五人を応援派遣をしてくれたのである。この援軍は、連日連夜の警戒と避難誘導、 宮城県警察機動隊が仙台市内のこの惨状を救援するために北署にも前後十日間および十人か 被害の

調査、住民の激励と「困りごと相談」に応じ地域住民から感謝された。

地も家も捨て去らなければならない人々、いつ自分の家が崩れるか、隣りの家が倒れてくるか の不安におののいている人々、悲しみをこらえている人々の顔。涙がでてくるのをじっとこら えて、「元気をだして頑張って下さい」といって激励してまわった。 いかにこの人々は警察に信頼をよせているか、頼りにしているかが身にしみて感じられた。土 私も外勤課長としてこの援軍と共に、また派出所員、パト勤務員と共に被災家屋をまわり、

るので困っているという家、死ぬときはこの家と死ぬのです。と必死になって崩れようとして 捨てなければならないという人、おじいさん、おばあさんがどうしてもこの家を出ないと頑張 る家にしがみついている老人等々、家というものに対する愛着心をまざまざと見せられた。 機動隊の援軍の外に前後して宮城県警察本部長も被災地を視察されたし、公安委員の視察も 多くの被災者の中には、新築移転して二週間目でこの地震に遭い隣家が倒れてくるので家を

行われた。警察庁の官房長もヘリコプターで空から視察された。署長、副署長も一戸一戸巡回 し被災者の慰問激励を行い感謝された。 震災一か月後、 小牛田町にあるわが生家に赴き、年老いた両親を見舞った。

ように思う。

災害は忘れた頃にやってくるという、

九年前に吟味した基礎工事の上に頑丈なる木材にて建築した五十坪余の古風な家である。 一生一代の事業として新築したもので当時はその材料と建築技術が評判となり、 そこにも北署管内で家と土地を失った多くの人々と同じあわれな姿があった。 わが家は二十 近郷近在か 父が

Ę この家も今度の地震で上下左右に激動してサッシ戸、ふすま、障子は外れ、 壁は落ち、基幹となっている柱が八本も折れたのだという。テレビ、 かなり遠方まで広まり見学者が相当あったものだ。 戸棚は倒れ、 ガラス戸は破 父もそ

の下敷となり負傷した。危険であるため三日間、

古川市の娘の家に避難したという。

今は、

管内の被災者の人々、 努力の結晶ともいうべき家、加藤家の象徴でもあるわが家が死んでしまった。 の借財をしたが故に、 急の手当をして仮柱を建て仮住いの状態であった。この惨めな家を見て、 自分は高校、大学と苦学力行を余儀なくされたことを思い出した。 仙台市内の人々、 今回の宮城県沖地震は多くの貴重なことを教えている 宮城県内の被災者と同じ次元にたって涙を流 この家を新築し相当 私は、 わが北署 その

さて、一か月にわたる週休返上しての北署管内の最終的調査では、 死者三人、

軽傷者二百十四人、 全壞家屋七十一戸、 半壊家屋百三十二戸、 一部破損家屋十二、二十八

非住家屋の被害が百六十戸を数えた。

それに避難世帯が二六八世帯の六百四十四人を数えた。この中には、マイホームを取り壊わ

さざるを得なかった家も十戸余を数えている、その心情察するに余りある。

と再建、その他多くの罹災者各位の回復と、今後の御多幸を祈念し、また死亡された方々の御 余震時のショック死であった。負傷者の早い回復、マイホームを失った人々の一日も早い復興 修復するのに何百万円の修繕費を要する人も少くない北署員にもいる。死者の追加一名は、

冥福を祈ってペンを止める次第です。

(被災地 仙台市宮町四-四)

## 舎房に走れ

宫城刑務所刑務官

関本

富

雄

刑務所という特殊な施設環境における地震の恐怖は体験したものでなければわからない。

事務系職員は二階会議室において、職務研究会を開くことになってお

そのとき刑務所では、

26

瞬脳裡をかすめたのは、

大量の逃走者が出るのではないかということであった。

が舎房に走った。 クリートの庁舎が激しく揺れだした。「それッ 地震だ」「舎房に走れ」誰いうともなく全職員 げまさに退庁しようとしていた。 方保安系職員は、 地面が波うって思うように走れない、転ぶ者、 一日の作業を終えた収容者を舎房に収容し、点検確認して事務室に引上 ――そのときである。ゴォーという地鳴りとともに鉄筋コン 立木につかまっている者など

ŋ

開会を待つばかりとなっていた。

舎房では夜勤職員と給食係の職員が勤務についていた。 約九百名の収容者は地震と同時にワ

様々だが、みんな緊張感と悲壮感を五体にみなぎらせている。

ァーという驚きの声をあげやがてそれは恐怖に変った。 勤務中の職員は「大丈夫だ、 心配するな」「死ぬときは一緒だ、

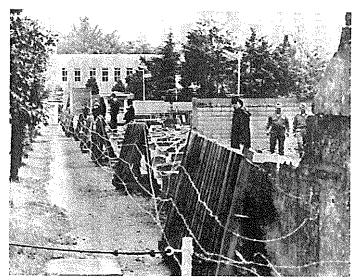
逃げはしない、

心配するな」

堵したのか、騒ぎは間もなく治まった。 すぐおさまる」「怪我ないか」などと声をあげて回った。駆けつけた大勢の職員の姿を見て安

門を見て、これは大変なことになるぞ! になっている。 前に出た瞬間ハッとした。仙台拘置支所の市道に面した外塀が完全に倒れて中が丸見えの状態 事務系職員は二階の窓からドドーという一大音響とともに土煙りを出して崩れ落ちた第二正 そのうち赤煉瓦塀 (宮城刑務所側の塀)もみなやられたという声が聞こえる! と、それぞれ二階から逃げるように降りたが、

27



有棘鉄線を張り、徹夜で警戒網が敷かれた。 河北新報社提供

臘 慢達は、 誰に指示されたわけでもないが、 咄嗟に独自の判断で外塀倒壞箇所に走った、

こてそれ から徹夜 の警備 が始まったのである。

ヅ タに裂かれ倒れ落ちてしまったのである。 赤煉瓦 元の高 い塀が市民にどれだけの安心感を与えているかはかり知れない、 一名の逃走者も出してはならない、 その外塀 社会防衛

が

ヅタ

そ

ŀ 摒 后の砦、

絶対死守の覚悟、

刑務官の使命感が職員を奮い立たせた。

使用不能、 か の転倒落下、 全体の四十%完全に倒壊し、 これが最もひどい被害で、 の被害状況 医療機器 電柱の折損等による電気設備の故障続出、 は外塀関係、 破損流失、 その他設備関係では、 残った部分もいたるところに亀裂が入り崩壊寸前 本所赤煉瓦塀が全体の六十%、 給水管が各所で破裂し送水不能、 の転倒散乱、 電話交換機の整流器、 仙台拘置支所の 各工場の機械器具、 コ 畜電器が ン の状態であっ ・クリ 四散 変圧器 Ì

転倒飛散など枚挙にいとまがないほどであった。 警備状況については警察官や各刑務所職員の来援を得て、 の 領置倉庫の保管物品 有刺鉄線、 バ りケー j. の設置と職 材料 Ø

者 員 ô の緊急分散移送などが行わ 人垣作戦による徹夜警備、 れ幸い 東京、 一人の逃走者もなく治安が保てた。 名古屋、 大阪、 広島、 福岡、 札幌の各管内刑務所に 収容

未曽有の困難に直面した職員は、 外塀倒壊という壊滅的被害をうけたあの地震発生から九か月余、 一致団結して歯をくいしばりながら酷暑酷寒と闘いようやく かつて経験したことのない

完成をみた、装おいも新たな外塀と威風堂々たる第二正門を仰ぎながら、 さらに悠欠百年の歴

史を刻むことであろうことを思い、いまなお感慨無量のものがある。

(被災地 仙台市古城二—三)

## 地震を知らなかったたった一人の人

仙台市立病院副院長

的

場 直

矢

事を終えた人々がどっと街に溢れ、家庭では主婦が夕飯の支度にかかろうと云う時刻である。 昭和五十三年六月十二日の午後五時十分頃の事であった。 丁度一日の仕

その時私は旧病院のザールで手術の最中であった。そう云えば過去の比較的大きな地震、 十勝沖地震の時も、当時大学病院で手術中であった。十勝沖の時であったか、隣室で手 新潟

地震

の直撃を受けたのは、

天災は忘れた頃来ると云うが、地震には強いと云われていたわが仙台市が、

あの宮城沖地震

術中の某外科医は急に手術台が動き出したため、

勘違いして大声で「動かすな!!」と怒鳴った

道切

除術

が予定されていた。

日手術

:は午後二時七分に執刀開始された。

患者

「は仮にYさんというおじいさんで、

両方を切開して操作するため相当の長時間がかかる事を覚悟しなければならない。

食道手術は消化器の中で最大の手術の一つとされ、

Þ 自身もかなり強い不安感に襲われた事を思い出す。 抜 の かけられ腹や胸部を開かれたまま身動きが出来ないのに、それを捨てて逃げ出す事 ったが、この時 かしたりする人も居た。 患者と運命を共にしなければならないのだなあとつくづく感じさせられた。 しばらくの間笑話になった。 も手術中で、 この時はザールの婦長が皆をたしなめたとか聞い 結構今までにない激しいゆさぶりが来て、 宮城沖の時も二月に、 けれどもわれわれは手術中に災害に 前触れのようなかなり強い地震があ 悲鳴を上げたり、 たか 患者 JE. は 直 は麻酔を 出来な あって の 腰を 所 私

その 要なチー かに素晴しく各々の仕事を果たしてくれたかと云う事は、 l 宮城沖地震の被害状況などについては、 感動を受けた場面であった。 一瞬間の恐ろしさを書いてみたい気持もない。 当時の市内の状況は一個所に閉じ込められていたため、ほとんど目撃した事はない ムワー クの中で、 居合わせた一人一人が、 当時詳しく報道され、 しかしその瞬間に、 今回は一糸乱れず沈着に行動してく 私の外科医としての生活の中で最 また記録も保存されてい 外科医にとっては 一番重 るら

Ų,

31

この日は特

胸

部

腹 胸

部部

食

光が飛び、 り下がっている無影燈を手術台の上から押しのけた。次の瞬間にはパチパチと花火のような閃 個に手が動き出し、 で自分を叱咤した。 事もないような激しい揺れが、怒濤のように荒れ狂った。天井からは何かばらばらと細片が乱 れ落ち手術室の内外ではがらがらと崩れる音がして、手術台にすがりつき、立っているのがや 切除 掛けようとしていた。その瞬間地震がぐらぐらと来た。その強さは一瞬息をのんで手を休める ところが次の瞬間どこからともなくゴーッと云う地鳴りにも似た響きがして、 には充分であったが、 下端と胃の上端を引き合わせて、これを継ぐために、胃粘膜と食道粘膜の間に最初の縫合糸を 操作に戻って、 に右開胸を先行し、病巣部の状態を観察してから、その周囲を剝離して食道の下三分の二程を とだった。 人々は声をたてるものもなく、 すべての電燈が一斉に消え、 次いで開腹して胃の周囲を剣離して、 まず、 あらかじめ作ってあった胃管を、 まず器械台上の圧巾をひったくり、開かれた患部を覆い、次に天井から吊 そして今第一にやるべき事は何か? このままつぶされるであろうと思ったが、「今騒いではだめだ」と心の中 程なく止まった。「二月の時より小さいよ」と冗談が出た位であった。 むしろ余りの驚きに声も出なかったのが真相だったのだ あたりは真暗闇になった。 食道の切断端附近まで吊り上げた。 食道と吻合し易い型に作り直し、 と考えたが、 激しい地震は間 自分の思考とは全く別 今度は想像した b 再び胸 なく去っ 次に食道

それからの闇の時間はなす事もなく、永遠に続くように永く感じられたが、まもなく必

要な電燈だけはぱっとついて、 室内は明るくなった。 気がついてみると、 私と助手は患者を囲

わってい る体勢にあり、 んで立ちすくみ、 た。 п 血圧係 麻酔医は手動で人工呼吸を続け機械出しはいつでも必要な道具をすぐ手渡せ この顔付きは思い出せないが、 は 患者の血圧に異常のない事を告げた。 おそらく蒼ざめ切っていたに違い 患者だけは深い眠りの中に横 ない。 室内や

気が手術室の中に流 在 病院内での停電 'n は電気に支配されていると云ってもよ た い状態の ため、 大事故 l: つ な

廊下には小物が散乱し、

外部からは騒然たる人々の気配が厳かに感じられたが、

ほっとした空

か る した事は、 それにしても、 非常に永く感じられた。しかしこの時自家発電装置の有難さを、 緊急用の電気は、 全く素晴らしい事で、 あの老朽化した旧病院で、 停電すると自動的に自家発電に切り替えられる仕組みになっている訳だ 不断の保守点検を怠らなかった人々の功労と云わなけ 恐らく新品とは云えない発電機が停滞 初めて身に染みて体験し なく始動 'n ば な が

らない。

再開 ちらかった手術室内を簡単に整理し、 され その後の経過は、 何となく死地を脱したと云う安心感もあって、 消毒をやり直して、 手術は一見何事もなかったように すべての手順が

順調 ű に運び、 らく観察した後、午後九時過ぎ帰室させた。血圧も安定し、 完了したのは午後七時二十二分の事であった。その後患者を麻酔から覚まして、 意識もはっきりして来たが、

家族の方々はYさんの心配を懸念して、しばらくの間地震の事を隠して、すっかり元気になっ

人だと後で談笑した。 てから教えたそうである。 それにしてもYさんは仙台に居て宮城沖地震を知らなかった一人の

ク塀の下敷になった脾破裂患者などの手術が開始されていた。 て行った時は、 私たちがザールに釘付けになっていた間に、 救急室は全員挙げての大奪戦だったそうであるが、これは後に聞かされた事で、 はもう院内は静まり返っていた。しかしその頃から別のチームにより、 地震で負傷した大勢の人々が、次から次に来院 ブロッ 私の出

事はいろいろあったようだ。手術が終ってから病室を見舞うと、第五病棟北側の個室に入院し に院内の被害は他に比べて最少限で、特に人身事故は僅少であったが、それでも危うい

先に落下したとの事であった。私が行ってみると「あのブロックが頭のてっぺんに当っていた ていた婦人が丁度トイレ内で地震に遇い、天井が抜けて大きなコンクリート 今頃どうなっていたのでしょう」と蒼ざめて語った。何時の頃か、 工事の都合か何か のブロックが、 で置

しつけられていて開かない。 を光らせている必要がある。もう一つ、この後自室に帰ってみると、 き忘れられていたものと思うが、病院では事故の原因になるような物には、日常きめ細か 当時深夜など仮眠をとるためベッドを入れてもらい、その周囲を本棚で仕切っていた。二 強引にこじ開けて見ると、 スチール製の本棚が倒れて散乱してい ドアが内側 から何 か に目 に押

ない。また二段重ねのスチール棚の上下は、ガムテープなどでしっかり固定しておいた方が良 か寝ていたらどうなっただろうかと思うとぞっとした。重い棚類を壁から離して置くことは危

段式の本棚の部分が、重い本を入れたままベッドの上に折り重なって落ちていた。ベッドに誰

なり、 声も出ず、 中喉元過ぎれば熱さを忘れるの譬の如くに、この恐しかった記憶も、 ような激震に見舞われたら、真先きに逃げ出すかも知れない。自信は全くな 宮城沖地震では驚くべき冷静さで、各自の義務を果たしてくれた。前の二月地震が予行演習と いる。手術場で二ケ月前の一寸した地震の時には腰を抜かしたり、悲鳴を上げた人々も本番の と云う学者の意見などを新聞が大きく取り上げたりして、人々の心胆を寒がらせていた。その その後しばらくの間は余震も頻発し、まだまだ地底にはエネルギーも蓄積されていて危ない 平常の心掛けが出来ていたのだろうか、「そんな事云っても、 身動きも出来なかったのよ」と云った人もいる。正直の所、 ほんとは余りの恐怖で、 日に日に薄れようとして 私自身だって再びあの

(被災地)仙台市一番町四一六)

# 待合室から診察室まで泥と血でいっぱい

スガワラ 外 科

菅

原

ってしまう。突然の災害時での救急医療体制を考える時まず、精神的、社会的モラルから教育 ニック状態に落ち入らせるかということである。自分さえよければ……というエゴの集団にな はずであるから、私は私なりに救急医療の実態について経験上から感じたままを記述したい。 結論から申し上げるならば、平和時に起こる突然の災害が、いかに人の心を変え、社会をパ

そろそろ記憶も薄れて来た今日このごろであり、また、各方面で種々の実態調査が行われた

重度、転送の理由の解明、専門外および診療機能の有無、 らを判断、整理する一次担当医療者の必要があげられる。私の所では、当時医師としての私が 次に医療担当者が少ない――診療所に短時間のうちに大量の患者が来院した場合、 入院の適応、 転送の必要性等、これ 症状の軽

しなければならない気がした。

十名ぐらい処置したところで、

待合室がいっぱいとなる。

診察順番を決めるよう婦長に命ずる。

一人、看護婦が二名、生徒が一名 (勿論看護学生であり下校中で、 従事する事が出来

ts

かっ

合わなくなる。電気消毒からガス(プロパン)消毒へ、さらに軍隊調の薬品消毒へと移ってい からぼつぼつ患者が来始める。いずれも軽症だが人手がかかる。 たびん類のかたずけを命令するとともに、縫合手術、火傷の処置の準備をする。五時三十分頃 であった。「戸外を見るな。強くなったらベッドの下へ……」と指示し、外来に戻る。 せようと、二階に駆け上がってみたが、テレビの落下を防ぐために押さえているくらいで平静 ていた軟膏壺や、びん類が音をたてて落下しだした。即座に、 たが、ふと外を見ると、隣りのブロック塀が波打って崩れかかっていて、室内では棚に置 た。「グラッ」と来た時は、鉄筋コンクリート二階建てのせいか、特別に体に強く感じな た)、事務員一名であった。 午後五時十二分頃は、 いつもの外来常連の患者が五~六名、入院七名の静かな状態 婦長とともに入院患者を避難さ 次第に縫合手術の消毒が間に であっ かれ 0

どく汚れている。土足での出入りとなり、診療順番を争う患者と受付や婦長との口論が耳に入 ってくる。手を休める暇がないまま叱る声だけが出る。午後六時頃、救急車でブロック塀の下

次第に受付もなにもなくなり、床は土砂や血液でひ 整理のため、

症状 の

程度に

よっ

敷きになったという小児が運ばれて来た。救急車の中での診察となる。既に死亡していた。

「死体検案は今は出来ない」とお断りする。

ずれもタンスやブロック塀の下敷きになった犠牲者である。折よく二回目の救急車が入って来 たので、国立病院へ担送をお願いした。この時隊員から「二次救急の必要があったら御連絡下 性と大腿骨骨頭骨折の疑いのある老女、あわせて二名。二次救急の必要があると判断する。い さらに手術を続行していると、婦長から呼び止められた。腹部強打、内臓損傷の疑いある男

さい」との一言。非常に元気づけられた言葉だったと今でも思っている。 ローソクを何本立てたか確かでもない……。 その後も軽症、中等症と患者は続き、夜の十時頃やっと終了した。その間、 全く照明なし!

また、事務員や常連の患者さんが大型懐中電燈を照らし続けてくれたので、何の不自由もな

なものだった。待合室から診察室まで泥と血とゴミとで一杯……。 後遺症もなかった)。へとへとになって、ふと振り返ってみると診察室の汚れようは全く凄惨 く手術ができた(変なもので、このような野戦病院的手術でも後に一人の化膿もなく、特別な

次に十二日を中心に十日~十五日までの状態を数字で示すことにする。

+
Η
}
+
五
日
0
λ
院
ĽΫ́
h.
外
来
来
来

外来

惠

者

数

※ は地震後	地震後の新患を示し、	*************************************	
軽症	三九	名 (五三、四%)	① 切 創 (ガラス)
中等症	二五五	名 (三四、二%)	② 打 撲、捻 挫
重症(入院)	六	名(八、二%)	① 骨 折、② 下半身火傷
最重症 (転送)	=	名(四、一%)	① 内臟損傷、② 大腿骨骨折
(死 亡)	*****	名	
計	七三	名	

十五日 (木)	十四日 (水)	十三日 (火)	十二日(月)	十一日(日)	十日(土)
十四名	十四名	十四名	十名	七名	七名
一四一名	一三五名	一一三名	六三名+七三名	六名	五四名

六一~七〇〃 五一~六〇〃 四一~五〇〃 三一~四〇~ 11-110 計 四 四 四 男 名 六九 四 九 九  $\mathcal{L}$ 女 名

男女の比は女性が多く、老人、子供が比 較的に多い

以上思いつくままに記述したが考案するに

1 幸であった。もし、 も一次救急をお断りする以外なかっただろう。すなわち、グループ診療、及び組織診療の必 私の診療所では午後六時まで診察しているので診察時間内に災害が発生したことは非常に これが通勤の看護婦二名が帰宅し、 生徒と二人だけであれば、 望まれて

(2)料の不足をきたしたので発注したが、応ずるのに時間がかかっている。これは配達が不能と なったためであろう。 薬品のストック、あるいは卸業者の協力が必要であろう。私のところでも二、三の衛生材

要性が考えられる。

べ ッドはないし、 二次医療病院の確保も大切なことである。電話しても断られる例が多く、 人手はないし……。 数え上げれば不安の一言に尽きる。 設備はないし、

(3)

(被災地 仙台市中倉一—一一五)

### 居合せた人々からの供血で

勢博愛外科医院

伊

勢

久

信

うに、⑶混雑を避けるために今日は支払を受けない、等を指示しました。 職員には、①患者が来たらカルテを本人に持たせる、②一人の患者にだけ時間をとられないよ れではけが人が多数発生したに違いないと、廊下の長椅子やついたてを全部外に出しました。 いのアパートを見ると、ブロックの門柱や塀が倒れ、壁には大きな割れ目が見られました。こ の薬びんや印刷物が頭の上から落ちてきて、電燈も、ガスも、電話も止まりました。 初めの患者は数分後に来ました。血だらけのタオルで創口をおさえて、今回はガラスによる 道路向か

薬局で立ったまま字を書いていたのですが、体が動いて字になりませんでした。その直後嫻

る人! 反対に後から来たのに早くみてくれと大声をあげる軽傷者。医師の体は一つしかな 切創と家具や壁の倒伏による打撲が大部分でした。ショック状態のために声もなく床にねてい

42

< た ル カルテには、 皆を平均に診療するためには一人数分しか時間をかけられません。軽傷者は、 マーキュロ、 必ず自分で局所の画をかきました。電気とガスが止まっているので、ピンセ 滅菌ガーゼで処置し、明朝七時から縫合しますと言ってお帰りいただきまし オキシフ

ット等は薬液消毒とし、 注射器、 包帯材料は惜しみながら使いました。

暗 てなってからは、 九時間使えるキャンプ用の太いローソクを受付、 薬局、 病室、 給食室、

す。 便所に並べ、処置室は、 ガソリンの補充は乗用車から抜いて使いました)。 非常用の発電機を用いました(ホンダ三百Wは、二涊で四時間使えま

入院してもらい、クレーンから落ちた人は二十許離れている電気のついている病院へ送りまし ントゲン撮影を必要とする人が何人かいて大変困りました。やむをえず、 一部の人には仮

た。 最もひどかった人は、 スーパーマーケットで右頸部を二十珍も切り、 頸動脈近くまで創

た人々の中から何人もの供血の申し出があり、干αの輸血をすることで危機を脱しました。 いている人でした。 たので、 静脈切開を行い、デキストランの点滴をしながら処置をしていたところ、居合わせ 血圧は九十台、 顔面蒼白でした。 血液銀行からの輸血など望むべくもなか が開

1 パ ーマーケットから一涊入り牛乳二十本、 サンドイッチ、 おすし等のパックを多数差し入れ

患者数は五十名でした。

けがの見舞もかねて、

O K

、べての処置が終ったのは十一時半、

していただき、皆で分け合って食べました。

給食は、 二週間ガスが止まったので、プロパンガスとキャンプ用ミニクックをフルに使い、

一回も欠かさず出しました。

た。 がら縫合しました。これに新患が加わり、平常の患者も来院したので、その忙しさは格別でし 前日縫合しないで帰ってもらった患者さんは朝の六時半から廊下に並び、発電機をまわしな

干円)を借り、病院の配電盤に連結しましたので、以後は、 昼過ぎになっても電力が回復しないので、リースの発電機(三十KWのディーゼル。一日三 電燈のみならず、包帯材料、

を敷き、寝るや寝ずで翌朝は六時半からの診療に協力してくれた全職員に感謝しています。 の滅菌も通常と同じように行うことができました。 前夜は、 ガラスの破片の上に新聞紙と布団

今回のように、電話、電力、ガス、水道、それに交通もままならない時の診療はどうしたら

1

1光源:十時間くらいもつ太いローソクがよい。

2電源:非常用電源が必要(liKWくらいほしい)。

3熱源:市ガスとプロパンあるいは炭等二種類以上のものを用意しておくこと。

薬品:ガーゼ、抗ショック剤、輸液採血バック、鎮痛剤、 抗菌剤等は、 一週間分位の ことが必要と思われました。

備蓄は必要。

5レ線検査:ポータブルの撮影機が必要。

6水源:水道だけに頼らず井戸も持つこと。

7通信手段:非常用無線があればなおよい。

ら、一人の恵者にだけ時間をとられないようにし、翌日の縫合でよいものは緊急の処置をして 方法がよい。当日は支払いを受けない方が混雑を回避出来る。多くの恵者を診療するのだか 短時間内に多人数を診療する時は、 カルテを本人に持たせるか、首に番号札を下げるだけの

地震の患者は全部で約百名、完了するのに約四週間を要しました。

翌日来院していただく等の方法が必要である。

患者の大量発生時にはどう対処したらよいか、行政と医療機関がきめこまかい話し合いを持つ 全市規模の災害がなかったので、このようなことに慣れていませんでした。

仙台は、

戦後、

(被災地 仙台市長町七一九一二〇)

45

#### あの時の血液センター

日本赤十字社宮城県支部事務局長

純 郎

長の指揮の下、さっそく所内の点検を開始。 /): 0 込んでいるときである。看護婦が悲鳴を上げながらも採血ビンを入れたかごをかばうように 床にしゃがみ込む。「大事な血液を守らなければ」という職業意識をとっさの場合に働いたの しばらくして揺れがおさまる。停電しているがまだ明るい。残っていた十数名の職員は、

Fit

たり壊れる音がする。

に揺れる。逃げようにも立って歩くことができない。そちこちでガチャンガチャンと物の倒れ

十七時十四分突然グラグラときた。四階建てのセンターの建物は不気味な音をたてて大揺れ

ちょうど、いずみ二号車が移動採血から帰ったばかりで、採血してきた血液を庁舎内に運び

むかい、

センター

の冷蔵庫に保管をする。

庫、 製剤の装置も異状なし。 保管棚を天井に固定する措置を講じていたため、 の地震の際、保存血が保管棚からズリ落ちそうになったので、地震のあとプレハブ冷蔵庫内の フリーザーは順調に動いている。 家発電装置は停電とともに作動を開始している。 自家発電装置と連動していない試薬保管用冷蔵庫の収納品を、 保管中の血液はすべて異状なし。去る二月二十日震度四 今回の地震ではビクともしなかった。 モーターの調子は良好。 血液保管の冷蔵 検査 手分け

して作動している冷蔵庫に移し替えをする。 セ ンター内の被害は、ついたてが倒れたら、 ガラス器具等が若干破損、その他タイルが落ち

十分、手分けして連絡を開始する。電話が混乱して通話ができない。大災害の際には たら、 センターは大丈夫、それでは供給取扱所、 壁にわずかな亀裂が入った程度で軽微のようだ。 採血出張所、 備蓄病院の状況はどうか。 通話が 十七時三

あり、 用無線電話を使って辛うじて連絡がつく。供給取扱所については、 ついては、 また停電中の所は氷を入れて監視中との連絡あり。採血出張所は異状なし。 仙台市内の四病院が保管困難とのこと。早速血液運搬車がサイレンを鳴らして回収 停電時間 が短 カン 備蓄病院に 办 · つ た所

度に殺到するためよく起こる現象である。庁舎入口の公衆電話と三階の支部事務局

の非常災害

帰宅していた職員たちも駆けつけてきて所内の整理にあたる。 段落したところで県の薬務

課に第一報を入れる。この間にも混乱している通話の合い間をぬって、医療機関からの供給依 頼が飛びこんでくる。十七時四十五分、十八時五十分、十九時、十九時二十分と立て続けにサ

イレンを鳴らして交通渋滞している中を供給に向かう。日はとっぷりと暮れ、全市暗闇に包ま

の一部に針の穴ほどの漏れ箇所を発見。毎月二回の試運転では異状がなかったのだが、震動に れている。十九時十分再度所内の総点検を実施。間の悪い時は悪いもので、自家発電モーター さっそく業者に連絡するとともに、運転をストップしてボンドを使用して応急修

理をする。さらに万一の場合に備えて、ドライアイス五十許を購入する。 この頃、いずみ一号車が県北の栗駒町の移動採血からようやく帰り着く。現地を十七時ごろ

こむ。無理なことは承知のうえだが苦しい時の神頼みの心境だ。「事情はよくわかりました。 る。しかし安心はできない。 た様子。暗闇の中、懐中電灯の光を頼りに後始末をして、翌日の準備を行う。自家発電をスト 労さん」と出迎える。車の中で心配してきた職員たちも、 出発の情報はあったが、その後連絡のとりようがなく安否を気づかっていたので、皆で「ご苦 ップしているので、冷蔵庫やフリーザーの温度はジワジワと上がってきている。ストップして もはや限界だ。エイ、ままよ、スイッチを入れて見る。幸い漏れはとまっている 東北電力仙台営業所に電話して、 センターが健在なのを見て一安心し 何とか早く復旧してくれと頼み

極力努力します」との返事。これ以上どうにもしようがない。

供給が続けられている。 くなる。明るいということは人の心をホッとさせるものだ。 るものである。さっそくコードをひいて螢光スタンドを点灯する。 気が付けば暗闇の中で苦労することはなかったのに。こういう時は、何か一本抜けてことがあ うこうしているうちにだれかが献血車の装置を利用して点灯しようと言いだした。もっと早く ţ١ ラジオは刻々被害情報や電気・ガス・水道・交通についての市民への注意事項などを伝えて もちろんこの間にも二十時、 断水するかもしれないというニュースも流れてきたので、皆で水のくみだめをする。そ 二十時十五分、二十一時四十分、二十二時三分と血液の緊急 一同やっとくつろいだ心境にな 一瞬事務室内はパッと明る

のようだ。零時五十五分緊急輸送一件。 二十二時二十分電気がついた。 自家発電は健在。 零時二十五分緊急輸送一件。零時四十分再び電気がつく。今度は大丈夫 東北電力さんありがとう。 しかし三十分ぐらいしてまた停

あわただしかった数時間が過ぎ、ようやく平常に戻る。必要な人員を残して非常体制を解除

(被災地) 仙台市昭和町二一三七)

#### 町内会非常時体制発動

下飯田町内会会長(当時)

Σk

塚

安次郎

った。水田の除草を終えて、長ネギを植えるその前に一ぶくと、午後五時ころ茶の間で家内と 災害は忘れた頃にやって来るとはよく言ったものだ。その日は曇天で時折薄陽の差す日であ

荒町の妹、嫁と四人でお茶を飲み始めた時、ゴーッと地鳴りがして揺れ出した。震度一くらい

微震

所を決めておき必ずそこに集まること」、「うちでは裏の畑が良いだろう」などと注意話をして いた時、再度ゴーッという地鳴り、バリバリメリメリと異様な様相。私は容易でないと直感し あまり地震は怖くないのでそのまま茶を飲む。「地震の時は先づ火を消す」、「家族で避難場

た。大声で「逃げろ」と叫んだ。 家内と妹は玄関に飛び出したが、上り口に転げ落ちて動きがとれない。「何をしているかッ」

柱が倒れかかる。私は二人を殺してしまうのではないかと思った。

の土壁が崩れ落ち、

必死の応急活動

町内を見ると煙が上がっていない。

火災が起きていないと直感した。

の三浦三男

中で二人を表に放り出した。 た。十数秒間の出来事である。 その時私は 崩れ落ちた モルタル 壁でけがをし、 額から 血が流れ

抱いて裏の畑にいた。火災の心配はない。オレの家はこれで良しと私は自転車を持ち出した。 れ 、小魚がピンピン跳ねていた。「だれかけがはしないか」と聞いたら皆無事。 地震がやんで家の中を見ると、 柱は折れ、家財道具は散乱、 前の小堀の水は道路にはき出さ 嫁は当年の孫を

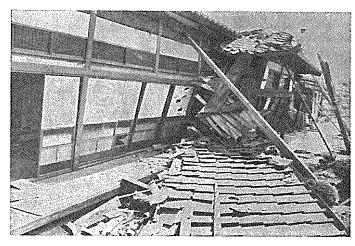
と言い残して町内下区に自転車を飛ばしたのである。 「この騒ぎにどこに行くの」と家内は泣き声を上げる。「町内を見回る。 二時間ぐらいで帰る」

けが人はないようだった。その時、下の方から私と同じように見回って来る男がいた。 けがはしていません」の声が返ってくる。三十四、五軒の家を見回ったが、 も大騒ぎ。怒る声、泣く声、なにがなにやらわからない。「けがは無いか」と叫んだ。「だれも 町内に着くとどこの家 家は崩 れ倒 副会長 れたが

副会長と相談し、ここで非常時体制を発動することに決したのである。 はなかった」、 との三浦さんの報告で、不幸中にも一応安堵した。 私は当時町内会長であった。

(現農業委員)氏。「私は下の方から見て来たが、家は壊わされたが、

人畜に被害



過分数の建物ほど被害が……..

る。

従って事前にその体制を整えて置く必要

め、その処置が遅れがちになるおそれがあ処するものであるが、災害後に設置するたいのため、そのつど対策委員会を設置して対

ありとのことで、昭和五十一年二月の総会に

のであった。組織の内容は、会長を本部長とおいて「非常時体制規約」が決定成立された

副会長は連絡渉外、生産組合長は救護給

身である。 与、土木長は現地指揮とし、その下に役員、 が絶対条件であった。今の自主防災体制の前が絶対条件であった。今の自主防災体制の前の発動は本部長で、すべてに優先すること

として火災の時)はその対策と相互の助け合記して見よう。どこの町内でも非常の時(主ここで下飯田町内会の非常時体制について

半壊五十四、その他倉、 億六千万円であるから、 置して、この調査に一言の苦言も言わず協力する役員諸公の姿に、 午前八時より各班現地を調査したのであった。 招集した。 暮地区は芳賀元治さんの手押ポンプで間に合わせた。 類に大きく分け、さらにこれを細分化して、坪数、 を配属したのである。 ついて南消防署六郷出張所長の庄子三千男さんと相談し、 私達も反省の要はあった。今まで災害を知らない。特に地震の被害がなかったので、 これを復元するには約七億五千万円の巨費を要する損害で、 調査の結果、 その日は給水の手配であった。下組は三浦幸一さん、 これを把握しなければ対策もたてられないので、 非常時体制に入ったことを宣言し、今後の対策のため被害調査を命じた。 班 町内二百二十四世帯中、 々長練生川順一、二班々長小島善之助、 調査の方法は居住、 ブロックべい等の全半壊四十三を数えるに至った。 五カ年分の収入が一瞬にして吹き飛んだことになったのであっ 居宅の全壊三十、 付属建物、その他 自分の家が倒壊し惨めな姿になっているのを放 建年、 被害調査をすることにした。その方法に 町内としてはどのくらい 上組は籾浦忠さんの自家発電機で、門 三班々長三浦三男、 半壊九十六、 被害程度を調べることにし、 十三日八時非常時体制による会議 **食** 当町内の 私は哀心から頭を下げた。 ブロックべいなど) 付属建物全壞二十三、 力 年 その下に役員 の総収入は約 の被害があ 組 屋根 -+-の三種 織 四日 五名 は三 の

いわゆる「過分数」の建物が町内にも

方を特別に飾り過ぎたきらいはあった。耐震性のない、

散在していた。そんな家ほど全壊の憂き目を見たのである。

ことは、非常時体制の発動によって町内民が心強く感じ、復興を早め、組織への信頼度を深め の連絡事項も円滑化し、特に税務関係に寄与するところが多かったと思っている。なによりな この調査資料によって、今後の家の建て方について種々参考に供されているし、 また役所と

たことであろう。

仙台市飯田字遠谷地九七)

### 緑ケ丘地区町内会連絡協議会活動

緑ケ丘地区町内会連絡協議会会長(当時) 海

昭和五十三年六月十二日午後五時十四分、私は犬のえさを作るため、台所でガスを使ってい

ちて来た。気がついたら私は三层ばかり離れた柱にしがみついていた。ガスを消さなければと た。突如グラグラッと来たかと思ったとたん、かたわらの食器棚から、 なにやら音をたてて落

やくゆれが弱まった機会にとりあえずガスの栓を切った。 あせったが、しばらくは揺れがひどく柱から離れられなかった。 何秒間位だったろうか。

そのとき私は完全に平静を失っていたとは思わないが、 あの何秒間かはどうにも動きが

んとれ

なかった。

のは、 が一つ倒れてガラスがわれていた程度であったので、ざっと形づけて家に戻った。 た。 グラッと来たらまづ火の始末とよく言われるが、ガスコンロにも震消セットの必要を痛感し 私の家は幸い地盤がよかったせいか、食器類の被害だけですんだが、一息して気がついた 建築間もないコミュニティセンターのことである。急いで行って一巡して見ると、

回りして事の重大さに驚き、 つかの間、 自分の家、 コミュニティセータンの状況から見て大したことでなくてよかったと安心したの 近所の情報、 ラジオの報道等により、どうも事態は重大のようである。 なんらかの対策をたてなければいかんと思っているうちに、 地域 各町

内会長より続々情報が入って来る。

丘町内会連絡協議会 ないことだが、 緊急に町内会長を招集し、対策を練ることになった。以下こんなことは二度とあっては 同じように町内会のお世話する方々のなにかの参考になればと思って、 (以下「連協」という。)のとった行動のあらましを、記録にもとづいて なら ヶ

列挙して見ることにします。



二次災害の恐れ続く緑ケ丘一丁目

陳情、

各町内会長に町内毎の被害状況を図面にし

河北新報社提供

とが判ったので、連協一体となって対処すべ 町内会個々の行動に委せるべきものでないこ **震対策緑ケ丘協議会を設置した。** 

しと言うことになり、さっそく、宮城県沖地

目的はとりあえず次のように設定した。

(1)二次災害の防止 ②被害住民への対策

二、六月十五日 (3)このため仙台市への連絡・陳情 被害状況を市に報告、

対策

急な実施を求めた。 てもらい、市対策本部に提示して、対策の早 このような市全域にわたる大きな災害の場

56

連協全域にわたって被害は甚大であり、

六月十四日

地震対策協議会の設立

七月四日、羅災者会の設立

合は、 況をより早く、より正確に判ってもらい、対策をたててもらうためにはこのような処置は大変 市自体としても人員の関係もありなかなか手がまわりかねるのが実態なので、 地域 の状

有効であったように思う。

六月十九日 仙台市緑ケ丘現地対策本部開設

市の調査と相まって連協の陳情も効あってか、

市の地震対策本部と別個に、

緑ケ丘現地

本部が設置され、二十四時間態勢で活動が開始された。

に行われ、 た災害の中にあって、 地域の中心部にいつでも相談にのってもらえる現地本部が設置されたため、 わ ħ われ のおそれた流言飛語等もほとんどなく、 平静に対処できたことは現地本部設置の最も大きな効果の一つだった パニックが起きても不思議でなか 市 の対策も適切

四、六月二十日、 市議会に対し請願書提出。 と思っている。

保等について請願した(六月二十四日採択)。 仙 台市議会に対し、二次災害の防止、 避難家族に対する住宅の確保、 小中学生の通学路

続けてきましたが、この地震対策は被害の規模よりみても相当期間かかるものと考え、 この間、 居住不適当と見られた宅地二十数戸 .の集団移転の問題もあり、 常 に市や県 定と折 単に連 渉を

協としてだけでなく、さらに地域の範囲を広げた組織をつくって息長く対処すべきであるとの

立した。

考え方から、

連協主体の対策協議会を発展的に解消、

その願いをこめた実現目標は

- (1) 二次災害防止に万全を期すること

地質調査の結果を速かに報告すること

(4) 災害復興住宅資金の貸付限度額を引き上げること

民間住宅建築にかかる既貸付金の返済猶余等の救済措置を講じること

(3)

(2)

- (5)災害援護資金の貸付対象の拡大をはかること
- 地震保険制度を改善し、 全壊、全損に至らなくとも適用すること
- (7)(6) 防災集団促進事業費国庫補助制度等を充実すること、等であった。

六、羅災者会の活動

ることになるのですが、 羅災者会の活動は昭和五十五年十一月十八日に解散するまで二年四カ月の長期、 紙数の関係もあるので極く簡潔に記載します。 多岐にわた

(1)上京陳情 五回

市や県も国会をはじめ各関係省庁と折衝されておられましたが、 われわれ被害住民とし

新たに宮城県沖地震緑ケ丘羅災者会を設

も県・市と一体になって訴えるべきであるとして前後五回上京陳情しました。

造成によるものであるとの結論を得たので、 なお緑ケ丘の場合被害が他地区に比べ著しく大きかったのは、 東北の造成開発会社に対しても交渉、干七百 造成業者のずさんな土地

ţ 仙台市・宮城県との折衝

延三十回を上回りました。

五十万円の見舞金をかちとりました。

羅災者会役員会など

各町内会における数えきれない話し合いの他、

羅災者役員会は百二十回を超えて持たれまし

むすび 緑ケ丘ですすめられてきた災害復旧事業の特徴は、現行制度を最大限に活用して実施した事

た。

業といわれています。その結果、これらの事業は今後都市型災害復旧対策に新たな道を開いた ものと評価されています。こうした中にあって、 連協の対策協議会また羅災者会が二年数 カ月

にわたって活動を続け、 羅災者および地域住民の協力と連帯を基盤にした団結であり、復旧、 その目的を追求し続け、 復旧に邁進できた大きな原動力になったも 再建の課題

と要求を達成するため、広く各界に応援と協賛を求めた住民運動にあると思います。

す。 れなかった国会、県会、市会議員各位の積極的活動が連繫したことであると感謝しておりま

第二に、市民生活の再建を最優先に取り組まれた市当局の姿勢と、住民運動に援助を惜しま

(被災地 仙台市大塒町二一二八)

### 「復旧の見込みがない」との連絡

東北電力㈱仙台営業所次長 (現東北電力㈱配電部長)

深 井

保 夫

誌に綴った私の編集後記の語りです。二度と体験したくない自然の暴威に対する冷静時の言葉 でした。 動であると考えます」とは、 私の前任地の事業所(東北電力㈱仙台営業所)での地震反省記録

「地震の発生防止はできないが、それによる被災を最少限度にすることは私どもの叡知と行

そうです。 あの時は……。

としか言いようのない視野でありました。

のです の社員はパニック寸前の態となりました。 きく揺 の幹部会議があり、それに参画していたのでした。隣接の十七階建の高層ビルがものすごく大 前 触 れる。 れと思われる大きな揺れが数分間続いたようでしたが、 (生れてはじめて地鳴りというものを体験しました)。この時、 ッという感じの不気味な重々しいうなり声のようなものが一段と度を加えたと思った 何の音だ。 グラグラという感じで弓のようにしなる。近所からガツンガツンとすごい音が聞 室内のテレビ、 書架、 ロッカーなどが大音響で倒れ退社間近の約三百名 足の下から、 私は 四階 地の 底 の部屋で所内 から響

防車 *\\* 時 左右に大きく首を振り、 構内はどうか、 の所内動員を指示した。安全帽を被り災害対応の服装 尋常でないと察知した私達は、直ちに社内の災害対応規程に則っての非常体制を発令し緊急 訓示が夕闇 のけたたましい音が響き、 の所内に厳しく拡がって行きました。 街はどうかと外へ飛び出してみると、 電線はのた打つように揺 遠くに救急車の音が吠えるようにうなっている。 ñ 近所のビル 余震もあってか地面は波打ち、 での 所長、 の窓から 配電課長 ú 白い の 煙が噴 "大変なこと "全所員に告 電柱 畄 し消

<

害の長期戦の構えの部署配地体制と関連の早期の手配(全配電線の緊急巡視、 の給油など)へと手分けしてあたったのです。 食糧確保、

ラジオが繰返して「……電柱が倒れて死亡者が出た……」とのニュースを流すものだから、

り、 吊られた形になるんだから……そんなことが起きるわけがない……」と自戒しながら関係者を 現地に飛ばせてみたら電柱でなく門柱の誤報。こんな類の情報、 上位機関、報道機関より真偽の問合わせが喧しくあり、「そんなことあるかク、電柱は電線で 市民のパニックに近い心情が写し出されてきたのです。電気を早く灯けて市民生活に光を 問合わせが幾十、 幾百とあ

に電気屋の使命観と達成観をあらためて思い出させてくれました。 をその夜の十九時四十分国分町方面からわずかの電気を分け合うようにしてできた時は、 すかに確保された送電線で山形県、 福島県からの電気の転送があって "地震後の初点灯"

注入してやりたいと心は急ぐことしきり。

通信号機にかかる点灯見通しのやりとりの対応があり、 期待されているのが読めるものだから

私の分掌からラジオ放送局との停電状況、復旧見通しの対応と県警交通管制センターとの交

軽はずみの返事もならず、芯の疲れる寸分毎の応接が続いたものでした。

がどこの市へ行けば電気が灯いているか」、「電気温水器のタンクが地震でずれてパイプが切れ 県北の人から「急病だがどこか電気の灯いている病院はあるか」、「新聞記事を送稿するのだ

(仙台市内で) 停電解消に懸命の作業が続く 河北新報社提供

に地盤の弱かった市内の東南部地域、 の応援を含め稼動延べ人員二千四百名、 地震発生二十四時間後に復旧点灯が八十五哲にも達したことが示すように、他県からの多く 機動力四百六十台の力を得て復旧作業にあたった。特 部の団地などは遅々として復旧の芽が見えないよう に、電柱一本毎に多大な被害

があったのでした。

じられる差し追った要望、意見の続出でありました。

たが修理店は」

新潟地震

(昭和三十九年)、 等々の問合わせ。

十勝沖地震

(昭和四十三年)

になかったような時代差が

強く

感

終生忘れられません。 夢でありました。この衝撃は 給の早期化のために闘った同 四分宮城県沖地震は全くの悪 十三年六月十二日、 汗を流し、 震度五、M七・四、 ともに助け合って電気供 神経をとが 十七時十 昭和 五

(被災地 仙台市中央四一一一六)

#### 一一三番へ問合せ殺到

仙台電話

周

倉

巨宏

宏佳

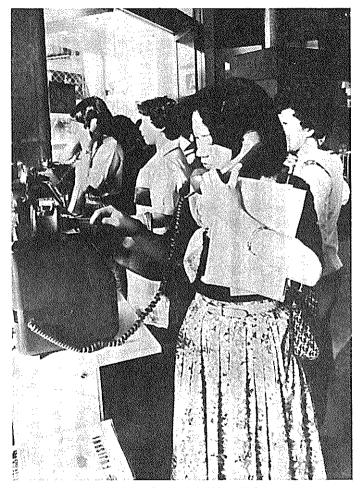
異常な音とともに地面が揺れだした。マグニチュード七・四という仙台市はじまって以来の大 た。時間にすると数分くらいの短い時間であったが、だいぶ長く感じられた。 動であった。自分は危険を避けるため、近くの壁に身体を密着させて地震がおさまるのを待っ 地震となった。これが宮城県沖地震である。榴ケ岡電話局のビルが今にも倒れそうなすごい振 昭和五十三年六月十二日十七時十分過ぎ、私は家に帰るため自転車置場に行った時である。

地震がおさまってからあたりを見わたすと、局の建物のモルタルが数個所にわたり落ちてい

自動車、バスもストップし、交通信号も止まっていた。通信設備に異常が

た。自転車は倒れ、

### 第一部 必死の応急活動



安否を気づかって公衆電話に人垣が

河北新報社提供

生じたのではないかと思い、すぐに電話局に戻った。

ŋ, すると交換機能がマヒし停止してしまう。そのために発信と市内外の通話を一部規制し、 多くなったため交換装置のヒューズがあっちこっちで飛んでいるという連絡が入り、交換室に たため交換機がマヒし、 お客様の申告内容から考え、地震の振動で受話器が外れ、 申告問い合わせであった。この時間帯だけで受付した件数は通常の約八~十倍に上った。この が地震で床に落ちて壊れ使用できない、街頭公衆電話が停電のため使用できない等多種多様な きない、壁に亀裂が入り家の中の電話線が切れて使用出来ない。三店先に置いた店頭公衆電話 ため受付手配を皆で手分けし、少しでも早く復旧するよう努力した。 い、市内外へいくらダイヤルしても話し中である。口電話器が家具等の下敷きとなって使用で の応対に従事した。一一三番への申告問い合わせを見ると、⊟受話器を上げるが全々通じな 後片付けをしたり、自宅へ連絡したりした。中には被害がひどかった者もいたが、 整理棚等が倒壊していた。地震発生が退社時間の数分後であったため、全員が局に戻 また市内外から家族や親戚への安否を確かめるための発着信と重なり「呼」が増大し (電話故障受付)への申告問い合わせが増大して来たため、一人も帰らずに一一三番 ヒューズを入れても負荷が大きいため、すぐに飛んでしまう。 通信設備の機能を果たさなくなった。一方、交換機が異常に発信呼が 発信状態と同じ現象となっ 一度に 「呼」が殺到 たものが 次第に

既に午後十一時を回っていた。 くなってからではあったが、少しづつ回復の兆しが見えてきた。職員一同胸をなでおろした。 考え報道機関に要請し、 でおりますので少し時間をおいてから電話をお掛け下さい」とPRを続けた。その結果、 時的に通信状態が緩和された。 テレビ、ラジオ、電話局広報車等によって「ただいま電話が大変混ん 再度「呼」が殺到したため、 電電公社として最悪の事態を

な通信状態を確保することとした。

理するよう要請した。直ちに修理班が現場に直行し、修理に当った。故障のあった回線に収容 験を行った結果、回線が数回線断線している事を発見した。すぐ修理部門へ連絡し、早急に修 修理に当った。 により完全復旧するまでに約一週間かかった。非常に長い一週間であった。 してあった回線を良回線へ切り替え、 が通じなくなった旨の連絡があった。すぐに東警察署に通じている加入者回線を調査し回線試 ないもの等があり、 客様からの故障修理については、少し電話が破損したが使用できるものと、 発生した件数があまり多いため、修理に苦労した。この中で東警察署から電話 仙台電話局として早急に修理、回復等を行うため各方面から応援を受けて 回線試験を行い無事適話ができることを確認した。 全然使用でき

類中す

障が生じてくる。互いの安否を気遣うあまり、手っとり早い電話を考えてしまうため、

ガス、交通機関等がマヒするのと同じように、電話設備にも故

災害が起こると、電気、水道、

発生した場合お客様の協力が必要となってくる。円地震の振動で受話器が外れた場合早急に電 るのは当然と思う。電電公社として少しでも良好状態で電話を利用していただくため、災害が

強い交換機の開発と、電話局からお客様宅に通じている電話設備等にも一層力を入れ、災害に することなく良好な状態で電話を利用することができる。これからの電電公社として、災害に 定し利用してほしい。情報等を連絡する場合代表者を決めてリレー式に連絡するようにしてほ しい。このことをお客様一人一人守っていただくことで、災害が発生した場合通信設備がマヒ 話機に掛けてほしい。口事業所等で全員が同時に電話を使用することなく交替で電話番号を限

遭っても安心して電話が利用できるよう努力していきたいものと考えている。

(被災地 仙台市一番町二—八— 1)

## 信号機の恩恵を今更ながら痛感

城タクシー幽

宫

橋

訚

助

幸

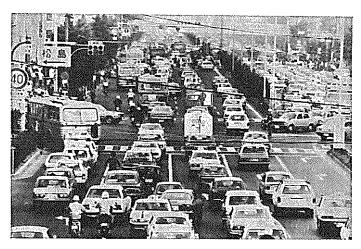
沢氏からの電話である。「幸助君地震の時出番だったさな、あの時のこと原稿に詳しく書いて ばにいた息子が応待に出た。 「おとうさん会社の人から電話」 私が受話器を取る と大先輩の 柳 昼食をすませ、テレビのドラマに見入っていた時、わが家の電話のベルが鳴り響き、 窓のそ

くれや」とのことだった。

震の写真が大見出し入りで紙面狭しと全面に載り、私の記憶を甦らせた。 教訓」を出し、それに目を通した。そこには昭和五十三年六月十二日午後五時十四分のこの地 ので、私の重要書類入れから当時の河北新報と河北新報社発行の「宮城県沖地震、 がこの宮城県沖地震で全国的に有名になった「緑ケ丘団地」の住民であり、家を失った一人だ ったことを思う時、 急なことなので返事にとまどったが、忘れかけていた三年前のことを思い、そして彼柳沢氏 私は忘れかけた配憶を探ることにした。まず当時の日付がはっきりしない その記録と

違った異様な振動に気付いたのです。それはちょうど大きな波に揺れ動く小舟にでも乗ってい 性の客一人を乗せ、たしか仙台ホテル前より電力ビルまでの区間を走行中でした。ちょうど東 二番丁グイエー前を右折しようと交差点内に入ろうとした時のことです。普通の車の震動とは 私は出番なのでタクシーで青葉通の新緑の木々に傾きかけた太陽の日ざしを浴び、

てグリーンベルトに駆け上ります。前方の富士銀行のビルのガラスは見るまにひび割れを生 るような錯覚を覚えたのです。前のバスも見事なローリングを繰り返し、歩道の通行人も慌て



信号機の恩恵を今更ながら痛感,

河北新報社提供

人々の叫び声もひときわ高く、

私の命もこれ

は今にも覆いかぶってくるように揺れ動き、

じ、見上げるような巨大な建物

までかと思わせる一瞬でした。

まもなく緊急自動車のサイレンの音もけた

(倒壊や道路の陥没がいくつもあり、恐怖を表さえ進むことに困難をきわめるようになりまさにつれ不安と動揺を隠すことができませんでした。 ボら渋滞で時折進む街並みを望むと、ビルのがら渋滞で時折進む街並みを望むと、といのでした。

すぐ家に帰るように」と指示していた無線も

わさずにはおれません。先程まで「柳沢さん

「ダイエー」

をかみしめたのです。

私

は四月より十月まで、

l

目より亘理までの客を乗せ渋滞のバイパスを南へ向かったころ、「停電のためガス補充ができ ない」旨無線が入った。 感度が落ちてしまった。 かったろうか。 信号機の恩恵をこれほど強く感じたことは今までになかったろう。 ちょっと気になる。 私の車は仙台バイパスを横断するまで一時間 そして六丁

入れたが、不通である。私の胸に不安がつのる。会社までの帰路にあるわが家に急いだ。 とができた。しかし、 軒並みに電灯の消えている不安を胸にしながらも、 はろうそくの火がほんのりとともり、 か。 タンドでようやく買い求めて来たところだった。私は家族の無事を知り、 走行する車がライトを点灯するころ、家のことが心配になってきた。 車中で上がるように指示が出た時ホッとした。 要が懐中電灯の乾電池を求めに電気店に行ったが、 会社に辿りつき、こゝで柳沢氏の家の倒壊を知らされ、 満二歳になったばかりの娘がまだ恐怖におびえ泣きじゃ 家族の無事だったことに安堵を見つけるこ 客を目的地まで運び、 すでに売り切れ、 夜七時近くだったろう 帰る途中家に電話を 一路会社に急いだ。 地震の恐ろしさ ガソリンス 家で

勤していますが、この日も納金をすませ、自転車でわが家に急いだ。道路はまだ信号機が作動

自宅より会社までの六ちの道程を、省エネと健康増進のため自転

車

ないため、渋滞は予想をはるかに超えていた。私はその渋滞の間を強くペタルを踏むことが

できた。家に帰った時、妻は台所の整理に追われていた。幸いにわが家には大きな被害もな

く、胸をなで下ろしたものです。

被害があったのです。 壊、そのために押しつぶされた農業機具や乗用車、トラック、あるいは墓石の倒壊と、多数の 然とするだけでした。わが家のそばでも、ブロックの倒壊、石垣の散乱、農家の作業場の倒 む足走る悲鳴」「ラッシュ時恐怖の一撃機能マヒ仙台大暗黒」と地獄と化した写真にただぼう 翌十三日の新聞には「M七・五強靂仙台圏を直撃」「薄暮の街に突如情け無用のツメ跡」「すく

今は再びあのような地震が起きないように、また、二十七人の犠牲者の冥福を祈るのみで

す。

(被災地 仙台市一番町三)

## 無我夢中で乗客を避難誘導

仙台鉄道管理局仙台駅改札

木

昭

吉

四、五分ごろだったと思います。突如ものすごい音とともに、改札ボックスごと私の体が吹き 六月十二日、私は改札業務担当として二番ボックスで 改札中でした。時間 は確か 十七時十

飛ばされそうになりました。何事であろうかと驚きましたが、まさか地震とは思いませんでし

ボックスの中に身体を埋めました。あたりを見るとどうだろうか、 とともに揺れ動いています。それを見て、私は、はじめて大地震かと感じ身体が動かず、改札 た。瞬間なにげなく後をふり向くと、駅舎の天井や柱が大きく斜めに傾きながらものすごい音 通勤、 通学生のお客さん達

は頭に手やかばんをのせて悲鳴をあげながらコンコースへと、あるいは改札口わきの柱のそば 突然、急に「バリバリ」と大きな音響とともに天井が破れました。天井板があちらこちらに

へと、右往左往。その人々でいっぱいでした。

飛び、改札口前の天井からは水が滝のごとく吹き出して、さんたんたるありさまでした。

るお客さん達を、どこをどのようにして安全な場所へと避難誘導したかは今となってはあまり

私はそれから、お客さん達をどうしようかと、無我夢中でした。改札口付近に立ちすくんでい

あたりを見わたすと、まだ頭をかかえて立ちすくんでいる人、しゃがみこんでいる人など、 記憶に残っていません。気がつくと、とにかく安全な駅前広場に立っていました。ほっとして

七、八十人ぐらいはいたでしょうか。このお客さん達の中に、もしや避難途中に落下物などが

当りけがをした人がいるのではないかと思いお客さん達に尋ねたら、幸にけが人は一人もな 本当にあの時は安堵しました。

のでその案内のために、全員必死の努力で応対にてんやわんやでした。大地震の後だけに、国 旅行者のお客さんで改札口前は黒山の人だかりになっています。全列車は完全にストップした 地震発生から約四、五十分ぐらいして職場に戻ると、時間が時間だけに通勤、通学生や一般

時間がたつにつれて家族の安否を気遣うお客さんの顔に不安の色が濃くなり、その日はお客さ 鉄のダイヤばかりでなく、停電そして電話の不通で、トリプルパンチの大混乱となったため、

んへの応対に無我夢中で、 生をうけ五十歳にしてこの大地震に遭遇したショックがあまりにも大きく、いろいろとその 一体どのように一夜を過ごしたかはあまり記憶にはありません。

当時を振り返り、記憶を引き出そうと努力しましたが、これ以上どうしても浮んできません。

るのではなかったかと思います。 私の実感として、この体験から常日頃からの防災訓練等がもっとも大切ではないかと思いま お客さんそして職場の人達も、一人としてけががなかったのが、不思議なくらいといえ

す。わが仙台駅においても、その対策として、本部長を初めとして消火、誘導、救護の各班を な大惨事の起こることのないよう心から祈りつつ、今後も訓練に励んでいきたいと考えていま 事ある時に備え十分に機動力を発揮できるよう力を入れています。私は、 独自の防災の日を設定し、駅ビル(エスパル)とともに協力体制をとって訓練を実施 二度とあのよう

(被災地

仙台市中央一一一)

す。

### 地震のため全列車ストップ

仙台鉄道管理局仙台機関区長

その時、私は東北本線上を走る急行電車の運転室にいた。運転していたわけでなく、一ノ関 (現仙台鉄道管理局機関車課長) 间 穰

ンドルを握る運転手の切迫した声が発せられた時、電車は既に停止寸前であったが、

が、目に見えぬ巨大な手で動かされるように、一斎にゆすられるのが視野に入ってきた。

「地震だ!」

異常な左右動に、思わず手すりにしがみついた。窓の外では、

構内に張りめぐらされた架線

最初の停車駅である石越駅にさしかゝった時だった。突然、車体を突き上げるような動揺と

運転室に添乗し仙台に帰ろうとしていたわけだ。

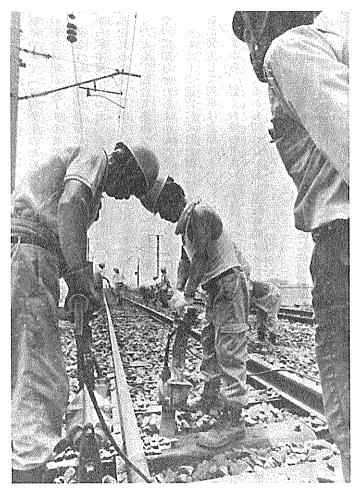
で用務をすませた後、

に止まるまでのわずかの間、 頭上のパンタグラフが架線から外れはしないかとハラハラさせら

れた。

76

### 第一部 必死の応急活動



懸命の復旧作業

河北新報社提供

駆けつけて「地震発生のため管内全線にわたって、すべての列車がストップしています。 停車後、全信号機が消灯し、架線への通電も途絶えているのが確認できた。まもなく駅員が

の安全確認が完了するまで待機して下さい」と伝えた。

運転士は長時間滞留に備える電車の措置を行い、私は機関区当直と連絡をとるべく、 運転室

やって知らせたらよかんべ?」「ここからバスは出てねのすか?」。 んだども、仙台で連絡つくんだべか?」「仙台駅で息子が迎えに出てるはずなんだけど、どう 私を見ると交々質問を浴びせてきた。「この電車、何時までとまってンのしゃ?」「山形さ行ぐ から駅本屋に向った。ホームには電車から降りた乗客が三々五々たむろしており、 制服制帽の

多少遅くはなるかも知れないが、運転再開はあるものと思い、事態をそれほど深刻にはとらえ しますから、暫くお待ち下さい」と言いつつも人垣を分けた。その時、私自身皆と同じように 震が発生して列車は全部ストップしています。線路の状態を確認して、安全とわかったら運転 それぞれの途方にくれた顔に答えるには、その時の私は余りにも情報が不足していた。「地

瓦が大分落ちましたが、幸いけが人はありません。長町の構内がひどくやられて、路盤が沈ん うだ?」「詰所の柱が折れ、天井が落ちて相当な被害です。ロッカーがほとんど倒れて、屋根 ようやく駅本屋にたどりついて、機関区に鉄道電話を入れた。「――そっちの方はどんなふ

ていなかった。

開通見込はたっていない―――

だり車両が脱線している模様です。 公衆電話がな いる列車がかなりあって、早く乗務員を引揚げたいのですが、乗客の代行輸送との関連もあっ かなか通じないので、 道路の信号機が現示せず、タクシーが動いてい 職員の出勤手配が思うようにいきません。 途中に止まって ないうえ、

に駆られたものの、 .想をはるかに超える状況に仰天すると同時に、 結局どうすることもならず、職場にいる人達にすべてを委ねるしかなかっ 一刻も早く機関区に帰らねば、 という思い

て、具体的方策はまだたっていません――-」

た。 石越駅前には食堂や旅館が二、三軒ずつと、 雑貨食料品等を扱う店が並んでいる。 店頭にあ

オールストップ、高速道路、 るテレビが地震関係の特別番組をくんで、刻々入る情報を流していた。 ----関東大震災並みの震度----』「----仙台市内のビル倒壊多数-----」「----交通機関 国道も全面通行止め――」「――国鉄も全線にわたってストップ、 は

画 面 は惨めにつぶれたビルや家屋を、 割れ散らばった硝子に埋まるショ ーウインドを、 地割

れ陥没の生々しい傷跡を次々に実写していく。今こそだれもがこの地震の規模の大きさと影響 の深刻さについて知らされた。たちまち付近の電話という電話の前に人の列ができた。 これがさっぱり通じないのだ。あせってあっちの電話、こっちの電話と走り回る人もいた

が、結局徒労に終るしかなかった。私もむだと知りつつも幾度か自宅のダイヤルを回したが、

話し中のブザーがむなしく返ってくるのみであった。家族よ、どうか無事であってくれ、今は

ただ真摯な祈りをもって、神仏にすがるしかないと思われた。

況がわからん)と騒いでいるそうだ。ここと連絡はとれているのか?」と質す。駅員が近郷近 る。そこえ警官が二人やってきて「この先の橋梁上で停まっている列車の乗客が(さっぱり状 駅では一部の乗客が「代行輸送の計画は一体どうなっているのか?」と駅長に詰め寄ってい

乗客のために毛布が渡された。車内では皆、喋ることもなく、ぐったりとして、ただひたすら に時間が過ぎるのを待つかのように眼を閉じていた。

在からやっとかき集めてきた牛乳とパンが乗客に配られる。夜が更けて冷えこんでき、幼ない

(被災地 栗原郡若柳町石越)

でトイレの中に逃げておりました。

室で夕食をしていました。十七時ごろ弱震があり「アック地震だネ」と言いながら洗面所へ

私は、昭和三十九年の新潟地震の時と同じように、

休憩

今から四年前の宮城県沖地震の時、

入った途端、すごいゆれが来て、「〇〇さん地震ダク怖い」、と言いながら、いつのまにか二人

## 地震の夜、駅のホームでは

鉄道弘済会仙台駅販売員

村

重

子

す。急いで後片付けをして、職場に戻ってみると、列車通勤で代替交通のない人達が、真暗闇 の街のあちこちから灯のついている仙台駅を目指しゾクゾク集ってきており、すごい人込みで 気持を落ち着けてから室に戻ると、案の定ポットはひっくり返り、湯は畳にこぼれておりま

す。駅舎の正面が黒山の人だかりなので、柱でも倒れたのでは、けが人かな、と一瞬ドキリと

しましたが、天井から水が流れており、その後仕末をしているということでまず一安心。

81

時すでに遅しで、酒びんの破片とこぼれた酒の上にタバコや菓子が飛び散り、足の踏み場もな や冷蔵庫の飲み物が横揺れのため飛び出すすごい音でわれに帰り、慌てて手で押さえたものの その他の品は全部床に散らばって手がつけられません。ホームの店では、棚の酒が落下する音 を広げて酒びんが落ちてこないようにしたという勇気のある方の話やらなに やらを聞きなが 後仕末に懸命でした。私の担当の店の酒びんは一本の破損もありませんでした。ただし、

5

山で、売るものもなくなりましたので、パン、牛乳、卵など食べ物は何でもと思い、他の店か ビスをと思い、 店の方は初め両替で忙しかったのですが、駅で一夜を過ごすことになった人達の次に考えるこ 駅に到着した人は、まず家族との安否確認のため赤電話に殺到し、長蛇の列です。そのため 食べ物の確保です。気もあせっておりましたが、早く店内を片付けてお客さんへのサー 箱詰めの笹かまや菓子類もバラ売りから始めました。たちまちのうちに空箱

そうです。

カゝ

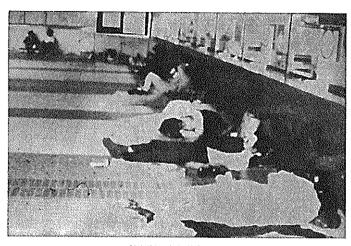
ったとのことでした。停車していた列車も、まるで小舟が大波にもまれているように見えた

しょうか。商品の確認がどうという事務手順より、サービス第一と声を掛け合いながら、 退社した事務の人達もみんな途中から戻ってきての応援です。階段の上り下りを何回したで 協

ら運ぶことにしました。

店内に入るとお互いの第一声は、「けがはなかった?」「大丈夫でしたか」と元気な声。両手

### 第一部 必死の応急活動



仙台駅で夜を過す人達

物はないか」「夕食にありつけない」という 後の方に分けて下さい」とお願いしながらお うお客様がおり、そのたびに「すみません、 ことでしたが、パンなどは一人で何十個も買 ましたが、 お客さんには恐ろしくなってしまいました。 を争って大きな声で怒鳴り合っている必死な 客同士の了解を得て販売しました。でも、 から来たという宿泊者の方も、「何か食べる が、これも全部売れてしまいました。ホテル いのに、と私達は心配して店出ししました どうやって食べるの?」しょうゆもはしもな 宿泊室へ帰る道は真暗、 すでに八時を過ぎ、 夕食も食べず働きました。 勤務の終える方もあり 戦時中の空襲を思

コンニャク、豆腐だけになりました。「これ力し合いました。最後には品物がなくなり、

身に戻りました。公衆電話では『簡単に話して下さい』、「後がつかえてます」と、大きな声が い出しました。事務所も真暗です。まず我家へ電話をし、「何でもなし」の声ではじめて わが

飛ぶ中で、話も通じなかった人もいたようでした。

まま準備している人、手さぐりで布団を敷きパジャマに着替える人、地震の恐怖を夢中で話し 水も出ませんので化粧水で顔を洗う人、今夜もう一度地震が来るかもしれないと制服を着た

てる人とさまざまでした。

まで」の会話でお土産を買って下さった時はみんなで「ありがとうございました。お疲れさま た。ガス局応援の関西方面の方々が店に寄られた時に「もうガスがつきましたか」「おかげさ わが家に一週間ぶりにガスが通った時は、体から消しゴムのようにボロボロと垢が出まし

ありましたが、私達の店は被害が少く奇跡に思えます。今になって思いますと、 建築中の家がペチャンコになったり、門柱の下敷きになった方など各所で、 いろいろ被害が 地震の前まで

でした」と一段と声も高くなったようでした。

ものですが、地震後には一匹も見当らなくなってしまったことが不思議に思えてなりませんで は駅の電灯に蛾が非常に多く集まり、朝、店に来る途中、死骸がいっぱい落ちていたのを見た

私達は、自分達で思っていたより冷静だったのではないでしょうか。けが人もなく、本当に

その時、

なり、

よかったと思えてなりませんし、 貴重な体験となりました。

(被災地

仙台市中央一一一)

### 売上金を袋に入れ屋上へ

藤 食堂社員

(株)

沢

昭

子

宮城県沖地震の時、私は仕事で藤崎デパート七階食堂のレジにおり、一回目グラッときた時

レジ台にすがるのがやっとでしたが、それでもしっかり力を入れつかんで立っておりました。 は「あっ! 地震だなあ」と思っていたら、まもなく大きくグラグラときたので、びっくり。

課長が、「火を消しなさい!」と、声を掛けに来ました。するとホール全体が、暗く

お客様は、慌ててテーブルの下にもぐったり、夫婦で食事をしていたお客様は、びっく

りして奥様をおんぶし屋上の明るい所に逃げました。 通路にはサンプルケースの中の小皿やカップなどが散らばり、 屋上からは水が流れてきて、

足の踏み場もなくなりました。私も売り上げ金を袋の中に入れて、屋上にまず避難しました。

落ち着いてから、お客様を出口まで無事誘導し安心しました。

帰宅の時です。中央通りに出て、家に連絡をとりたくて公衆電話を探すと、どこの電話ボッ

クスも人でいっぱいで、かけることもできませんでした。

家のことが気懸りになりながら南光台行のバスに乗りましたが、信号機の使用不能などによ 交通は大変な混乱となり、家まで二時間以上もかかってやっと着きました。

今度はわが家です。足の踏み場もないありさまで、おまけに電気、ガス、水道もストップで

なくなり、悲しくなりました。 す。その夜の食事は、しかたがないので、買い置きのパンを食べました。なんとなくもの足り

で運んできました。その時、水、ガス、電気のありがたさを、つくづく感じさせられました。 次の日から卓上ガスコンロ、ろうそくを準備し、井戸のある家からポリバケツに水を頂き車

(被災地)仙台市一番町三―二―一七)

### 3 ーケースが走っていく

廫 社 員

(排)

村

和

子

止むでしょうと、安易に考えていたのが大まちがい。次にきた地震は、底から突き上げられる などをしていた時なので、 しがみつきました。だいぶ長い揺れに感じられました。夕方なのでお客様も少なく、 その時私は、Fデパートの四階勤務でした。立っていてもふらふらとし、すぐカウンターに お互い顔を見合せ、「地震だわ」などと言いながらも、どうせすぐ 商品整理

れからもう三年も経ったというのにその時の恐怖は今でもすぐに思い出されます。

今でも地震があると、タンスや上の物が倒れてこないようにと無意識にしがみつきます。

ケースがまるで足がついたよ

いや

うに走って行きます。照明用螢光燈が、地震できしむたびに「バリーン」と壊れて斜めに降っ

もっと続いたのかもしれません。そのたびに赤電話がふっ飛び、

ように一瞬立っていられなくなり、「うあ!」これはすごい」と思いました。二、三回、

てきます。もう売場も通路もなく、ごちゃごちゃです。不思議に皆の (きっと騒いだのでしょ

うが)騒ぎ声が記憶にないんです。

日頃の訓練のたまものか、直後に誘導班が開始し、幸いお客様にけがもなく、 無事避難され

害になったと思いました。家にたどり着くまですごく心配でした。家族は無事だろうか、家は 大丈夫だろうかと。 変。普段三十分のところが三時間もかかり、途中外を眺めれば、仙台市内がまっ暗。大変な災 暗い明りの下での後片付けが始まりました。早めに帰宅を促され、バス停に立ったらまた大 それからが大変です。店内は足の踏み場もなく散らかり、そのうえ照明が断たれ、 予備燈の

なかったということでした。 驚いたことに、家にたどりついたら停電にはなっていたが、地震で物が壊れるようなことは

混乱になることを知ったからです。冷静に各地の状況を知れば、慌てる事なく対処できるもの しとかにすぐに行かなければと焦りの気持をかりたてられました。そんな時、 が動転し、バスの中での人の話しの中で、食料の確保とかいうことを聞かされると私も買い出 た。というのは、店内の状況やバスの車窓から見て、宮城県全部がこうなったのではと思い気 この時感じたのは、正しい情報と状況を知ることが、災害時には最も大事だということでし 一つのデマで大

た。

仙台市一番町三―二―一七)

# とにかく助かりたい一心だったが

(排) ダイエー仙台店社員

齌 藤

夓

子

昭和五十三年六月十二日午後五時六分の前震に続き、同五時十四分、震度五の強震が突発し

家屋の倒壊と、五〇〇棟 死者 二十七名 負傷者 一〇、九六二名

県の調べによると、この瞬時に宮城県では

罹災者 二九、三八六名

の傷跡を残し、更に電気、ガス、 水道の使用停止、 道路の陥没等

二、六八七億六、四一四万円余の大惨事となった。

。のどもと過ぎれば熱さ忘れる』の如く、同年二月二十日にも、震度四の地震が発生した記

憶はもう既になかった。

年に二度も大地震を体験した私達ですが今回の宮城県沖地震を教訓に、日頃地震発生時の

心構え・対策を考えている人は何人いるでしょうか。

この日、この時、 あなたは、何処で、何をしておりましたかク

私は、 ㈱ダイエー仙台店の地下二階食料品売場、 酒類コーナーのレジを担当して おりまし

た

当店は全国的にも有数の防災設備を有しておりますが、やはり地震となると被害を免れるこ

とはできませんでした。

急に大きな揺れに足をとられたと思うや、酒びん、 缶詰類等の商品が陳列棚から落ち始めま

した。

が、 のなすべきことを忘れ、とにかく助かりたいという一心でした。ところが、ふとわれに返った 私達は日頃から、 いざ その場に立たされてしまった私は、足がすくみ、自己本意的な衝動にかられて自分 火災、 地震等緊急事態発生時の措置について教育を受けてまいりました

もう既に男子社員はお客様の避難誘導に取りかかっています。私は、自分自身が恥しく思

同僚

不安のあまりに泣きだす有様でした。

導にあたることができました。 逃げまどうお客様の姿を見て気を取り戻し、やっとの思いで社員としての義務たる避難誘

通はマヒ状態で三時間を要し、ようやく部屋に着いたのですが、 ら国鉄を利用して通勤している同僚四人をみかねて、 度に電話に殺到したため不通となり、何度ダイヤルしても通じません。 あきらめる ほ その後、 とにかく部屋まで帰らなければと気がはやるのでした。部屋の状況も不明のまま、 仕事を終えた私は、 家族や部屋のことが心配で、電話を手にしたのですが、 私の部屋に泊めることにしたのです。 途中、街の灯は消え、 街全体 市外 皆が か は な

が孤立した様子を見ていたので、部屋に入るのが恐しい気がいたしました。

か

ない状

間 こぼれ落ちてしまいました。部屋に置いてあるタンスなどすべてが倒れ、ガラス類は割れ、 の踏み場もない状態だったのです。 やくあけたのです。ドアを開けるや、部屋の様子があまりにも無惨なのに驚き、 態だったのです。 Ъ 部屋のかぎを開け、中に入ろうとした時、驚いたことに、ドアをいくら押しても開 かかり、 なんとか寝る場所だけを確保した状態でした。その後も余震が続き、 私は、 ドアを壊してでも中に入らなければと、 私達は、仕方なく懐中電灯一本を頼りに、 同僚の力を借り、 土足のまま三時 おもわず涙が そのたびに 四人でよう 足

っ

この時、一人で帰宅していたら、私は何もできず、恐怖の一夜を過ごさなければならなか

翌早朝、ようやく電気はついたものの、都市ガスは止まり、数日間は文化生活どころか不自

由な毎日でした。私どもの会社でも、昼はパンと牛乳の生活が続く有様でした。 皆様も学生時代に勉強したと思いますが、わが国は環太平洋火山帯にすっぽりおおわれてお

糧 以上の地震がいつ起こるかわかりません。そこで私は、今回の宮城県沖地震の教訓から、食 り、「地震国日本」と言われております。これから先、この宮城県沖地震のような、 医療品、常備品、乾電池式ラジオを準備している今日です。 いやそれ

す。私が言えることは、自分自身を落ち着かせ、事象に対する判断力を養うことしかないとい 私が今回特に感じたことは、災害から身を守るためには特別な方法はない、ということで

す。 振り返ってみて、万一の災害発生時に備え、必需品の準備、心の準備をお願いしたいと思いま 最後に、これは、二次災害の防止にも必要なことだと思います。皆様もいま一度身の回りを

(被災地)仙台市中央二—三—一四)

客様はとじこめられていない。異状なし。

各所の点検が始まった。ガス漏れ、

水道破裂がないか?

エレベーターの状況は?

## 点検とシャッター閉鎖に難渋

ダイエー仙台店警備員

(料)

野

眆

た。 線 従業員の興奮している中を警備室に戻る。ブロックが部屋の前に散乱している。 非常用放送故障で店長の所在がわからず、店次長が焦燥していたのが印象に残っている。 内線のベルが集中し、混線、混乱である。長時間の電話受付で、 まさしくパニックである。不安のどん底にたたきこまれた感じであった。 口の回転が悪くなってい 受付に外

物が倒壊するのではと一瞬そう思われた。

く飛んで来る。排気口から黒煙が急に上がり始める。 六月十二日午後五時十四分、屋上、晴。突然揺れた。

火事を連想していたことを思い出す。 強震である。冷却塔から水しぶきが激し

建

幸いお

大自然のすごさを当時体験したことは貴重である。「天災は忘れたころにやって来る」とい う 間の難渋作業であった。今、振り返ると、地震の恐怖で全ての従業員が一つに結ばれていた。 二度とないことを祈っている。種々の教訓を残した宮城県沖地震を思いながら、現在の平

矢継ぎ早にシャッターの手動閉鎖作業を開始する。警備、

穏な生活に感謝せずにはおれない。

(被災地

仙台市中央二—三—一四)

田んぼ埋め立ての卸町

マルホン㈱ 社長

安

曇 利 雄

れ」と云って全員机の下にもぐりました。おさまってすぐに名古屋から電話が入り(会議出席 六月十二日午後五時十四分、そのとき、私は市内中央のホテルで の会議に出席してい まし 前震があって一寸中断しましたが、次にグラッと大きくき たので、誰いうと なく「くぐ

施設課員の一致協力である。長時

く思いました。

者に名古屋の商社社長がおられ、その会社からの安否問合せでした)そのす早い反応に感心し て私もと早速卸町の会社に電話したときはもう不通でした。

宅まで二十分位歩いて帰りつきました。 街燈はついていますが、信号灯は全部赤になっており、車道一杯に埋まった自動車は進退でき すぐに社員を自宅に帰すよう指示してローソクの光で何とか会食も終えて、外へ出ましたら、 から外が見えるほどの大被害だ」ということでしたが暗くもなってきたことでしたのでとも角 ともかく大事故もなくヤレー〜と会議を再開した頃、逆に会社から連絡が入り「ビル ライトばかりが不気味に光る異様な状景でした。会社に戻れる状態でなく、 ホテルから自 の内部

井の崩れた所もあり、 落ちた外壁をながめ、 ており、床いっぱいに商品が散乱して足の踏み場もない有様で、これは相当ヤラれたとつくづ 翌十三日、夜明けを待ちかねて卸町に来る途中で倒れたビルを見ながらわが社に着き、 店内を一階から六階まで歩いて昇ってみますと、 一階の太い柱の内の三本は鉄筋をむき出しにしてコンクリートが 壁には割目が入り、天 はがれ

どでもなく、 田んぼ埋立ての卸町の破壊劇とのあまりの差には何ともいえぬ感慨がありました。 かし建物がつぶれたわけではなく、 まづはよかったと思い返しました。それにしても地盤の良い中心部での昨夜の宴 商品も衣料品のことで散乱はしたものの被害とい くうほ

田んぼ埋め立て卸町, マルホン

うにと目頭が熱くなり、 随分と自宅の被害もあったろ 社したのには感激しました。

朝礼

「食事をしてこないものは

き出しをしてお握りを配り、出入りの業者にも協力をたのんでこの炊出給食は三日位続きまし 全然できなかったことでしょう。 幸い私の自宅は旧市内で被害も少くてすみましたので早速炊 もおそくなり食料の手配が

ŋ

特に若い独身社員は昨夜の帰

ほぼ半数の手が上りました。 手をあげて」と言いましたら

た。

場を整理整頓することなどを指示して卸商センターの組合事務所での対策会議に出席し、 と社員を激励し、 一確かに会社の被害は大きい、 何よりも先づお得意さまの安否を確かめること、 しかしこれにくじけてはいけ ない。 次に社内の被害を調査し売 災を転じて福にしよう」 団地

96

明けるにつれて社員が集り

始

Ø

八

時頃には全社員が出

りのことでした。

基礎のシッカリした建物の被害は小さく、反対のものに被害が大きかったといえます。 内各社の被害を見聞し、 た災害ではじめてわかる建設業者の施工力といいますか、 同じ団地の中でも相当に被害の差があることがわかりました。 施工良心といいますか、 その差に慄 こうし 総じて

私の会社は地階のない上に十勝沖地震以前の基準の六階建ですので痛みが激しかったのだと

然としたことも忘れられません。

思います。

張らなくてはとの気持がこみ上げてきました。 さまが次々に来社され、改めて被害の大きいのに驚くお客やら、励まして下さるお客やら、 人情につつまれて十六日に無事売出しが終ったときは、 社に戻って幹部会を開き当面の対策を諮り十五・十六両日の売出しは予定通り実施すること 売出し準備会に切替え、全社員が文字通り大奮闘を重ねました。 ああお客さまはありがたいものだ頑 その十五日にはお得意

お に補強をすませることができました。それにもまして社員の災害にもめげず強い士気と団 'n 私の会社はこの地震で建物には相当の手ひどい被害をうけましたが、 がげで、 復旧工事費も負担とならぬまでに社業もかえって伸び、 災を福に転じたことは何よ その年の暮までに完全 結 0

《被災地》仙台市卸町二一八一四)

# 何十トンもの印刷機が浮き上がる

今野平版印刷 ㈱ 社

今

智

吉

た。 つも外出しがちな私が、あの時は珍しく会社の自分の机に向かって書類の整理をしてい

た。 なにしろ強い地震であった。私の六十年の人生経験の中で、 ずばぬけて強烈なものであっ

た。突然激しい上下動と横揺れとが襲いかかった。 もおさまったので安心し、それが数分後にはあの強い地震に続くとは思いもよらぬことであっ 本震の約十分前に震度にして二程度のものであったろうか、少々揺すられて驚いたが、それ

ので、 私の工場は、平家建重量鉄骨構造に折板屋根をのせた耐震性能にだけは絶対に自信のあるも もちろんパイルは設計に従って一基礎につき三本づつ利かせてあり、常々私は社員に、

安全を確め合った。

やがて家族の安全に強い不安を感じて電話器を取ったが、

cy.

が

て振

動

が

おさまり静

かになっ

た中で、

机の下や棚の下から這い出

した社員達が、

お

互

的 ほどに散乱しガラスの破片が飛 感ぜられるものである。 までもおさまらないようすに、 窓も今にも破 ħ は 後の記録によるとわずか十数秒間のことなのだが、 後 になって分ったことである。 私の考えていたとおりで、 ħ んばかりに荒れ狂い、 □ ッカーや書棚が倒 遂にこの家もだめかと一瞬恐怖に声をあげたくなるほどであ び散った。 あの激震を経ても建物自体にはなんの故障もなかったが、 ものすごい家鳴りの恐怖の内に柱も天井も軒も樋もサッ しばらくは成り行きを見て冷静を装ってい λį 机は躍り、 恐怖の一瞬と言うものはまことに長く 書類や原稿類は足の踏み場もな た私

うち

Ó

工場

は地震には絶対に強いから心配しないようにと言い聞かせてきたものである。

結果

り合い ず、 られ ځ に本能的にしがみついたが、機械が手からもぎ離され自分から逃げて行くようでつかまっ 夕方五時 ガ ts. ス か ながら揺れ動くようすに、 の元栓を締 ったと言う。 過ぎのため作業じまいの準備に印刷機のそばに就いていた者は、 め 配電盤 に走った者も、 の所にスイッチを切りに走った者も揺れのひどさに手が いつ爆発するかと恐しくて近寄ることもできなかったと言 プロパ ンガスの五十きボンベ 十数本が音をたててぶ 自分の担当の機械 つけ つか られ 7

通ぜず、

できない散乱のかぎりである。こうした時、引き戸は開くが、 も停った中で誰かが車のラジオをつけて情報の入手にかかる。工場の中を見回りに歩くことも 回し戸は部屋の中を片付けない

うちは開けることができなくなるものである。

安に駆られなければならなかった。幸い翌朝出勤して朝礼を行ったところ、そのようなことで ちた印刷用紙の下敷きになっていたのを気付かずに帰ってしまったのではないかと、 にかく今日は工場を閉め、復旧作業にとりかかるのは明朝からと決めて全員帰宅と決める。こ やがて夕闇も近づき、家族への不安も強いので、帰る途中の道路の混雑も配慮しながら、 点呼を取るのを忘れて解散してしまったので、私は夜帰宅してから、 だれかあの崩 一晚中不 れ落

量が五少あろうと二十少あろうと、 アンカーボルトで床に固定されていなかった印刷機は、全部床上を躍らされており、 三十켝以上も動いたということになる。すなわち上下動と左右動が同時に激しく襲ったため、 十ゾもの印刷機は激しい上下動で浮かされながら、床面の方が地殻とともに東西および南北に 先に印刷機につかまっていられなかった話を書いたが、考えてみると、床の上に置か 地震のエネルギーにあっては問題でなく手だまにとられ 機械の重 ħ

不明の人もいなかったので安心したのだが。

状況を連想させられる。

フライパンの上に大きな肉片を乗せて、調子をとりながらフライパンを揺さぶっている

それ 地震後二時間 わ 地震の直後一、二回は東京との電話も通じたが、 は地震による断線などではなく、 っていた。 ほどで夕闇が近づいたが、 停電のためテレビは使えなくなったが、 過密使用のためのパンク状態であることはわれわ ローソクが久しぶりに役に立ち、 やがて市内も市外も全く通じなくな カーラジオが情報の窓の役を果した。 移したり動いたりす れにも

る時は懐中電燈がものをいった。

た。 する自動車が首を突込んで交通マヒを起こした。例えば、 ス六丁目交差点を越すことができず、あきらめて工場に引き返して待機せざるを得な 停電で一番困っ 時も過ぎ、 あたりも真暗になったころ、 たのは全部の交通信号が止まってしまったことで、交差点には縦横から殺到 ようやく六丁目交差点が通過できるようになった 印刷団地を出た車はすぐそば 大通 のバイ か っ

棄して歩こうかと考えたし、 転となり、 といわず裏通りといわず目的地に向って抜け道を探してうごめくのだから、 ので会社を閉じ、帰途に就いたが、真暗闇の中ひしめく自動車が交通整理のない中を、 いつもの何倍も時間を要してようやく自宅に帰りついた。 パニック狂乱状態にならないのが不思議なほどであった。 途中で幾度か自動 極端 なノ 車 1 を放 远運

娘と落ち会って買物をしていた家内は、立っていられず、傍らの木塀につかまってしゃがみ込 上杉四丁目の自宅付近も地震の時は結構揺れて、 その時ちょうど八百屋の店先で近所に住む

101

んでしまったというし、八百屋で一緒に買物していた三十代の末娘は、自宅に留守居させてい

帰ったという。 た幼児のもとへ揺れる地面の上をピョンピョン飛ぶようにして百どほどの通りを夢中で走り

走らないとなると、数日間は食糧不足が起こると思われる。 かった。これは仙台が中規模都市だからで、大都市の場合であったら市街地の中心部まで車が ためたというが、幸いにしてそうした手当の必要はなかった。つまり食糧パニックは起こらな 家内は年の功で地震がおさまるとすぐ食料品店に走って、パンその他当座の食料を少々買い

しかし、都会はもともと食糧生産基地ではない。災害で一時食糧不足を来たしたとしても一、

道路交通の障害を早く取り除いてやる市民の育成訓練がこうした災害時の復旧を早からしめる 二日待てば周囲から非常用も平常用も搬入されて来るわけで、これを妨げる人心のパニックや

第一の道であり、力ではあるまいか。

(被災地 仙台市伊在白山印刷団地三二) い場面と化してしまった。

てガラスの破片が雨のように降って来る。

## 水もの・びんものは被害甚大

宮城野倉庫 (村)

T Щ

弒

雄

前ぶれの地震が突然やって来た。一応おさまったのでボツボツ会場へ移ろうとしたそ 午後五時半からの会合に出るため、 会場で先着の二、三人とくつろいでいた。

すると、

その日私は、

ラスが飛散してくる。外では池の水が大波をうち、 の時、異様な地底の盛り上がりを感じ、同時に前後左右に激動しだした。瞬間壁は落ちる、ガ 燈籠が倒れる。街ではビルが大揺れに揺れ

女の子は腰を抜かして逼いつくばってしまう。われらの周辺は、 一瞬にしてどうしようもな

これが後にマグニチュード七・四 「宮城県沖地震」と命名されたのである。

一刻もじっとしてはいられぬ。やっとの思いで会社にたどりつ

とっさに倉庫が心配になり、

103

内にはだれもいなかったこと、倉庫が鋻い地盤にあったこと)。私はさっそく夜警体制、 いて見ると、幸いなことに負傷者もなく、被害も軽徴だったので安堵した(午後五時過ぎで庫

計画をたてたうえ、ひとまず自宅へ戻ってその後の報告を待つこととした。

った人でバス停の周りは大混乱を極めていた。 もう街は人とクルマで埋っていた。停電で信号機は消えている。大急ぎで駅まで出て見る バスはどうにか動いていたが、列車が不通とわかってとって返した群衆と、市中から築ま やっと乗り込んだものの、バスは一向に前進し

ない、車と人が行く手を固くふさいでいるからである。

い。バスの中では子供が泣き出す、婦人が気分が悪いと明んでいる。このような無秩序の状況 闇の中に放置するのは極めてまづい。些細なトラブルからパニック状態に陥らないとも限らな 立ち往生していた。この上に火災でも出たらとの恐怖が脳裏をかすめる。こんな状態を長時間 やがて長い日もすっかり暮れてしまった。街の車はいよいよ膨れあがり、その中で救急車が

私は二書の距離を二時間もかかってやっとわが家にたどりついた。 戻って見るとこわいか

が当日夜半まで続いたとのことである。

からは中味が飛び出して打ち倒れ、重いテレビが三㍍も飛んでいるのにはわれながらあ然とし 台所もそのとおり。食油、しょう油などが床一面に飛散して足の踏み場もない。それに電 相像を絶する被害――壁は落ち、 ガラスは破れ、 障子はゆがみ、堕笥、サイドボードの類

灯 がつかない。 ガスが出ない。 水道が出ない。 これからどうしようかと、 家族は一本のロー

ソ

クを囲んでぼう然としていた。

夜半に再び余震が襲って来た。ラジオはもっと余震が続くと報じた。

ろうか、起り得べき惨状に思いを馳せ、 をかえり見、もし万一これが大都市の中心部の出来事であったとしたら、 私は明朝からの対策を思案しながら、 あらためてその恐ろしさにおびえさせられていた。 着のみ着のままで横になった。そして先刻からの惨状 どんなものであった

(参考)

○倉庫の被害状況

全壞

十三棟、半壊または応急措置を要するもの

百四十二棟

計百五十五棟

被害甚大の倉庫業界 (宮城県倉庫協会調

保管貨物の被害額 倉庫建物の被害額 一八三、 二二五万円

○倉庫建物の被害 個々の例 四八一、 七三四万円

倉庫の内面にX字のシテーを張ったものは無きず、 多階建倉庫は一階を完全に圧し潰した。 荷棚を本体に付設のものは比較的軽微 プレハブ造りも概数無きず

電動シャッターのほとんどは開閉不能 石造り、 ンガ造りはほとんど崩壊

パレット類にも荷崩れ多発洋紙、袋ものに荷崩れ多発

板ガラス、ビンものも同様被害甚大酒類、しょう油等の水ものの被害甚大



倉庫内の破損した状況 卸商センター提供



ピンもの被害甚大

河北新報社提供

# タンクの底板が破損し重油が流れ出る

(現工務部安全衛生課長) 東北石油㈱仙台製油所製油二課長

語 本

宏

時間に何を考え、どう行動したかについて述べて見たい。 宮城県沖地震を工場において経験した者として、直前に発生した前震から本震直後までの短

一、前震発生時の行動

Ų,

昭和五十三年六月十二日、十七時六分に、震度二の地震が発生した。これが十七時十四分に

起こった震度五の本震の前震だったわけである。

生の時は、いつものように部下に対して地震後の現場の点検を指示した。 当時、 私は東北石油 (株) 仙台製油所の製造部門の担当課長であったので、 地震 (前震)

発

私達の石油精製工場の敷地面積は、約四十八万坪(約一六〇万平方於)あり、そのうちの半

三

本震時の状況と行動

第一次点検 分が私の課の管理担当地区であったので、現場を点検するといっても容易ではない。そこで、 (概括的に施設を点検し、災害発生の有無を確認すること)と第二次点検 (詳細な

点検)に分けて実施することにしていた。

異常がなかった旨、電話で報告したが、 次点検結果、異常なし」という報告が入って来た。その後、私は上司へ第一次点検の結果は 課員が、それぞれの担当地区の点検に出発した後、数分たってから順次無線機によって「第 その直後に本震が来た。

二、本震直前の状況

感じの「ゴー」という地鳴りだったことを覚えている。 これを言葉で表現するのは難しいが、巨大なブルトーザーがこちらへ押し寄せて来るような 大地震の前には、 地鳴りがすると言われているが、 私も、「ゴー」 という地鳴り を聞 た。

十七時十四分。 その時私は、 鉄筋コンクリート建の二階事務所にいた。 事務所の東側と南側

Iţ 丈夫な金網入りのガラス窓になっており、西はコンタリートの壁である。

い。外部の様子を確認するために、振動で移動していた机に次々とつかまりながら窓際に寄っ

地鳴りに続いて、大きな「揺れ」が来た。同時に存電になった。立って歩ける状態ではな

て行った。

**ば、横四十ば、深さ三屋のコンクリート構造の池である。その池の表面は、平常時は鏡のよう** 外を見て異様に映った光景は、 工業用水池の表面の状況であった。工業用水池は縦四十五

地震とともに水面が泉のように盛り上がり、その周囲には泡が立っていた。

それを見た時、「これは大地震だ」と直感した。

な状況であるが、

また 工場には無数の配管が地上を走っており、これらが支えの台とぶつかり合って、 ガ

ンガン」と大きな音をたてていた。

類のファイル等が、部屋一面に散乱してしまった。 一方、隣接する書庫兼会議室の方を見ると大きな音をたてて本棚が倒れ、 本、 専門雑誌、 1

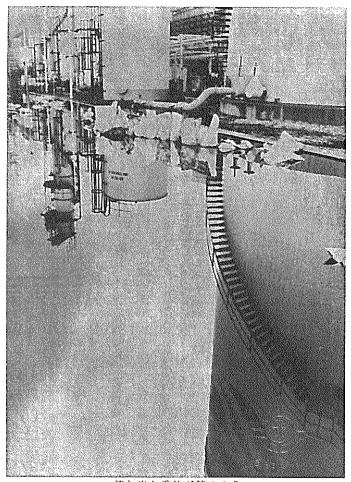
大きな揺れがおさまったところで、直ちに次の事項を部下に指示した。

一、地震災害発生の有無の確認

闫、火災発生防止措置

担当地区内には二つの加熱炉と無数の高温高圧蒸気配管があったので、 加熱炉の

### 第一部 必死の応急活動



流れ出た重油が鏡のよう

河北新報社提供

消火と蒸気配管のバルブの閉止を行う必要があった。

 $(\equiv)$ 人身災害の有無の確認

本震が来た時には、前述のように第二次点検のため、 一部の課員はタンクヤードにいた

ので、けがをした者がいないかどうか気になっていた。

幸いにして、火災の発生もなく、一人のけが人も出なかったが、

一部のタンクの底板が破損

地震発生の五分後には、本館事務所内に東北石油(株)他台製油所非常対策本部が設

して重油が流れ出るという被害が発生した。

置され、その対策本部と連絡を取り合いながら、応急措置、 復旧作業に全力を投入して行っ

担当しておられる方々にとって、少しでもお役に立てば幸いである。 以上、宮城県沖地蹊発生前後の状況と私の行動について述べたが、各事業所において現場を

(被災地 仙台市港五一一一一 前震の約十分後に襲ってきた本震はまことに凄まじく、

瞬時に室内の物品、

調度が多数倒

ħ

再び火気を切ったが、そのとき薬品棚も倒れ、多くの薬品を入れたびん類が一時に落下

の下の床上に置いてあった薬品びんに当ってかなりの数がこわれ、次いで発火した。こ

(びんの落ちる音)、パチパチ」である。

倒れた薬品

きであるということである。

た。

棚

の状況を一口にいえば「グラグラ、ザー

### 落下した薬品類が発火

木

茂

生

ことを予測してしばらく実験を中断して、危険物の整理、 ては、このような強い地震があった場合は、より強い本震が数十分ないし数時間後に来襲する たので火気を切った。しかし間もなくおさまったので再び実験を始めた。 消火設備や非常口などの点検をすべ 私の第一の反省とし

宮城県沖地震が発生した時、

私は化学実験室にいた。

午後五時過ぎ、

かなり強い地震を感じ

113

んとか

棚

には

かなりの量の可燃性や助燃性薬品類があり、床上にも可燃物質を入れたガラスび

な戸棚に入れ、

たので見ると靴下の数個所に直径数ミリメートルの穴があき、その縁が燃えている。手の指で 発火後室内にいた学生に室外に出るように命じ、私も消火器をとるため室外に出たが、サンダ ル履きの足では倒壊物や落下物、 んが置かれていた。 ローカーは、 可燃性物質と助燃性物質は同一場所に置いてはならないということである。」 倒れやすく、 第二の反省としては危険物類は必ず転倒を避けるよう壁に固定され 通路を遮断する調度品の最たるものである。 さらに薬品類で埋もれた室内を歩くことは困難 足に激痛を感じ かつ危険であ た頑丈

器を一本ずつ手にして現われ、炎に向かって消火剤を噴射した。火はいったん消えたように見 靴下の火を消した後倒れたロッカーなどを踏み越えて室外に出た。その時二名の学生が消火

押したが安易に消えない。第三の反省としてはこのような事態ではサンダルは履物としては用

をなさず、実験室ではふだんから靴を履くべきであると思う。

えたが、 噴射が終ると再び燃え出した。通常の消火訓練では鉄血の中で燃えている油に消火剤

も階下の事務室に知らせに下りたがその間に再燃した炎が他の有機溶媒のびんに引火、火災が を噴射すると簡単に火が消えるが、倒壊物や助燃性物質の存在などが消火を妨げた原因と考え 消火器のスペアが手近にないので、それらの人たちに探しに行ってもらい、 小生自身

広がったものと思われる。いったん室外に出て戻ってきた時は実験室前の廊下に強い刺激臭の



到着することは期待できない。

火した。このような災害発生時では消防活動もままならない

のは当然で、

消防車がすみやかに

に運ばれ、

足の負傷の手当を受けた。

火災は消防当局

ま消火活動を強行すれば生命に危険があったと思う。

に委ねることとし、

建物外に退去した。実験室からの煙は独特の不快臭を持つもので、 室内立入は中毒または窒息の危険があると判断

消火は消防当局

そのま

私はその後救急車に収容されてある医院 の活動によって午後七時ごろようやく鎮

ある煙が流れ出しており、

学生も大あわて 東北菜科大学 河北新報社提供

張しているにもか たが、 が、 留めているものはなか でねじぶたつきのものがあ ンベ ラスチック製容器類で原形を て見たところ、 翌日余熱の残る室内に入っ また十八潟入り石油 は外見上変りが 窒素を入れた高圧ガ かん全体が熱 ガラス製やプ かわらずふ の いため膨 15 ヘスボ った か か h

たは外れていないので、押しぶた式のものより安全であることがわかった。ガラスやプラスチ ック製の危険物容器は現在一般家庭にも広く普久しているので、一般市民もこのような衝撃や

火災に弱い容器の保管に注意する必要がある。

防火設備の欠点は、 法であることを体験した次第である。またこの小文中で指摘される火災発生前のこの実験室の を再開すべきである。危険物の整理をしながら本震発生の有無をしばらく時間を割いて判断す ることが、火災を含むさまざまな地震によって引き起こされる災害を最少限に留める最良の方 態にすべきである。また日中地震を感じた場合は、本震の発生がないことを確認してから仕事 が発生してもその強さが建物が倒壊しない程度のものであれば火災発生の危険がないような状 以上さまざま申し述べてきたが、結論としては、一日一回終業時に点検を行い、夜間に地震 きわめて安全な状態に改善されたことを申し添えたい。 この地震を契機として更新 され た本学防災委員会の ガイドラインに 従っ

(被災地 仙台市小松島四一四)

ひとときを過していた。

いると、

### 忘れられない大安の日

(現東北地方建設局釜房ダム管理所所長)

昭和五十三年六月十二日、大安、穏やかな晴天の日であった。この日、 仙台工事事務所で

十時から現地で関係者により水入式がめでたく行われた。

阿武隈川改修事業の一環として工事を進めている阿武隈大堰の第二ブロックが完成したの

で、 は

のある仕事に充実した意気を感じていた。行事も無事終り、 事務所に戻ってホッとした午後の

大規模プロジェクトのひと区切りであったが、

担当職員は苦労しただけに満足感とやり甲斐

十七時五分ごろ、グラグラッと地震を感じたが、 工務一課の職員が「準備できました」と迎えにきた。水入式のお祝いを兼ね担当課で 間もなくおさまった。 机の書類を片付けて

慰労会をやることになっていた。蒸し暑いので上着を椅子に掛けたまま室を出た。

### 恐怖の一分間

事務所庁舎二階と渡り廊下で継ながっている別棟の会議室には、少しばかりの酒肴が用意さ 机を囲んで職員が談笑していた。

床に落ちて広がっていく。ビールびんが勝手な方向に転がっている。窓のブラインドが小刻み うしようもない。まあ落着けとあたりを見回す。窓越しに送電線や通信線が揺れているのが見 机に塞がれて位置を換えることができない。一人になるとやはり恐怖心が高まってくるが、ど 「これは駄目だ」と言って窓際に移った。震動はますます強くなる。 枠とか柱につかまっていた。 かた。 に室の中央まで移動した格好になった。職員の大部分はなぜか南西側の窓際に寄り集まり、窓 す大きくなり、ガラスの割れる音が響いてくる。 室は騒然となった。机に両手をつき両足を踏張ってみたが、机が踊り出し、 から突き上げられるような激しい揺れを感じた。「地震ダァ」、「アッー」と声が上がる。一瞬 音が耳に入る。 「乾杯の準備をお願いします」と幹事の声にピールの栓を抜く音や、 会議室のオイルヒーターのカバーが外れ、 机のものは散乱し、 ちょうどコップに半分ぐらい注がれたときだった。ゴウーと地鳴りとともに下 軽量鉄骨のギシギシ軋む音は不安な心をかきたてる。 同じ机の反対側にいた工務一課長はあまりの揺れに耐えられず、 パイプがジョイントから切れて錆色の液体が 机が南側に動くので北東にいたため机と一緒 室の真中に一人残ったが コップに注ぐ爽やか 南西寄りに動き始 揺 北 はますま な

おもいのひとこまもあった。

なく悪夢の目ざめに顔面蒼白、 揺れが止まって静かになった。 お互いの無事に少しずつ顔の表情がやわらいでいく。

一分足らずの時間でも長く感じられる。

しばしぼう然、

声も

ろうか。現場の状況を確認すべく一斉に各部署の連絡に職員は散った。 **震度の程度から津波の心配が頭をよぎる。名取川、** 阿武隈川の河口にある水閘門は大丈夫だ

### (無惨な傷あと)

出され、

茶道具等、

ている。

室の中のあちこちに亀裂が口をあけている。

ッカー 地震の情報を確認しようと室に飛び込んだ。足の踏み場がないとはこのことだろう。 は倒れ、 机の上のガラス板は割れて飛び、灰皿は室の中央に、テレビはゴロッと投げ

室中散乱の惨状である。書類書籍もメチャメチャにロッ

カー

からは

み出

必死の応急活動 隣りの席の納専門官が「やあ怖かった」と部屋に入ってきた。地震発生時にこの室には専門

官一人いて、 あまりの激しさに窓の外の備付のタラップから脱出したという。

もちろんテレビは使用不能となっていた。

所長室の電話

が鳴

り出

部長の声だ。「大丈夫か、 入口にガラスの建具類が倒れて通れない。 大部やられたろう、 頑張ってくれ」と激励の電話だった。 やっとのことで受話器をとると本局の渡辺河川

-部3

は停電で照明もだめ、

119

中までいくと、 ఫ్త 自席の椅子に掛けていた上着は席のうしろの書棚の転倒で 背中の 部分 がザックリ裂けて い もし、 あの時に席におったとしたら、背筋が寒くなった。一階の様子を見ようと階段の途 職員が公衆電話に群がって受話器をガチャガチャやっている。電話が通じない

各課長が庁舎内の被害状況と職員の安否について報告に来た。幸い人身事故はなかった。

副所長室を対策本部に定めて対処することにした。

出張所の連絡指示も済んだので、

らしい<sup>®</sup>

(災害復旧に向って)

被害調査に対応することができて幸いした。河川の堤防等の施設に寄せられる市民の期待に応 える行政の任務がある。前日は梅雨入りの発表があったので、降雨による二次災害が心配され 地震発生の時刻が終業直後であったので、職員の大部分は在庁していた。直ちに情報収集、

の被警調査は夜間に入り難行し、危険も伴うので明朝早くから再調することにして、現場は二 きたのは、夜も暗くなって二十一時だった。幸い津波警報も二十時三十分に解除された。現場 刻々入る情報と被害の程度から、どうやらすぐつながる二次災害のおそれがないと判断で

十一時で打ち切ることにした。

ところどころに見え、無気味な静けさをもった夜だった。 明日からの復旧対策の打合せ後、 夜半帰路についた。途中暗闇の家並みにろうそくの灯りが (被災地 仙台市郡山五一六一六

うか

これが新聞社みょうりというものだろう。

後五時、

がついている。

しゃ 六分、

ウソクの明かりで仕事をしていたみんなの顔に笑いが浮かんでいる。

と明るくなると同時に拍手が沸き起こった。

「新聞が作れる」

頼りな

午後八時三十

かけ合う声にはずみ

あの大災害のなかで、さわやかな拍手と笑いで仕事を始めた職場があっただろ

刊作業のなかで、

編集局

が

パ ッ |城県沖地震が起こった六月十二日午後五時十五分から十三日午前一時過ぎまでの当夜の朝

鮮かな印象として残っているのは電気が復旧した瞬間だった。

難した。

### 震度Vの中の新聞作り

(現河北新報社総務局長)河北新報社編集局次長

通

間

にならない震度五の揺れが襲ってきた時、 鉄骨がきしみ、天井のけい光灯のガラス覆いが粉々に砕けて落ちたのに、一人もけが 編集ではいつものように朝刊の編集会議が始まった。 大半が廊下へ飛び出し、 逃げ遅れた人は机の下に避 前触れ の地震とは ŀŁ の 121

b

えないので、すべてトラック輸送とする」という最高方針が決まった。電気の復旧は早くとも 面として八ページとする。どんなことがあっても、たとえ徹夜してでも新聞は出す。 地震発生の十五分後に、 緊急役員局長会議が開かれた。「建てページは最低必要なニュース 鉄道は使

四時間後、それから機器の点検、

整備も含めて所要作業時間は三時間の見込みだった。

態、仙台――|関間のファクシミリ送信や通信網からの電送の可否など、考えれば考えるほど条 しかし、心配はほかにもあった。 あることがわかった。東北全域の通信網が健在であれば、ニュースは必ず集まる。 編集局へ戻ると、安否の確認を頼んでおいた全支社、総局、支局、 仙台と同時に停電、断水が続いている一関市の印刷工場の状 通信部のみんなが無事で

件は悪い方へ傾きがちだった。

まり、 外勤配者、カメラマンは全部出ている。本社は被災地の真ん中にあって電気、ガス、 帯の三陸沿岸の市町村に、チリ津波を上回る被害が出たら取材応援をどう組んだらい と信号機停止で道路は車で埋まって動くことができない。 こうしたなかで、被害状況が入り始めていた。三階建てのビルが倒壊した。橋が落ちた。 方で、津波警報と避難命令が出ていた太平洋沿岸に満潮の時間が迫っていた。津波常襲地 回線が生きているはずの電話もパニック状態で通話不能が続いている。夕刻のラッシュ 水道が止 かか。

っても、 何時になっても新聞を出す」という最高方針がひどく重苦しくのしかかってい 死 イト 1明 22 は は まと あ なかった。 矢継ぎ早の朗報が届い

津波警報解除」「一関工場は大丈夫」 ع

た。そして、

電気が

iΞ

n

見通しがつくという知らせがあったのに、

十分、二十分と時が過ぎている。「どんなことが

写真をふんだんに入れて見開き特集にし…八ページの割り振りを決めた。

所で崩れた家屋やブロ

ッ クベ v

の下敷きになっ

た死傷者が増えてい

ろんな不安を押えつけて、

八時

から編集会議を再開した。一

面に総合記事を、

二一三面

八時過ぎには電気

の は

拍手で迎えられた。

上が ると、 あることは明らかだったが、 るなあ 胃の痛くなるような最初の三時 りの早版 そのあとの五時間 とい の新聞が配られると「迫力が う声が上っ は早か た。 だれもとが 自 っ 画 た 間 |自賛で 刷 比

当夜の作業が予定通り進んだの Д ぺ I ジ に減らさざるを得 な ιţ 办 0 幸運に たが

恵まれたとしかいいようがない。ほぼ平常通り配達された「八ページの朝刊」に対して、読者 からの苦情は一つもなかった。逆に「けさは新聞はこないと思ってたのに」「本社の被害は」

など励ましやお見舞いの電話をいただいたのにはかえって恐縮した。

き方はもちろん見出しや地図、カットなどにもみんなで知恵を絞った。 みんなが被害者だった。知りたいこと、不満や悩み、望んでいることを朝夕刊の会議で出し合 った。ガス、水道、電気をはじめ復旧資材や手続きなどあらゆることを取り上げた。記事の書 たいすべてに、早くわかりやすく答えようというねらいである。軽重の差はあっても、 れたのは生活情報である。行政と住民のギャップを埋める役割を積極的に果たし、住民が知り 最初の朝刊を減ページしただけで、次の夕刊から平常体制に戻った。そのなかで特に力を入

れたというのも、こうした新聞作りが間違っていなかった表れだとも考えている。 る。いろんな問い合わせがデスクに殺到し、即売の朝刊、夕刊がいつもより多く、早く売り切 うぬぼれを承知でいえば、 地元の新聞としてかなり期待にこたえることができたと思ってい

新聞協会から異例の感謝状をもらった。望外の栄で締めくくりをしていただいたというべきで 秋に仙台市で開かれた新聞大会では、災害報道を通じて新聞の使命を果たしたということで

あろう。

(被災地 仙台市五橋一一二一二八)

張っ

たが、

とても長い時間

に感じられた。

ある課員の場合は、

その間にコン

セ

ント

から差し込

に頑

としたものの、

気を持ち直して指令台など通信施設にしがみつき転倒を防ぐため一生懸命

階にあったため揺れも一段と激しい。

下食堂に出

崮

Ų×

た時に地震である。

地鳴りとともに激しい揺れに襲われた。

司令室は市庁舎六

ロッカーや資材が転倒落下する様を目前にして一瞬あ然

うち四人は室内の通信機器の点検や支援資料の確認作業を始め、

六月十二日退庁時間が過ぎた。

司令課にあっては夜間警防体制を整えるため、

当直

者六人 の

また二人は夜食準備

た

め

地 Ø

### 九番のベルが鳴り続く

(現東消防署査察検査係)

藤

好

作

みコ は非常に効果的であった。 余震がまだ残るうちから、 1 ۲ を抜き取ったが、 -在室者が手分けをして施設の点検を始めた。 の行為は電気短絡による通信機器の障害を未然に防止できた点で 一斎指令台では 臨

畤

少なく、 に通話試験を試み、異常のないことを確認できたが、受付台の場合一一九が入電されるまで不 その時点では業務に直接支障がないと判断した。 また機械室も自動交換機が傾き、録音機は転倒したが、 他の施設は損傷の程度も

下で小火があり、暗闇の中で消火を手使ってきたとの報告であった。全員が揃う。 課で残業をしていた職員が応援に駆けつけて来たが、地下食堂に行った課員の戻りが遅 鴨り響く。最初に受けた火災報は東北大学工学部の出火であった。 火災での指令を出した。相変らず一一九番は、パニック状態であるが、 うか」災害が多発しているものと予測して最少台数に限定すべきか一瞬迷ったが、 かし確かめる余裕がない。 も重なり、室内はごった返しである。猫の手も借りたいとはあんな時を言うのであろう。 入電開始から数十秒後には二十七回線の回路のランプ全部に表示がされ、呼出しベルが室内に 受付台に一一九番の入竜を知らせるベルが鳴る。課員が一斉に台に走り、受付を始めた。 心配しているところに二人の課員が戻って来た。 「消防隊の出動はどうしよ 連絡用の電話の呼出 遅れた理由 通常 のビル 他の 抽

況を示す現有表示板、 の表示台などの機能が全て停止したため、状況判断が一層困難になり、 また、停電のため、 活動部隊を支援するための警防図投影装置、 救急系無線機、気象情報を受ける模写電送受信機、 病院の当直医お その分も課員の負担と 消防車両 よび (T) ベット 田 動状

一一九番からの通報は絶えることはない。それに広答する課員は受付電鍵操作の連続であっ

その

他

にも緊迫した通報としてブロック塀の下敷き、

崩壊建物の中に閉じ込められた等消防

担の強化がされたころには通報件数もピークを脱した感があった。 なっ た。 地下にある望みの自家発電装置は日没を迎えても稼動されず、 ろうそくの明りをたよりに業務の遂行に努めたが、 非番職員の参集に応じて作 商用電気が回復される

う市民 ス漏 報に対しては消防車の出動を原則として対処したが、東北大工学部、 ら全てに応ずることは救急車の台数や当時の道路事情から不可能であったため、 二件があって全部で八件の出動となった。 のガスタンクなど六件が直接一一九番に通報され、 「かめ、応急処置の方法を指導し、 ħ 一九番通報 の協力を求めた。 水道管の破裂、 は三時間で六百件を超えたと言われている。 家屋、 塀の倒壊傾斜、 さらには、 また救急車に係る通報は二百二十二件があり、 最寄りの医療機関に自力で行き手当をうけるよ 石垣などの崩壊亀裂と多種多様であった。 その他にも最寄りの消防機関に駆けつ 通報内容は、 東北薬科大学、 火災、 けが 救急 市ガ の程度を あ ĮΞ これ バス局 けた 火災 か ガ

よっ の出 たこともあって混乱 ては状況確認に手間がかかっ 動 の要請があったが、苦慮しながら消防隊の配置を行いその対応に努めた。 は 15 か 0 た。 たが、これらは火災が全て鎮火した後の時間帯に作 ただし、 東北石油での油流出事故 II 種 々 な面 で課員を緊張 しか し現場 業 か

家族の安否を確かめる余裕もないままに一夜を過ごしてしまったが、

翌日司令室の窓

の労苦に改めて感謝したものだった。 から煙突の折れたビルを見て、 よくもあの災禍を乗り越えることができたものだと、

相次ぐ救急指令

(現消防局司令課主任) (現消防局司令課主任)

逸

わった事態は生じなかったため、走行を続行した。ところが宮城県知事公舎前を通過したとこ 容し市内広瀬町の渋谷病院は向う除中、 より出動した。バスケット試合中、肉離れした十四歳の男子を現場で応急処置を施して車内収 天気のよい静かな月曜日の夕方十七時四分、「宮城県スポーツセンター運動事故」の指令に 澱橋にさしかかった際異様なゆれを感じたが、特に変

ろで車両は走行困難となった。同公舎の笠門と松の木が大きく揺れているので地震と直感、そ のまま目的の渋谷病院に向い病院収容後、司令室と無線交信に努めた。しかし交信不能となっ

128

スタッ

フ

(被災地

仙台市国分町三―七― 1)

名を心マッサージと人工呼吸を実施しながら患者宅に収容した。さらに、

ながら警察官、

家族の三者で話し合い、

発生後の時間の経過と前記の症状から社会死と判断

同救命措置にあたり

ター 救出した。 られたということで、 と判断。 て徐行程度の速度で走行中、 帰署途中の状況は、 業者に連絡をとり帰署についた。その後副隊長と業者とでエレベーターの手動操作により 救助車の応援要請と消防波無線機の確保のため、 救助方依頼された。 市民が道路に流れ出て車両は通行困難な状態であった。この状況下にお 支倉町宮城ドレスメー 救助にかかったが、 カーのエレベーター内に、二人とじ込め 副隊長を現場待機させ、 各資機材の不足により救助困難 エレ

たので、

帰署第一と考え同病院を引き上げた。

(米ケ袋二丁目、岩製門柱下敷現場)

顔面、 羄角×二、五點) より車両走行不能となり、 十八時十六分、指令により出動。 頭部挫創変形、 の下に五十九歳の女性と二歳の幼女が脈、 全身打撲の状態であった。警察官と市民の協力を得て門柱を撤去し、 現場の五百以手前で救急車を停止した。 現場付近にさしかかると、 呼吸停止、 市民の波とブロック塀の倒壊に 到着時、 瞳孔散大、 岩製の門柱 死斑 有 四十 ij

(荒巻字青葉東北大学理学部火災現場)

家族の了解を得て帰署についた。

された。 帰省十分後、 資機材搬送指令があった。消防車全車両出動中のため残留指揮者から救急車にて搬送指示 酸素ボンベ八型十五本積載、火災現場に出動、 地震と同時に発生した東北大理学部火災現場から、現場活動用酸素不足につ 現場本部に到着、空ボンベと交換し帰

(株式会社パロマ仙台営業所倒壊現場)

署についた。

約十二分かかり到着。 署前にさしかかると走行困難となり、隊員の一名に下車を指示、 二十時八分、「原町苦竹パロマー階部分沈下要救助者有り」の指令により出動した。 各車両の整理に当らせながら 東消防

けるが、目で確認できず、呼べばかすかに声が聞こえる程度であった。さらに当建築物を一巡 ドイッチになり、脱出不可能な状態であった。一階天井と地面のすき間から要救助者まで近づ 現場は三階の建築物で一階部分が沈下、 救出できる場所を発見できず救助車の要請を指示した。 一階にいた要救助者は一階天井と地面との間にサン

の機関による救出は困難をきわめ、各機関による検討を行う。その間南救助車到着。 指揮車、 の防止のため、 警察官の経過説明によると、二回の余震で二十珍も沈下が確認されたので、二次災害 教急車到着。経過を報告し、申し送りを行い帰署についた。その後、各機関により、 当建築物に近よらないよう救急車にて広報した。 また、警察、自衛隊、 続いて東 その他

十三日零時四十五分救出、 方、北救急車二号車隊、佐々木隆志副隊長は、地震と同時に発生した東北大理学部の火災 東救急車により病院に搬送された。

送したが、 丁目一四の三、青木富子五十七歳)に向う。 また、次期出動により、地震による木棚の倒壊で、ガラスにて顔面多発切創の現場(安養寺一 に出動し、現着後直ちに傷病者の有無を確認し消防作業に応援、さらに情報を司令室に送る。 病院は停電と混乱により、 院長から救急車内での手当、 到着、応急処置を施し、中江一丁目中江病院に搬 処置を要望された。車内で

これらの事態により、一号車、 二号車隊は連絡とれず、 互いに独自の行動となった。 処置完了、

(被災地) 仙台市国分町三―七―一)

## 余震の続く中、梯子車で伸梯放水

特別消防隊副隊長 仙台市消防局北消防署

純

4=

東北の拠点都市として成長し、これまで

んできたのである。 にこれといった大災害もなく、 われわれ仙台市民は、 この秀麗の地に健康で文化的な生活を営

藩祖伊達政宗公が、居城を構えて以来三百有余年、

日の仕事を無事終えた安堵感が人々の顔には漂い、われわれ外勤消防職員も、 昭和五十三年六月十二日十七時十四分、市の中心部は会社や官庁からの退勤者であふれ、 来たるべく夜間勤務の鋭気を養うため球技を楽しんでいた。 休憩時間を利用

していた市民を驚愕させ恐怖のるつぼに突き落したのであった。この予告なき地震発生に、消 この時、突如として発生した、マグニチュード七・四、震度五の地震は、平和な一時を過ご

防署の望楼は「ギシギシ」と断末魔の悲鳴にも似た音とともに大きく揺れ、 コンクリートの破

狽し、 片を地上に落下させている様は、 戦慄を覚えるばかりであった。 地球の最後を思わせる。 われわれは、 その恐ろしさに周章狼

た。 Ιţ るが、 きたのだ。それは、 を入れろ」 が落下してくる。その中で重置二十少もある梯子車が、大波に翻弄される小舟のように揺 当直指令が わ れわれ消防隊員に地震の恐しさを改めて嚙み締めている暇を与えてはくれないのであっ 一瞬車を出すのを躊躇しているときであった。「有線電話不通」と叫ぶ声がする。 足が宙に浮いて思うように走れず、辛じてたどりついた。 と叫ぶ。 「消防車を早く出せ」と叫 東北大学理学部出火の報である。 スイッチを入れると同時に、 Š その声で、 われわれが最も恐れていた火災発生を報じて 地震を起爆剤とし、 自我に戻った私は、 目前には砂塵を巻き上げ、 次々と発生する災害 車庫に走ろうとす ' [無線 れ 壁

うか、 ンにも 出 途中、 虚脱状態に陥ったと思われる群集が、ぼう然として立っており、 無感情で反応しようとしない。消防車は、この群集をかきわけながら現場に向かう。 路上には避難して来た人達であろうか、 極度の恐怖心に動作をマヒさせたのだろ 消防車の鳴らすサイレ

٤ 辛うじて現場に到着したわれわれを待っていたのは、八階建の高層建物であり、 橋梁面とに段差ができている。 「渡れるか」「渡れる」の声に安堵する。

は落ちていないだろうか」と脳裏をかすめる。

幸いにして橋は無事で

あるが、

地

盤

面

しかも、

四



河北新報社提供

が難波

は、

水をかけると発火する薬

ない。しかも大学の要望で た。が周章狼狽している暇は 員も驚倒させられるのであっ その光景に百戦練磨の消防隊 に火柱が空中に舞っている。

たされた私は、愚考とも思われる一つの消火理念に達したのである。水をかけて燃える薬品な われわれの消火手段としては放水のみである。火はその間にどんどん拡大していく。窮地に立 それ以上に放水し延焼防止すれば良いのではないか、 逆転の発想である。 品があり、 れとのことである。 水をかけないでく しかし、

らば、

まだ余震の続く中、

梯子車を伸梯放水する。

しかし、

いつまた強い地震が発生するかわから

き隊員の姿が煙に包まれる。「大丈夫か」と、インターホンで問いかける。「大丈夫だ」と、隊 ない。先端にいる隊員の生命の保障はない揺れる梯子の上での必死の防御活動である。 ときど

噴きあげ、時々爆発音ととも 階と七階の二個所から黒煙を この時、

われわれだけでなく、誰しもが家族の安否について悩乱したであろう。

の連帯と防災意識の薄れゆく人間社会に、この宮城県沖地震は、

봬

域住民

鐘だったのだろうか。

うさせるのだろうか。 かし、 この隊員遠の中には、臨月を迎えた妻、 顔は疲労でゆがんでくるが、消さなければならない。 階の二個所から火災発生しているとの知らせが入る。 せかけ、 誰一人として家族の安否について、口に出す者はいない。 また燃え上ってくる。火とのシーソーゲームとも思われる防御を続けている中、 また生後間もない子供がいる隊員を含まれている。 呼吸器を着装、 同時に四個所からの出火である。 消防職員としての使命感がそ 次々屋内進入して行く。 隊員 別の ô

員

(の力強い声が返ってくる。しかし、

火はわれわれを愚弄するかのように、下火になったとみ

見下しながら、「俺たち消防職員は、 人だけだ」と、 実感がみなぎると同時に、 結果、二十時二十五分、 最悪の環境と条件下で、 誰かがつぶやよくうに言う。 われわれはついに火魔にうちかつことができたのだ。 心の余裕ができたのだろうか無気味なまでに暗黒と化した市 極限状況を耐え抜き、 こんな時でも家に帰れないんだ。頼りとするの 消防職員のすさまじいまでの勇気と闘争心の 隊員の顔には充 は近所の 衝地を

(被災地 仙台市国しかしその代償はあまりにも大きかったのである。

仙台市国分町三—七—一)

大自然が送った警

都市

化が進

### 三万戸一斉ガス供給停止

(現総務課労務係長)仙台市ガス局総務課人事係長

凼 Ш 脒

進

きた。ラジオからは地震があったことだけが繰り返し流れており、詳しい情報は全くわからな と、車で走り出したが、途中自動販売器の転倒、橋と道路との段差、路肩の崩壊等を見るに及 ない。それなら家にとダイヤルを回したが、やはり同じであった。すぐガス局に帰らなければ しい揺れ、 その時、私は所用のため外出中であった。地震のおさまるのを待って局に電話をするが通じ 昭和五十三年六月十二日午後五時十四分、震度五の宮城県沖地震。 道路に埋設されているガス管は、相当被害を受けているのではないか、と心配になって 私が体験した最も長く恐ろしい数十秒間であった。 あの無気味な地鳴りと激

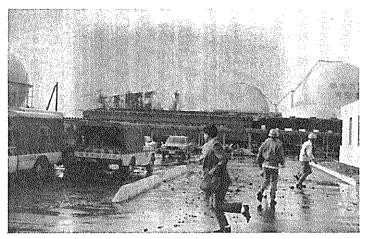
ديا

局の近くに来てびっくり、

職員が車を止め、

局に近づけないようにしている。聞くと、ガス

#### 第一部 必死の応急活動



骨がアメのように曲り、

見るも無残な姿とな

あの大きなガスホルダーは、

作して延焼を食い止めたということである。ぶり燃え上るホルダーに近づき、バルブを操

燃え上るガスホルダー

値台市幸町、吉野宰芳さん提供

と同時に、

局職員の何人かが勇敢にも水をか

の状態であった。後で知ったことだが、炎上まだ消防車が放水していたが、ほとんど鎮火

ホルダーが倒壊炎上したとのこと、

構内では

険であり、すぐ供給停止すべきだと声が聞これいいんだろうという思いで頭がいっぱいにない、たった西の空にたなびく地震雲らしきものをたった。事務所に入るとガス漏れ通報の電話が見た。事務所に入るとガス漏れ通報の電話が見た。事務所に入るとガス漏れ通報の電話が見た。事務所に入るとガス漏れ通報の電話がいっぱいにない。これからどうすれば

えて来た。そのうち、工場への原料供給先である東北石油㈱のタンクが倒壊し、 原油が流れ出 138

家庭に送っている都市ガスの供給停止に踏み切った。直ちにガス管点検のため出動していた全 ているとの情報が入り、ガス工場の被害状況はつかめないながらも、午後六時過ぎ十三万戸の 無線で供給停止のための整圧器停止を指令するとともに、

の電話は使えなかったので、 第一段として、広報、連絡にあたることとなり、私は官公庁に対する連絡を引き受け、局内 向いのガソリンスタンドから連絡したが、一個所通じただけで、

りの対策本部が設けられた。

車両に対し、

他へは話し中のため連絡不可能であった。そのころになると、帰宅途中の職員もほとんど局に

戻って来た。聞くとガスホルダーの倒壊炎上、 全面供給停止をカーラジオ等で聞き、途中で引

十時ごろになると市内に散っていた広報班も帰局し、 は、供給停止の広報、 中圧幹線の被害チェッタ、電話によるクレーム処理が続いている。

十分ごろ明日からの復旧対策、 つきを取り戻し始めたが、余篋が時々襲い、誰の顔にもいつもの笑みはなかった。午後十時三 業務分担等の説明があり、 女子職員が帰宅した。

引き続きクレーム受付、 幹線チェック、復旧作業の準備が続いた。そのうち、 東京ガス、

庁に対する連絡、広報依頼等を担当することとなり、

の修理や、ガス管から水が吹き出たりで、作業予定が大幅に遅れ、

制 ガ の準 ス等の応援隊が仙台に向かっているとの連絡が入り、勇気百倍。 備に入った。 ただ、電気、 ガス、 水道の止まっているなかでのホテルの確保は 早速ホテルの手配等受入体 困難を極

めた。

難 家のことは後回しとすることで出勤した。 という。 まるで人里離れた山道を走っているようで、恐ろしく感じられた。 のでいったん帰ることにし、外灯も交通信号も全く消えて真暗な道を、マイカーで帰宅した。 かと不安になった。しかし、ガスマンとして一日も早くガスを、 ところであった。家に着くと、着替え、ラジオ等を入れたザックを枕元に、親子三人で寝てい の準備を進めている家もあった。町内会でも早速対策本部が設けられた。家は大丈夫だろう 午前三時三十分頃、 家はあまり大きな被害はないようなので一安心。 から、 翌朝起きて見ると道路がくの字に曲っている。三軒先から危険区域ということで、 道路から水がふき出している。水道管の破裂か湧水か、道路を堀り調査している 全面復旧までの約一ヵ月間、 準備も一段落し、休むこととなった。私は、家の様子が気になっていた 対策本部報道班として、 しかし、この緑ケ丘団地は被害は大きい 供給することが先決であり、 家の近くで人だかりがあっ 情報の収集、 報道機関官公

何十個字

復旧予定の修正に追われた

被害の大きい地域に入ると、

定の決定より報道が先行する等緊張の一ヵ月間であった。 り、テレビ放映数分前の電話連絡、また時には一日も早く復旧したいとのあせりから、 作業予

なって、考え行動することが、どんなに大事なことか身をもって経験した。今でも地震がある 接者に対する、市民の温かい心違いがあったればこそ成し得たものと思っている。他人の身に 北海道から南は九州まで全国ガス事業者の応援、官公庁、各報道機関の全面的な協力、また応 これで終ったという気持であった。この陰には、ガス協会の指導、東京ガス、大阪ガス等北は しかし、一件の事故もなく十三万戸のガスメーターを再開し、ガスを供給した時は、本当に あの時のことが一瞬頭の中をかすめ、身を引き締められる。

(被審地 仙台市学町五一一三一一)

見ると何も目に止まらず、

石を積んだダンプ車が五、

所が上下に揺れ始めた。右手が入口の柱を握ったままで、歩くこともできない。事務所内のパ

おかしいと思っていると、ドドドドー、という音とともに仮設事務

六台一緒になって工場内に入って来るような感じがした。

# 八百トンのガスホルダーが揺れ、船のよう

れる。 かどうか確認の電話があり、異常なく運転中である事を報告する。 継続中であるとの返事があり、安心する。十七時十分、工場長より地震による被害がなかった ントロ 十七時十四分、 六月十二日、十七時三分来客中にかなり大きな地震があり、プレハブ仮設事務所が大きく揺 客は急ぎ帰って行った。ラジオの地震情報によると震度二であることがわかった。 ール室に電話をし、プラントに異常がないかどうか確める。プラントは異常なく運転 仕事の整理をして、帰る準備をしていると、ゴー、 ٦̈́ と地響きをたて砕 私は

外に出て

め自動停止したとの報告を受ける。 ベレーターより火災発生なし、事務引継中であったため、けが人もない、ブラントは停電のた る。工場内に火災発生がないかどうかを確認のため、 かせる。 స్త シュシューン、プラントが停止し遮断弁の閉じる音がする。やがて工場全体が静寂に包まれ で恐ろしい。約一分経過し揺れがおさまってくる。 秒も経過しただろうか、まだ揺動はやまない。球型ガスホルダーが今にもころがって来るよう 剱味な音を響かせる。ブレース同士の打ち合う音がバーンバーンとかん高く聞こえる。 鉄製の球型ガスホルダーが紙風船のように上下に揺れ、支柱のたわみ音がキュン、キュンと無 を見ると、直径三百段の冷却用水管が東西へ揺れ動くのが見える。また重量が八百岁もある鋼 工場内被害調査のために事務所内に残っている人達に応援が依頼される。 全神経を耳に集中させ物音を聞く。何も聞こえない。よしだいじょうぶだと自分に言い聞 経験から高圧のガス等が吹き出すと爆鳴音とでも言うかものすごい音がするはずであ キューン、キューン、 コントロール室へ電話をする。チーフオ 回転機の止まる音、 工場長へ連絡のた 約三十

していた職員四、五人が事務所に戻って来た。事務所内の状態を見て驚きの声を上げた。十七

つながらない。二度三度ダイヤルするが結果は同じ。

帰ろうと

め、ガス本局へ電話をするが、

らガラス器具の割れる音がする。

7

ション、

食器棚が倒れる。本棚、机上から書類がドサドサと床に落ちる。隣の分析室か

机は「紙ずもう」の力士のように室内を動き回っている。外

プを引く。ブブブブー、

チビの発電機が動く。

これで電話交換機は動かせるぞ。急いで事務所

ル室へ戻る。 ライトで変電機器、 色から建屋の物であることがわかる。 電設備は鉄骨ALC造りの建屋に入っている。 タンクを次々と調べて回った。 コントロール室を呼ぶが、電話はジージーと音がするだけで通じない。急いでコン 内部はALCのからが散乱している。ナット付切断ボルトが三個見つかる。ペンキの がいし、 母線クランプ等をひとつひとつ確認する。 異常なし。 地震の揺れによる異常張力で切断されたものであろう。 コントロール室へ報告する。 建屋は外見上異常ないようだ。ドアを開 次に特高変電所だ。変 異常な 報告のた 卜口 け内部

時二十分、手分けてし工場内の被害調査を開始する。

私達はLPG、

ナフサ、

A重油

の各原料

W一台、二KW小型発電機が一台。私はその場で動かして見る。一回、二回、 思い、修理工場へ探しに行く。あった、 に有線、 くなった。工場内、 十八時二十分、 あと五十分もすると日没だ。工場内は真暗になってしまう。 無線のページング装置があるので問題はない。あと一時間ぐらいは通話が可能であ 地震より約一時間経過した。電話交換機用非常電源である畜電池 外との電話による連絡は不可能となる。 あった、 修理工場の片隅にポータブル発電機四百五 工場内連絡手段としては電話の外 非常用発電機があればなあと スター の電 ŀ 甪 気 分がな U

に戻る。早く電話交換機を動かさなくては外部との連絡がつかない。電話交換機にチビ発電機

分、電力保安電話が通じ、宮城県内の送電設備、 るかわからないとの連絡を受ける。私達はこのまま待機することとなった。 がないことが判明し、 みの保安用照明を確保する。 時三十分、外部との連絡通話を再開する。十九時、二KW小型発電機によるコントロール室の を接続しエンジンをかける。 職員一同安堵する。あとは電気の来るのを待つのみである。十九時二十 地震による工場設備の被害はほとんどなく、ガス製造再開に問題 力いっぱいスタートロープを引く。ブブブー発電開始する。 変電設備の被害が大きく、 何時ごろ送電でき

## 「配水流量計異常」の報告に観念

(被災地)多賀城市栄四―四―一)

(現水道局建設部長) 仙台市水道局給水部長

尾

真

時間 ガ | |-|-(午後五時二十分)がくるまで一人でポツンとさびしく待っていた。前震がきたのは午後 マンが窓の施錠を確めブラインドを下して行った後の部屋で、私は自動車学校へ通う かった。

に切り替えたばかりであった。 用電話のため、 てしまった。「これはえらいことになったぞ」と、青ざめながら直ちに浄水場へ電話した。専 ものではなかった。逃げた途端に콸搦が机に落ちてガラス戸がめちゃくちゃ。電話機もこわれ 出 ない みつめていたら、 五時六分だった。 し上部が倒れそうに傾いた。すぐ横にいた私は、 かと思った。 「国見浄水場も茂庭浄水場もすぐ通信できた。浄水場で は停電のた め自家発電 案の定、ぐらぐらっときた。午後五時十四分であった。 電気がすぐ消えた。 いやな予感がした。次にもっと大きなやつがくるのでは? ロッカーが移動を始めた。二重ねの書棚ががたがた動き とっさに手をかけて防いだが、 局舎が倒れるんでは ٥....ط 防ぎきれる 時計を

水量の変化は地震時における被害程度を知るための目安なのだ) 示した。三~四分もたったろうか?(ずいぶん長く感じた。いらいらしていた。 - 着水と配水流量計を見て、大きな変化があるかどうかすぐ知らせろ」と息をはずませて指 (着水量と配

たが、 変化がないということは、 る」という回答であった。そうか、やっぱりやられたかと頭を抱え込んで観念した。 国見、 配水流量計がスケールアウトになったことで、配水幹線が破損したと判断せざるを得な 茂庭浄水場とも「着水量に変化なし、 取水・導水施設に被害が無かったと判断して良い。これはホット 配水流量計の針がスケールアウトになって 着水量に

引き続いて浄水場に、浄水操作機能上の被害があるかどうかの調査を指示するとともに、

巻配水所の流量計だけであった。「落ちつけ」と自分に云い聞かせて時計をみたら午後五時二 年寺山配水所の配水量を調べさせた。やはりスケールアウトになっていた。無事だったのは荒

ゃと、直ちに浄水場にフル操業を指示した。このとき、 茂庭、国見、大年寺の配水幹線がやられたのでは市内の大部分が断水になる。えらいこっち 十勝沖地震で罹災した八戸市、 青森市

十四分だった。

った。電話がなかなか通じない。大石工業所の社長(水工会の副会長)が飛びこんできた。総 応援に行って、目のあたりに見た管路の復旧及び臨時給水状況が思いだされていた。 午後五時二十八分、何はさておいても、非常時態に対応するため職員の動員連絡にとりかか

務課長がきた。これ幸いに職員の動員を協議し、第三配備で管理者の了解を得ることとした。

このあと、浄水場との連絡はひっきりなしとなった。幸いにも茂庭、 また一方で、大石工業所の社長に業者(水工会)の応援を要請した。 国見ともスケールアウ

ときに午後五時三十分であった。

きい配水量であった。針がふり切れたのは、急激に流出した水のためのショックだったことが トになっていた配水流量計の針が漸次下って落ちついてきた。 しかし、 平常時に対し異常に大

判ったが、配水管の破裂が間違いなく数多いことが一目で判る流量であった。

146

のますみ幼稚園前で4四百が破損漏水しているためだった。バルブを閉めるため早速当直員を そのうちに、大年寺山配水所の水位が低下し断水となる状態になったが、これは、 越路地内

(被災地

仙台市二日町一一

出動させた。

#### その夜の水道局

(現水道局国見浄水課長)仙台市水道局工務課主幹

毅

安

が一刻も早く生活のリズムを回復すべく日夜鋭意努力されたため、 者と莫大な損害をもたらし、ガス、水道、電気がストップ、国鉄、 わりの深い機関がすべてマヒしたため、市民は耐久生活を余儀なくされた。しかし関係者一 六月十二日午後五時十四分発生した宮城県沖地震は、 今(七月十五日)顧みればまるで二~三カ月前のことのように思えてならない。 値台市を中心に東北地方に多くの犠牲 電話等日常生活に最も 復旧作業が予想以上に早 か 百 j,

私は、退庁後月一~二回職場のグループと雀荘へ馳せ参じるものであるが、その時も牌の感

開きのドア一カ所。これを夢中で開き階段を駆け上がって屋外の街路へ脱出した。 触を求めつつゲームが進行していた。突然上下左右に激しく揺れ動いた。麻雀屋は地下一階に ありコンクリートの床下から地殼の破片が吹き上げてくるようになった。地下室の出入口 地上の建築 には片

の動きなどを見つめながら、ただぼう然としてビル脇の空地に 直立し、周囲 を見わ たして い

コンクリート電柱等の揺れの激しさ、消防車、救急車のけたたましいサイレンの音、

人々

間もなく地震はやみ、ひたすら夕日を眺めれば、あたかも初秋を偲せるすがすがしい梅雨期

落着きをとり戻し、グループ三人の安否を感じながら再び地下室へ入った。互いに無事であ

の西空であった。

急いで街路へ出た。 ったことを確認しあったが、周りのテーブル、食器等は粉々に飛散し、 ただ哀れのみ感じつつ

応対してほしい」と声をつまらせながら話されたので、これはただ事ではないぞと直感した。 二十三分ごろと思われる。ガードマンが私の顔を見るや否や、「電話が殺到しているのですぐ れば市内全域が断水という最悪の状態も想定させる。)水道局へ直行し到着したのが午後五時 グループのある人が『浄水場がやられたかも知れない ぞ!』と言った。(浄水場が破壊され

対 ながら、 数名集め の間隊をぬって上司の連絡 工務課で電話をとるから回してくれ」と言いながら、 電話回線数の制約で連絡はとどこおりがちで、 やっと午後七時前には過半数以上の職員が集結し、 (たまたま退庁後他課の数名が居残っていた) (工務課長は東京出張中) 電話の応対にあたった。また、電話応 また、 や工務課全職員の非常召集という慌 その後も続々と来局する。 車両が道路を埋めつくし、 グループ三名のほか応対要員を しかし 職員

H が 一没の午後七時過ぎには、 :来局するまで相当の時間を費したもようである。 停電のため室内は暗闇。 手さぐりで受話器をとり、 電話応対 は引き

続き行われた。

ィに取りかかっていた。 たもので そのうち、 たとき、 (去年冬と今冬と引き続きの異常寒波に直面し苦しい体験が生かされている)、冷静 映しだされた職員の顔、 現場作業用の自家発電を使って(庁舎内用の自家発電は作動しない)室内が点灯さ 表情は、 緊張した眼差しながら各自仕事の分担をこころ得

他の電話連絡をとるよう指導した。その受付の中には、今すぐ現場へ来てほしいと要請され 当初の受付け方法は、応対要員も少なかったため、 で応急止水できるもの) たは二次災害を誘発しそうなものを重点的にメモし、 は、 あす改めて電話下さるようお願い 最初に被害内容を聞き、 比較的被害の小さなもの Ļ 通話 胩 誾 被害の大きなもの Ø) 短縮をは (水抜きせん か

ものが十数件あったが、地震が退庁時のラッシュと重なり信号機は止まり、 道路は車の洪水。 150

今出動したら車と車の間に入るのが精一杯で、車同士の事故でも誘発することを懸念し、 しば

し車の流れ状況をみながら出動体制を整え、待機させた。

は応急処置にとどまった)が開始された。その後も電話は鳴りっぱなしで、自分自身のところ

やっと午後九時過ぎには軍も流れ始めたため、工務課が担当する給水装置の復旧工事

(事実上

たところ、二階の屋根瓦等が損壊した程度で人災はなしとのことであったので、やっとここで はどうなっているのかが気になっていた。午後九時三十分過ぎ自宅へ電話し、被害状況を聞い

一安心したものであった。

次と帰庁してきたため、本番は明日からと考え緊急要員を残して過半数以上の職員を帰宅させ しかし、真夜中に近づくに従い、電話は次第に少なくなり、さきに現場へ出動した職員も次

午前二時過ぎ、さきほど現場調査に行ったところから再び電話があった。 道路 (団地内管理の

民の婦人十数名が集まって来て、今水道を止めたら水洗トイレは使えないし、朝食の炊事、洗 地域は新興住宅団地で町内会役員数人が夜通しで警戒体制を敷いていたもようである)付近住 私道)が水道漏水のため決壊しそうなのですぐ水道を止めてほしいとの連絡であったので、 っそく現場職員が出動した。危険を察して口径五十ミリの仕切弁で止水しようとしたら、 ž

私

の乗った宮城バ

ルを踏みながら帰り、 たが、道路が決壊することはなかった。 に従い通水してよいと指示したが、後日当該水道管の破裂事故を復旧するまで気懸りではあっ してきた。私は、道路が二~三日持ちこたえると判断できれば住民の意志(ご婦人の大多数) 夜も更けて、当日の帰宅は翌朝四時ごろになった。霧の立ちこもる早朝に自転車の重いペダ 二時間程休息し、六時三十分ごろには再び局へ出勤した。

(被災地

仙台市二日町一一一)

たくに事欠くので止めないでほしいと嘆願され、

現場職員はどう措置すればよいか無線で連絡

### 水道管破裂で洪水

(現水道局料金課長)仙台市水道局建設第二課主幹

遠

野

雄

政

で数人の大男が車体をゆすっている感じで、 私は思わずドアの方を振返った。 数人の女客が悲

スが市立病院前停留所を発車する直前、

まる

急に車体がグラグラ揺れる。

鳴を上げ「降りますから」と叫ぶ。運転手は発車を中止し、「地震のようだが、降りない方が

安全ですよ」と言って制した。

が始まっており、電力ビルの窓ガラスが破れ、下の街路に散乱している。仙台駅前まで来た 「うーん、これはかなり大きな地震だなー。汽車は動かないかも知れない」と思い、私は駅 数分後にバスは発車したが、広瀬通り交差点の信号機のライトが停電のため消え、交通渋滞 日乃出ビルの屋上給水塔から水が噴出し、下の街路は雨が降ったように濡れている。

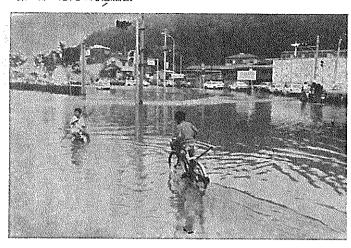
前で降りず、このままバスを乗り継いで帰宅しようと決めた。 バスは駅前を発車したが五橋附近の混雑はひどく、なかなか進めない。やっと愛宕大橋を過

い」と聞き、私は急いでバスから降り現場へ走った。 ぎたとき、前方の車道が水浸しになっているのが見え、通行人から「水道管が破裂したらし

ん流れており、深いところで三十炒位もあり、ちょうど洪水のようになっている。 水は三島学園短大「ますみ幼稚園」脇の道路から流出し、 車道を越えて広瀬川の方へどんど

ら下りてくる6四百ミリ鋳鉄配水管が埋設されている水道局専用道路で、中央に大きな穴が空 ンをまくって洪水の中を横切り、水道管の破裂現場に行った。現場は、山上の大年寺配水池か 「これは大変だ、現場確認のうえ早く連絡しなければならない」と思い、私 は靴をぬ きズボ 水がものすごい勢いで流出していた。私は付近の民家から電話を借りたが不通でだめだっ

#### 第一部 必死の応急活動



水道管破裂による洪水

工事中の川崎製鉄の作業員が二人いたので、水道事故のことを知っているか聞いてみた。
 ポンプ室で作業をしていた」という。私は、直ちに山を下りポンプ室へ行ってみたが、ここも鍵がかかっていてだれもいないので、大下寺住職宅へ行き電話を借りたがやはり不通で連絡がとれない。停電していたのでトランジスターラジオで地震の情報を聞かしてもらジスターラジオで地震の情報を聞かしてもらジスターラジオで地震の情報を聞かしてもらジスターラジオで地震の情報を聞かしてもらい、各地で被害が続出していることを知って連絡がとれない。停電していることを知って連絡がとれない。停電していることを知って連絡がとれない。

ず、がっかりしたが、ちょうど配水池付近で

配水所へ来てみると鍵が掛っていて入れ

で連絡しようと思い、

山道をかけ登った。

それでは山上の配水所へ行って専用電話

門前の二八六号線角まで出てハイヤーを待

*†*:

ったが、全然来ないので、やむなくまた山上の配水所へ登った。ちょうど川崎製鉄の鎌倉環場

代理人が来たところだったので、二人で竣工直前の工事現場を巡回し、本工事現場は盛土等の 一部崩落等がある程度で大した被害でないことを確認したが、「明日再度巡回点検するように」

指示した。

連絡したところ「震害対策本部が局に設置され、第三配備の指念が出て職員は局に集合してい 員が来ており、「すでに事故の善後措置はとった」とのことである。専用電話を借りて本部へ ふと山上の配水所事務室を見上げると電灯がついていたので急いで行って見たら、浄水課の職

職員の大半はもう地震対策にはね回っており、私も事故現場の状況を報告するとともに、当夜 の分担の仕事を終え、帰宅したのは午前二時を過ぎていた。 る」ことがわかり、直ちに川崎製鉄の工事車に便乗して本局に到着した。時に十九時三十分、

生の長男がローソクの灯をともして勉強していた。 もちろん停電で、足の踏み場もないほど家財が散乱していたが、試験間近かの高校

(被災地 仙台市越路一七)

## 波の上の船のように揺れたバス

仙台市交通局バス運転手

喜

「たいへんだ」と立ち上がった方も数名いましたが、私は「バスの中にいる方が安全です から 車内マイクを使用して、地震であるこを伝えました。 それまで乗客は一人として地震であることがわからなかったようです。 すると乗客の中に

と直感しバスを停止させました。バスは上下左右に揺れ、走れる状態ではありません。そして ル操作ができない状態になり、電線を見ると突風にでも煽られるように揺れています。地震だ うな感じを受けました。衝撃音もなく変だなと思うと、タイヤがパンクでもしたようにハンド

号車を担当し、東一番丁経由長町駅前行「グリーンバス」に乗客約二十五名を乗せて、河原町 昭和五十三年六月十二日、晴、暖かな良い天気の日でした。私が仙台市営バス宮二二か九一八

バス停約五十ぷ手前にさしかかった時でした。十七時十二分ごろ、突如何物かに追突されたよ

てたのでは乗客を混乱させ、けが人でも出したらそれこそ大変です。私自身から気をしずめる さってきはしないか、物が飛んできはしないか、そんなことが一番気懸りでした。自分から慌 けれどバスは波に乗った舟のように大揺れに揺れて、今にも電柱が倒れてパスの上に覆いかぶ 窓から顔や手を出さないで下さい」と注意し、乗客の興奮動揺を仰えるように心掛けました。

ように揺れのおさまりを待ちました。

分長い時間に感じました。 れて土煙りか砂ぼこりのようなものが舞い上がり、二、三百ど先はかげろうを通してものを見 るように薄ぼんやりと見えました。揺れがおさまるまでの約二分間ぐらいの出来事ですが、大 道路上に窓などを破って飛び出し、住宅の壁は崩れかかってきます。道路は波をうつように揺 行者はただ街路樹などにつかまっているのがやっとのようでした。道路添いの商店では商品が もいますが、歩くこともできずにただ車にしがみついている状態でした。また、歩道上では歩 外をみると道路上では車両が全部走行不能になり、その場に停車して車外に出た運転手さん

商店内は見るも無惨な状態でした。終点近くではけが人でしょうか、タンカに乗せられて運ば ゴトときしむ音が出ないためあまり恐怖感がなかったようです。私は車内の異状の有無を確認 栗客の中には、家にいなくてよかったという声もありました。 パスはただ揺れるだけでガタ 運行を統行いたしました。途中長町一丁目付近は家が倒れ、戸や窓ガラス等が飛び散り、

地震、雷、

火事、

親父。

いまさらながらあらためてしみじみと地震の怖さを感じました。天

なく、 れる方もありました。私のバスは、ラッシュのちょっと前と下り線のためか割合に道路混雑も 平常と変らず運行できました。

い地震ですので私も家の事が心配で早速帰宅しました。 私のダイヤは終りなので、回送で営業所に入庫しバスを車庫内に収めて、 あの強

家族が私の家で二日間生活しました。停電のため夜はランプとロウソクの暮しで、戦争中が思 娘さん二人が青ざめた顔で立ちつくしておりました。 台に来たため身寄りがないとのことで、部屋が片付くまで義兄家族、石原さん家族を加え、 さん方も同様に室内はメチャクチャでした。あいにく石原さんの主人は出張とかで、奥さんと た。けが一つなく本当に奇跡としか言いようがありません。義兄の向かい側に住んでいる石原 態です。家具という家具は全部倒れ、その中間に義姉と娘二人が立ってただ震えておりまし 出されました。 幸いなことに私の家は被害は全然なく、安心したしだいです。ただ、長町支所の上の公団ア に住んでいる義兄の家との連絡がとれないので行って見ると、室内は足の踏み場もない状 話を聞くと、主人の転勤で長野県から仙

災、地変は忘れたころに来るといいますが、今後二度とこのようなことが起こらないよう願 (被災地 仙台市河原町一)

## 交通渋滞の中、乗客を運ぶ

大 沼仙台市交通局バス運転手

霓

次

昭和五十三年六月十二日午後五時すぎ、私は職場に携わっていました。

仙台駅前を定刻に発車し、東支所前にさしかかると、突然バスが激しく揺れました。バスの

の乗客が降りたがその場で地面に這いつくばる人、また車内に戻る人とバスの中はごった返 発したのではないかと思い、乗客を避難させるつもりでエンジンを止め、ドアを開いた。 までと思ったが、走ることさえできずその場に停車。その瞬間左後方で大音響、エンジンが爆 重大な故障かなと思われるような、すごい揺れだった。揺れが一向におさまらないので停留所

車、バイク等は倒され、人々は皆地面にしゃがみこんだり、必死で立木にしがみついている様 爆発音はすぐそばのガス局の巨大なガスタンクだった。窓から外をのぞいてみると、

し……。そこではじめて地震だ! と気がついた。

ために備えて、

ローソクの灯の中で入口にぽつんと座っている。

な状況だった。

験である。こんな状態では交通網はおそらく全面ストップだろう。 ブロック塀等は倒れ、 るのだろう。 り返し仙台駅前に向かった。 とにかく運転しなければと思い、 汽車と違い、せめて柔軟性の大きいバスだけは運行させなければと思い、また折 看板等が道路を占領し、 次の停留所へ向ったが、 車は通るのもやっとだった。私には初めての体 途中は目を被うば 通勤、 通学者は一体どうな いかりの

狭い入口へなだれ込む。 バ 聞きとれないほどだった。皆、家のこと、家族のことが心配なのだろう。私もできることなら で到着。 ラバラ路上に降り注ぎ、また電柱やブロック、看板等がいたる所で倒れている。 交通信号は全面停止。交差点のど真中で車が身動きできず四方に渋滞が続く中、 市内ではビル火災や各地でガス漏れや停電が続き、 すぐまた折り返す。 身動きできないほどの車内では地震の話題でざわめき、 ドアを開けるとわが身のことばかり考えるのか、 繁華街ではビルや商店のガラスが割れ、 マイクの声も われ先にと、 やっとの思

このまま家に帰りたい心境である。 と騒音だけが生活を感じさせる。家に着くと、 X 時間 鸣 五時間だったと思う)遅れて家路につくが、 妻は子供と一緒にまた来るかもしれない地震の 街は真の闇……。 自動 軍 **のライト** 

部屋に入ると、ここでもまた地震のすごさをみせつけられた。仏壇、書棚、整理戸棚などが

する気力をうしない、ただぼう然とするばかりで、何から手をつけていいか分からない……。 倒れ、ガラスや食器等の破片で足の踏み場もないほどだった。あまりのひどさに私も後片付け

後片付けより先に腹ごしらえと思っても、水はでない、電気、ガスも使えない、兄弟に連絡し ようにも電話は通じない。

た。我が家へ戻るが、まだガス、水道の復旧のメドがたたず、とても不便な思いをした。 幸い姉より連絡があり、被害は全くないということで三き先の姉の家に三日ほど世話になっ 初夏の夕暮れ時のため火を使っていなかったことが大惨事から免がれた。不幸中の幸いとで

もいおうか。

(被災地 仙台市東仙台四—一)

#### 第二部

悪夢のような惨事

私は、

### 長女の右大腿部切断

主

伊 娇 藤

ŧ すこ

じられず、まさかそれが前震だったなんて……。 る道路は、 て「今、地震があったのよ」と言うのです。 間もしない六月十二日の午後五時過ぎでした。その日は、朝から天気が良く私と長女、 の次女と三人で六郷に住んでいる姉の家から帰って間もなくでした。隣の奥さんが青い顔をし あの恐しい宮城県沖地震が起こったのは、 デコボコ道で、おまけに、ポンコツの車を運転していたものですから、ぜんぜん感 何しろその当時は七郷小学校の所から六郷に抜け 忘れもしない長女の美紀の四才の誕生日 か 十カ月 B 過

163

長女の

その時です。「ゴーッ」

ビを見ていて、次女は歩行器に乗って座敷のタンスの前にいました。

いそいそと五時をまわった時計を見て夕食の用意を始めました。長女は茶の間でテレ

とものすごい地鳴りがし、「あっ、地震なのだ!」。あとは無我夢中で次女を抱っこし、

手を引いて外へ出ようとしていました。

気がついた時には、私と次女は外へ投げ出され、長女は玄関の所で転んで泣いていました。

流れていなかったのに道路にしぶきを上げていました。まわりのあまりの恐ろしさにおののき ながら、とにかく美紀を病院へ連れて行かなければと茫然としていました。 すぐわかりました。出血はなく、意識もはっきりしていました。「美紀、しっかりするのよ!」 と私は叫んでいました。まわりを見ると、土ぼこりがたって、ほとんどの家が歪んで瓦は落 次女をそのまま道路に置き、長女を抱き上げると、左足がブラブラしていて骨折しているのが 壁は崩れ、ガラスはとびちり、電線や木は大きく揺れ動いていました。川の水も少ししか

片やら家路に急ぐ人々で、大混乱。ようやく三十分もかかって着きました。 ぐらいで行ける外科医があったのですが、行く除中、道路はブロック塀が崩れたりガラスの破 ってしまった。早く病院に連れてって!」と必死に訴えていました。病院は、通常なら、 十分ぐらいしてからだろうか、主人が帰って来ましたので私は主人に「美紀が、足の骨を折

でした。その夜は外科の方はベットが満ぱいなので、脳外科の方に入院させていただきまし でごったがえしでした。一時間もかかって、ようやく診察していただきました。やはり、骨折 すぐ居あわせた救急車で、国立病院の方に移されました。国立病院の方も地震で負傷した人々 ところが、大きい病院といっても個人病院なので、停電ではレンドゲンも撮れません。又、 が四ケ月も続きました。

院なのだと半分安心して私は美紀の痛々しい足を見ていました。 ってからも小さな地震が何度かありましたが、これ以上強くならないだろう。 ベットには同じく地震で負傷した人々が横たわってうなり声をあげていました。 しかもここは病 病院に入

帯だらけではありましたが、ちゃんと足が付いていました。 手術もやはり四時間位かかりました。切断した片足は紙の箱に入れられて美紀はぐったりと眠 真暗になって立っていられなくなりました。その時の手術の長い事、 後、すぐ先生に「お母さん、手術をしなければなりません。 からくる高熱との戦い。六月二十九日、 切断になるかも知れませんので気をしっかり持って下さい」と宣告された時は、 せました。午後十時三十分、 たまま出て来ました。なんてにくい地震なんだろう、たった四才の子供の足まで奪わなくっ すると、骨折だけの足の爪が、紫色になり、冷たくなって来ました。 約四時間もかかりました。 あ良かったと思ったのも束の間、日がたつにつれて左足は腐食して行きました。 外科の先生が見えて検査をしなければわ 私は手術室から運ばれて来た美紀の左足を真先に見ました。 小児病棟に移され、 内出血しています。 左大腿部切断になりました。 終わったのは午前三時近 からないとの事。 私は看護婦さんに知ら 私は目 万が一に片足 毎日、 の前 その 傷 包

てもいいのにと、くやしさと悲しさで涙が止まりませんでした。それから毎日つらい闘病生活

美紀に義足を見せた時、「こんなへんな物つけるのいやだ!」と泣かれ たり、リハビリテー

ションに行くのが嫌で、「喪紀、死にたくなったわ」。と言われたりしました。そんな時、

ただ美紀を抱きしめて涙をこらえる他ありませんでした。十月六日、義足を着けてやっと退院

する事が出来ました。

そんな輳紀も、今では小学一年生になりました。明るい性格も取り戻して親子ともども「こ

れから人生そのものが訓練なのだ。」と思い頑張っております。

(被災地 仙台市荒井字丑ノ頭一五―二)

逃げる途中で右足骨折

社.

蒷

葛 四

剛

仙台市六丁目の金属団地内にある今野工業所に勤めて十八年になる当年とって五十八歳の者 あの宮城県沖地震の起こった三年前の六月十二日は、「仕事の都合で深夜残業になるか

私は

を担当し、

が 「ああ地震だ」と思い様子をうかがっていたのですが、周りの者も別に変わった素振りもあ くなってしまったのです。 て外へ出よう、 くなり、その場に倒れてしまいました。それでも逃げなくてはだめだ、と思い夢中で肘で這っ 揺れだったので、逃げる途中機械にぶっかり、その時右足に「チカッ」と痛みを感じたのです きく揺られた、と思ったら今度は上下に何度も揺れ本当に恐ろしくなりました。あまりの強い り大きく「ゴォー」と音がしたので急いで機械のスイッチを切り逃げたのです。 ません。 軽い夜食もすんで、十七時より残業の仕事に掛かって間もなくのこと、ゴォー、 しれないから」と妻に言って朝七時十分ごろには家を出て、普段と変わりなく会社へと向っ 無我夢中で入口の方へ走ったのです。その時すでに右足が折れていたらしく、急に歩けな 自分でもそうたいしたことはないと判断し、 型物の加工を行っていました。 会社全体の仕事としては、 出ようとしたのですが、もう一歩で出口という所で気を失ってしまいわからな 精密金型を作る事をしていましたが、私はその中で旋盤 仕事を始めた途端、 初めとはうって変わ 最初は横に大 と音がして

やがやと騒々しい気配がしたのですが、それも微かにしか分らず、無意識の中で「足が折れた 揺れもおさまり、外へ逃げた同僚が工場内に戻って来て皆で声をかけてくれたようです。が

みたいだ」と言い、またぐったりとしてしまったのです。

167

ているのは、何人ものけが人が呻き声を上げながら横たわったりしていて手当の順番を待って まもなく同僚が私を板に乗せて会社の車で指定の外科病院に運んでくれました。その時覚え 168

いた、ということでした。苦しかったせいもあるのか、待ち時間が本当に長く感じられまし

**ろされて急ぎ応急手当をされ、病室に運ばれました(私は右大腿部骨折で三ケ月の重傷をおっ** はなおさら心配になりました。その後間もなく、私ともう一人の方が国立病院へ回されたので た。そのうちにそこの病院の先生に、重傷の人は別の病院へ行ってもらうから、と言われ、私 やはりここでも頭や手、足などにけがをした人達が多くおり、私の場合は、玄関の所で降

ったきりで右にも左にも向けることができず、少しでも動かすと神経にさわり、 折れた右足は、 おもりで吊られて足を延ばす様な仕組みになっていたのですが、上向きにな あまりの痛さ

ていたのです)

に大きな声を「ギャーギャー」と張上げて三日三晩唸り続けました。その間は何とも言い様の

術がなされ、その後には熱が上がったり下がったりの連続で、苦しい日が一ケ月近く続きまし いました。本当にあの地震で婆も私と同じようなけがなどをしていたら、などと思うと、胸が ない辛い思いがしたことを今でもはっきりと覚えています。そして一週間目には右大腿部の手 用便はもちろんのこと身の回り一切のことは全て付きっきりで薬に世話をしてもら

ゾーとするとともに改めて妻に対して感謝でいっぱいになりました。

どはっきりと思い出されます。

「地震」——それは私にとって本当に恐ろしいものであり、このような大きな災害の時には

下ったりしました。そして四ケ月目には退院することができ、 たのだ、とうれしくなり、また、生きていることの幸せを感じました。 で便所にも行けるようになりました。今度は松葉杖で歩く練習に変わり、 に車椅子に乗る練習に入り、自分でリハビリテーションに毎日通うこととなり、ようやく一人 うになり、また毎日の機能回復訓練の結果、ベットに脊柱を支えてもらって座ることができる ようになりました。その後は、ベットの脇で立つこともでき、しかし長くは続かず、そのため すことができず、それから一カ月ぐらいになってようやく足首を上下に動かすことができるよ そして手術後二ケ月目ごろには、主治医から足を動かすようにと言われましたが、全然動 へ帰ってからも一週間に一回通院をしましたが、日一日と良くなって行くのがわ 病院という箱の中から開放され 毎日階段を上ったり りまし

人がたくさん集まり、呻き声やら騒々しさ\*、、まるで地獄絵図を見ているように感じたことな は私にとって未だ終ってはいないのだ、と思うのです。 た。しかし、今でも特に寒い日などは足の関節が痺れるようになります。その意味では、 以上地震の体験を述べてまいりましたが、今でもあの不気味な音、そして揺れの激しかった また無我夢中で逃げようとしても逃げられず死ぬ思いをしたこと、そして病院ではけが

り、このことが本当に大切であるとしみじみ思いました。 一人の力ではどうすることもできず、他の人々との助け合いがあって初めて実を結ぶのであ

落ちてきた天井と机の間に手が挟まり

1 媚

75 り 子

あのころ私は、仙台市東部にある卸商団地のA社に勤めておりました。

A社は、鉄筋コンクリートの四階建てで、前面に大きなガラスがはめこまれている近代的な

ビルでした。

地震のあった日、事務所一階では二十人前後の女子社員が仕事をしていました。

はその場にじっとしておりましたが、揺れがものすごく大きくなってきたのでそのまま座り込 「今日の仕事も終りだな」、と思っていた十七時十四分、大きな揺れが来ました。最初のうち

(被災地

仙台市六丁目金属団地)

用の机の間に手がはさまって抜けなくなっていました。中腰になったまま忘れられてはいけな したがどうにもならず、 した。壁や天井も落ち始め、あっという間にあたりが暗くなり、気がついた時には天井と受付 した。その瞬間、 んでしまいました。二、三人が外へ出ようとしたのが目に入り、自分も慌てて玄関に向 必死で「手が痛い」と叫びました。五~十分後に二~三人の男子社員が助 窓ガラスが雨のように降ってきたので受付用の机の上に手を置きしゃがみま 結局は地震から二時間もたった十九時過ぎに特別消防隊に助け出され けにきま かい

机の下に入っていた人達はぶじでした。

から落下物などでけがをしたりするので高い所へは物をあげないことなど教訓として残りまし までしてしまいました。あの時慌てたのがいけなかったと反省しています。地震のときはあせ って動き回らず、テーブルや机の下など丈夫な所にもぐり込み、じっと様子をみること、 じっとしていなかった私は、救出されるまで二時間近くも閉じ込められ、 閉じ込められている時、幸いにも火事にならなかったのが何よりだったと思います。 おまけに手にけが 、それ

あ たった一分たらずの揺れのため四階建ての私達の会社は一階部分がぺしゃんこにつぶれ、 の地震の時、 救出にがんばって下さった消防隊の方々に、心から御礼申し上げ Ξ

がきたら、すばやく火の始末をすることも大切だと思います。

階建てのようになってしまいました。

得た教訓を生かし、強く生きたいと思う今日このごろです。 小さな揺れのたびにあの地震を思い出し、身をすくませている私ですが、今後はあの地震で

(被災地

仙台市仙台市大和町四ーーセン

## 閉じこめられた女性を救出

会

社

具

こえたと同時に、褰の社宅の建物がグラグラと大きく揺れはじめました。一瞬びっくりして三 車場に車を止め、事務所に向かう途中のことでした。突然ゴォーというものすごい地鳴りが聞 昭和五十三年六月十二日午後五時十二分ごろ、ちょうど仕事から帰って、会社の裏にある駐 柴 Œ 成

十好ぐらい建物から逃げるようにして離れました。 ようやくおさまったのでホッとして事務所に向かおうとした時、S君が頭に座ぶとんをかぶ

た事務員をお願いして、

早速会社に戻りました。

の後、 二、三人を残して一人のみ国立病院へと急ぎました。 治療するよう依頼したところ、そのような方は国立病院の方に行ってほしいとのことで、 ず三、四人を近所の病院に治療をしてもらうつもりで駆けつけましたが、待合室はもうすでに けがをしている人達で混雑しておりました。特に頭を強打している人がおりましたので優先で おりました。 って泣き声で「大変だ、会社が壊れた」と言いながら裏の社宅の方に走ってきました。すぐそ 女性の事務員数人が泣きながら出てきました。その中でけがをしている女性が三、 一人は特に頭を強打されて相当なショックを受けており、先発隊としてとりあえ 他の

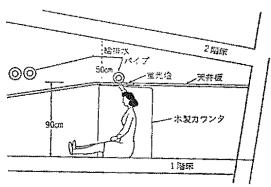
「こちらは私が面倒を見るから、会社に戻って手伝いをしてくれ」とのことで、そのけ がをし が気ではありませんでした。待つこと十分ぐらいにT部長もけがをして同じく治療に来られ、 同じように国立病院もけがをしている人達で混雑しており、待つ時間の長く感じること。気

りました。全員で救出するよう手を打ちましたが、手におえないとのことで近所の消防署に救 とんど全員がすでに脱出しておりましたが、一人の女性のみ事務室内に閉じ込められてお

事務所、倉庫を監視する二十四時間態勢が従業員の交代で行われ、私が自宅に戻ったのが、 救出していただきました。これで全員が無事であることが確認され、 援隊を要請しました。 要請後一時間ぐらい待ったと思いますが、さらに一時間ぐらいか その日の夜より、 かって



矢 崎 総 業



つぶれた一階事務室に閉じ込められた女性

時半ごろだと記憶しております。今回の地震発生時には事務所の中に四十八人が入っていたと 員が机の中に隠れたことも大きな要素だと推察できます。 のことですが、死者が一人も出なかったことは、本当に不幸中の幸いだと思もいます。また全

(被災地

仙台市大和町四-十七)

# 挟まれたSさんをやっと救出

会 社

Ш 員

本 友

之

ウッ、まただ。さっきよりも強い!

大地震であることなど考えるすべもなく、ただただ早くおさまってくれとひたすら胸の中で繰 り返していた私でした。 昭和五十三年六月十二日、午後五時十四分、これがあの宮城県沖地震と名付けられるほどの

私の勤務している㈱パロマ仙台営業所は、

175

戦後一番にこの苦竹の地に建設された鉄筋コンク

リート三階建てのビルで、十年程前に東北の母店として東北各地にガス器具を販売するために 176

営業所として設立されました。その一階は、部品倉庫と修理室、二階が事務所、そして三階は 会議室になっており、当日事務員八人が二階、サービスマン一人が一階で仕事をしていました その日も仕事がもうすぐ終ろうとする時間で、今思えば予告とも思える一度目の地震のこ

となど頭の中から消えたころ、またしても今度はさっきよりも強い地震が私達を直撃したので

皆とるものもとりあえず机の下へもぐり込んだり、いすから立ち上ったものの、

しゃがみこ

した。突然、窓ガラスの割れる音とともに、舞い昇る白い煙、真ん中からV字型に裂けてゆく んでしまうというありさまで、このビルがその後どうなってしまうかなど予想もできぬことで

床、その上をすべるように吸い込まれてゆく崩れた壁やガラスの破片、そして、いつも見下ろ していた隣の家の寄い屋根にもたれかかってやっと建っているなさけない姿のピル……。 事の大きさをひしひしと感じながら、私達はとにかくここから脱出しなければと階段へと走

だったのでしょう。こんなにメチャメチャになってしまった私遠の会社。まわりを見わたせば きてくれました。そして一人ずつ私遠は、このビルから脱出できたのです。何と壮絶な出来事 ん低くなった二階の窓から外を見ると、近所の人達が私達のためにはしごをもって駆けつけて

りましたが、二階は一階をみごとに押しつぶし一分のすきまもありません。やむをえずいくぶ

隣りの会社も、 れでも私達は命が危険にさらされながらも、たいしたけがもなかったことが不幸中の幸い [6] がいの工場も何もなかったように誇らしげに建っているではありませんか。

出 えません。 「口が完全にふさがれるどころか、 実は彼もいったん机の中に身を隠したのですが、 一分のすきまもない程に崩れてしまっていたのです。 二階が 一階を押しつぶしたため、

と思いました。

しかしそれもつかのま、

一階で仕事をしていたサービスマンのSさんの姿が見

しまったはずのところに一個所だけ彼の体がおけるだけのすきまがあったのです。 声に答えが返ってきたのです。奇跡です。 奇跡が起こったのです。 一分のすきまもなく崩れて

ビルの中に向かって声を限りに彼の名を呼びました。何度も何度も呼びました。するとその

は

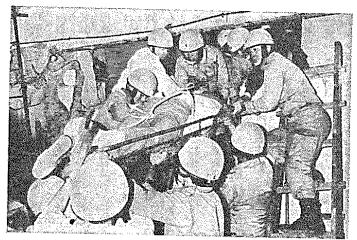
それからというもの、 自衛隊の方々、消防署のレスキュー隊の方々、そして新聞記者、 テレ

譲 ビカメラ、それをとり囲んだ近所の人々。一刻も早く救い出そうと何度も繰り返される作戦会 しかし崩れやすいビルだけに、どこから手をつけてよいのやら。 つの 間 にか霧雨も降ってきました。そしてついに出た結論は、 彼のいるところの天井へ 時間 は刻々と過ぎてゆ

穴をあけ、そこから引き上げる……。 れたのでした。 時間余りたって、 地震発生後約七時間、 直径九十珍ほどの穴の中から彼はレスキュー隊の手によって無事助 これが最も安全な方法だということ。そして作業開始後 彼とレスキュー隊の方々に無意識のうちに心から拍手を 時計は 十二時を三十分ほど回っていました。 中からタン げ 出さ

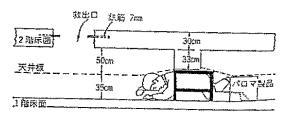
カにのって彼が出てきた時、

私達は、



消防局特別滑防隊の救出活動

河北新報社提供



つぶれた一階に閉じめ込られた男性

送っていたのでした。

あの時のまま、五時十四分を指していました。 全てが終った時、足元には、ガラスの割れた掛時計がころがっていました。折れ曲った針は

(被災地 仙台市原町苦竹字苦竹

土ぼこりがおさまり、見たら屋根がつぶれている

主

婦

伊 藤

喜

私達親子四人、長男親子四人の四世代十人家族でした。 度は五といわれますが、七郷地区はそれ以上だったと思います。何の災害もない平和な住みよ いこの地を、 昭和五十三年六月十二日、それは私達仙台市民にとって忘れることのできない日でした。 一瞬のうちに破壊してしまいました。わが家は八十四歳と八十歳の丈夫な両親と

私は一歳の孫を子守して前の家で雑談していました。「地震」と騒ぎだし、

179

市道沿いのコン

こりがおさまり自宅を見たら、屋根がつぶれているではありませんか。夢中で家へ帰るのも忘 りで家が見えなくなり、自分も地割が起こり地下に吸い込まれるような感じがしました。土ぼ れる市道を走って屋敷内のチビッコ広場へ駆けました。着いた途端、ものすごい職音と土ぼこ

クリート電柱の下に逃げましたが、「電柱の下は危い」と叫んで孫をしっかり抱え、

外に出ると危いと常日頃言っていました。母はうろうろしているうちに茶だんすの倒れるのに 中で元気でいました。蔵の屋根瓦は、一棟は落ち、一棟は小舞が倒れました。家の中は壁は落 われに返って家の中へ入りました。父はさっきまでチビッコ広場にいたはず。二人とも家の 家具は倒れ、 ガラスは壊れ、足の踏み場もない有様でした。父は地震の時は戸だけ開けて

抜けて行きます。長男は田んぼより帰って来ました。

れて、「どうしよう、どうしよう」と叫んでいました。道行く人はわが家へ向って夢中で駆け

まいました。貸家の奥さんが近所の子四人を遊ばせて抱きかかえ、途方にくれていました。 ぶつかって手をけがしました。嫁は四歳の子を探しに外に出て、植木の陰にしゃがみ込んでし

安心したところへ、主人が街よりはたいしたことはないだろうと思いながら

人数を確認し、

帰って来て、びっくりしてしまいました。まづ夜を過ごす所だけでも片付けようと、壁土を運 び掃除し、食器戸棚や茶ダンスを引き起こしながらガラスを片付け、また貸家の被害を見て回 どうにか住めるようになりました。暗くなっても電気がつかない。自家水道は止り、食事

り切れ 0) 用意もできません。 勤務先から二人の息子も無事帰宅し、十人家族が無事故を喜び合いました。 の品もありました。プロパンガスも練炭も使えたが、 長男は慌てて懐中電灯、 ローソク、 食料の調達に出て行きましたが、 水を汲んできての仕事が大変でし

業場の瓦もすっ 家の太い材木を入れてあるとのことで、割合に動いてはいません。 四十二年に屋根の部分だけ改築しました。その改築の部分がつぶれたのでした。床下には昔 組み建てたという太い材木のかや葺きの家でしたが、 治十三年に六代目の祖先 貸家も大部分やられましたが、 かりずり落ちていました。 (現在は十代目) けが人がなくて幸いでした。 ブロック塀も半分崩れ、 が三年かかって材木を切り、 屋根葺き職人がいなくなっ 翌日被害調べをしたら、 半分倒れそうになってい 曲木 たので、 を高 野作 昭和 りに ま

も食堂からとり、 調査特別委員会の委員長になったので家の事は で、 ました。飲み水は一升びんに、使い水はポリ容器に、 合い、解体工事も七郷地区は全部やられたので被害の少なかった小鶴や名取から応援をもらい |娘達のもとで一カ月程お世話になりました。 屋根がつぶれてはそのままで暮せませんので、改築してくれた大工さんがよそに行ったの 親類の家を建てた大工さんを頼み修理にかかりました。主人は市議会の宮城県沖 沓請を始めました。 年老いた両親は幸いショックも受けず、 途中で何度も雨にあいましたが、 一切かまいませんので、 おにぎりも差入れてもらい、昼食、 長男が 宮町 いろい 大工さんが と南染師町 ろ相談し 地震災害 夕食

大きな家なので、やっと外回りだけしか修理することができませんでした。職人さん達も時々 生懸命今度はつぶれないようにと、相当数の鉄板やボルトを使って補強してくれました。

近所の補修にかからねばならぬので、二カ月かかりました。

ました。蔵も解体してしまいました。作業場はトタン屋根にしました。プロック塀も事故がな かったのが幸いでした。全部壊しました。貸家も特にひどい家は引越して行ったので、すぐ修 の中はそのままで三年暮しましたが、冬は寒くて暖房もききませんのでその後一部改築し

理し、その後空家になったつど補修しました。

が、ベットに落ちていました。チビッコ広場より帰るのが数分遅れたら瓦の下敷になるところ いるのですが、その日に限ってチビッコ広場に行き家へ戻ったとのこと。上から大きな神棚 ちょうど地震があったその時間帯には何時もなら父はベットで夕方まで休息して

てて戻れば小舞の下敷きに……思い出すたびにゾッとします。両親も八十七才と八十三才にな でした。私ももう少し走れば、何秒かの違いで瓦の下敷になるところでした。孫も貸家から慌

り元気です。市の水道も引きました。七郷地区には改築できず新築した家も多々ありますが、

私の家は祖先が頑丈に建てて下さったおかげで建て変えずにすんだのがなによりでした。災害 の時寄せて下さった皆様方の御厚情を感謝するとともに忘れることなく、二度とこのような災

(被災地 仙台市荒井字在家二八)

害のないよう祈っております。

182

## 大黒柱から鴨居が外れてくる

農 栗

業 原

漕

冶

私の居所

せん。近くに広瀬川の広瀬という所があるし、舟から荷を揚げ降ろした場所として「揚戸」と も俗名「後初田」と呼んでいるところから考えて、昔開田したところに家を建てたかもしれま いう地名もあります。 といわれている近郊農村地帯です。「初田」、「新田」、「谷地」という田の地名が多く、 仙台駅より五きぐらい、 市の水道管を入れるために二層も堀った所を見た時、 深沿海岸 (太平洋) まで四さで行かれる場所にあります。 泥炭を含んだ粘土 仙台平野 私の家

で軟らかい土でしたから、広瀬川の氾濫でできた地層と思われます。

地震

の時

「この家は地震に強いんだ!

すこしぐらいの地震でも揺れが少い!」と父は常に 自慢をし

きい石をならべてあるし、 ていました。終戦まもない昭和二十四年に新築しました。基礎は数日もかかって固めた所に大 一尺もあるケヤキの大黒柱二本もあり、十ぱもある丸太を何段も重 184

ねた屋根の構造でした。 地震のあった日、 北海道の親戚が三十年ぶりで仙台に来るというので駅まで迎えに行き、家

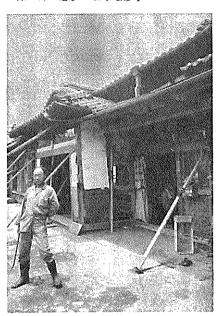
に出た時、 がりながら飛び出したのは父でした。私も飛び跳ねるようにして玄関から外に逃げました。 いう音とともに来た二回目の地震の時、今まで経験したことがない揺れかたにビックリ! 通り筋ではないし、水害もない」とお話の最中でした。「地震だ!」それからまもなくゴーと に齎いたのは夕方の五時ごろでした。「仙台は住みよい場所ですね! 来客がいたと思い出して、また家に入り、抱きかかえるようにして外に出るのがや 地震はないし、 台風も

はこたつにしがみついているのがやっとでした。 台所の吊り棚、食器棚はもちろんのこと、テレビ、茶だんすも倒れてきたからです。 地震がおさまって家に入ると、たんす類は乱れながら倒れているし、襖、障子類は、 家がつぶれる! と直感しました。大黒柱から鴨居が外れてくるし、 土壁が崩れてくるし、 二重三

っとでした。

重に折れているし、 足の踏み場がないほどでした。南側の柱は全部折れ曲って傾きかかってい

たのです。



夢中でシャッターを押しました。

後世のためにも記念写真をとっておきたいということでした。カメラを持ち出して、 その時思ったことは、こんなに強い地震は一生のうちで経験することは少ないことだろ

す。

せたのです。母屋も、

作業場、

納屋、

倉、家畜小屋も、

建物という建物は全部傾いているので

んだ」「家が倒れても人まで倒れてはだめだ」と自分自身にいいきかせるように心を落ち瘡か 砂煙が舞い上がり、ただぼう然となりましたが、「けが人が出ないだけでも大難は小難です

地震に強いはづの家が……, 日本農業新聞提供

私の家だけが被害を受けたかと思って東の家を見ると、かと思って東の家を見ると、ブロック造りの塀が倒れて、見えるように壁が落ち、筋か見えるように壁が落ち、筋かいが外れていたし、作業場はいが外れていない所の二階がしか離れていない所の二階がしか離れていない所の二階がしか離れていない所の二階がしか離れていない所の二階がしか離れていないがある。

るので近所の人々が行って見ると、玄関の下敷きになり柱にはさまれていたので、柱を切って

助けたと後で聞きました。

って揺れたということです。また、用水堀や田の水が舞い上がったとのことです。水稲の苗も ほどの揺れかただったとのことでした。まるで海の波が押し寄せるように、田も道路も波をう ましたが、立っていることができず、四つん這いになったり、腰を下ろさなければいられない 一ヵ月しかたっていませんから、倒れたり、浮き上ったり、青ミドロをかぶって枯れたりした 地震の時に農作業をしていた人々のお話ですが、その時水田で浮苗さしや除草機をかけてい

私の家も全壊同様になり、 家の片付けかたをしながらも、水田の補植作業をするのがやっとでした。 日増しに傾むきかたがひどくなるので、電柱で支えてつぶれるこ

家財道具はハウスにビニールを張って置き、仮小屋ができるまでの一ヵ月間はビニールハウス とを防ぎました。雨が降っても、風が吹いても、傾いてくるので、危険で休むこともできず、

住宅を建ててから、家族一同の生活ができました。 での生活になりました。両親は弟の家で寝る生活が続きました。ようやく、作業用のプレハブ

た家を耐震、耐火、防虫を考えての補修に決定し、地震より一年六ヵ月ぶりでわが家で住むこ 補修は新築より経費がかかりますよ」という専門家の話をふり切って、親が苦労して建て 悪夢のような惨事

定

とができました。 「災害は忘れたころにやってくる」という昔の人が言われた言葉を実感しま した。また二度

と失敗をくり返えさないように祈って、ペンをとりました。

(被災地 仙台市荒井字矢板一一

#### 長い長い十数秒

アクセサリー販売業 篠

有

宏

代建築は少しぐらいの地震にはびくともしないと安心していました。そのとおりなにごともな くおさまり、ほっとしていた時です。今度はグラときたかと思うとガクガクという感じでぐら 昭 『和五十三年六月十二日午後五時を少しすぎたころ、グラグラと私の住むマンション 十四階建、 戸数百九十戸、居住者約六〇〇名)一〇二号室を揺さぶりました。その時は近

つきだしましたので、慌てて立ち上がろうとしましたが、立つこともできず柱にしがみつきま

が倒れ、ガラスが飛び散り、柱の陰でその霹動のおさまるのを恐怖のうちに待ちました。ひょ っとしたら倒壊するのでは、と思うほどの露れときしみ音に、生きた気もせず、長い長い十数 鉄筋コンクリートのギリギリといいますか、なんともいえぬ音とともに家具、電化製品

秒でした。

震の恐怖が湧き上がる思いでした。 くまっておりました。浄化槽の周りは七十珍ぐらい陥没して土煙が立ちのぼり、あらためて地 外に出てみると、私の友人に抱きかかえられて浄化槽の上に嬴青になり、恐怖におびえてうず やっとおさまり、外にいるわが子の安否をたしかめるためガラス、食器の破損の山をよけて

ぐらい離れた石巻に行っていましたので、確めるすべもありませんでした。 そんな時、非常階段を上階の人々が、泣き叫びながら下りて来ました。ある人は頭をおさ 子供の無事を確めると、今度は家内のことが心配になりましたが、その時は仕事で四十五片

段の音が入りまじり、異様なというよりパニック状態だったのです。 顔をおさえ、足をひきずり、血まみれの子供を抱きかかえ、泣き声と叫び声と鉄の非常階

迷いながらも負傷者を一ヵ所に集め、応急手当をし、働けるものを手分けして二次災害を防ぐ べく活動に入りました。まずガス漏れによる火災防止を重点に各戸に注意を呼びかけました 私は当時マンションの管理組合(自主組織)の理事長をしていましたので、事の重大さに戸 誾

はまだしも夜は大変なことでした。その後余霞のたびに子供達は怖え、

ての機能が停止してしまい、 どうなったことかとあらためてぞっとしました。幸い死亡者はなくほっとしましたが、 を要請しても県下一円の被害のためすぐには来てくれません。交通、電信、ガス、電気等すべ 出入口扉が変形して開閉不能になり逃げおくれた人がおり、 自力で処置をしなければならず、住民防災組織の重要性をあらた 火でも出たら 救急車

やら戸惑いながらも気を取り直して後片付けをしました。 震の恐れを伴い、とてもできませんでしたので、集会室と近所の小学校の体育館に分散してそ くなるのを待ってそれぞれ片付けに帰りましたが、あまりのひどさにどこから手を付けてよい の夜を過ごすことにしましたが、余霞の恐怖が残りまんじりともできませんでした。 踏み場もないほど家具は倒れ、 重傷者二名軽傷者三十名の手当もままならぬうちに暗くなってきました。各戸の室内は足の ガラスが飛び散っており、室内で休むことは地震時の恐怖と余 翌朝明る

排せつ物が一番の悩みです。近所のガソリンスタンドや五分程先の駅に行ったりするのは、 も使用できなくなって、生活が成り立たなくなります。水一つとっても十四階までパケツで運 だり、 高層集合住宅の欠点として、諸設備を共用している関係上それが壊れると、 排水管の破損により使用した水をまた階下まで運んでこなければなりません。また、 全戸が 一斉に何

吐気を催したり恐怖

と疲労で流産をした主婦も出たほどです。

えをしなければ、と痛感いたしました。この被災を教訓に住民達も立ち上って町内会を創立 さを初めて知り、非常時に備えてこれで良いという事は絶対といって良いほどなく、 まだまだ書き足りませんが、本当に地震を体験しまして、それまで安易に考えていた私の愚 防災訓練も活発に行うなど災害に備える気構えもできましたが、二度とあの恐しい地震に

(被災地 仙台市福室字高砂駅一四七) 遭うことのないように祈る気持でいっぱいです。

#### 谷は生きておった

地 方 公務 賃

渡

i/I

春 治

用で青葉山の研修センターまで出かけ、帰校のため細横丁を北上している時であった。 あの大地震にあったのは自動車の中でであった。当時、 附属小学校に奉職していた私が、所

日頃の備

ろ帰宅することにした。

だが一きほどの道程だったのに、北四番丁及び堤通経由で学校にたどり着くまで三十分以上も ため、そちこちの路から集まってきた自動車が路上にいっぱいになり、 き地震であることがわかった。 突然の強いさく裂音 (商店のウインドーがこわれ落ちた音) とともに、 余震が治まって自動車が一斉に動き出したが、 そこから学校までたか 車が 信号が停止した はげしく揺 れ動

办

かってしまった。

四号線の交通渋滞もやや緩和してきたとの情報がはいったので、 らいに思っていたが、何度電話しても同じであった。そのうち、 \*た頃、自宅に電話したが、コールはするが応答がない。妻がまだ帰宅していないのだろうぐ 帰校後、 学校の被害の調査と教職員を早く帰宅させることが急務であったが、それも一段落 日もすっかり暮れた七時半ご 北仙台方面の同僚から旧国道

帰宅するまでは、我が家を含めて、団地の一帯があんなにもひどい被害を受けていることな 全く夢にも想っていなかったのである。 看板や窓の損壊、 酒屋の店内の被害など目についたが、 それは、 組横丁から帰校する途中の街の 倒壊した家などなかったし、 様子から 学

故であろう。五十三年二月の地震の際我が家では十数本の「こけし」が倒れた程度であったか 同年二月にあった震度四程度の地震だろうぐらいに思い、同僚ともそんな話をしておった 方々の壁の亀裂やモルタルの落下こそあったが、そう大きな被害とは思われ なかっ たの

学校の被害も大きく、地下水槽が損壊して水が使えず、復旧するまで長いこと大変な苦労があ ら、その時は、全く我が家のことなど念頭になかったのである。(翌日判明したことであるが、

まではみ出しているのが見えた。車を車庫に入れるのももどかしく、 ことを、今でもはっきりと記憶している。案の定、西側の擁壁が倒壊して、玉石が南側の道路 段差ができているのを見た時、「これは大変な被害だ。」と一瞬血の気がひいていくのを覚えた 真暗な道を車で飛ばし、黒松団地入口に差しかかったとき、バス道路の坂道に大きな亀裂と

器が、ちぎれて飛び散っていたのである。サイドテーブル、 言ったら、 て、ろうそくの灯で後片付を始めていたところであった。「何だ。何遍も電話したのに。」と 黙って部屋の中央を指差した。そこには、サイドテーブルの上に置いてあった電話 戸棚、 書棚等々、 物の見事に倒れ

妻の顔を忘れることができない。放心落胆してものも言えなくなっていたが、長靴をはい

家の中に飛び込ん

て、什器類やガラスの破片等が部屋いっぱいに飛び散って、手の施しようがないありさまであ

日中、 が倒壊寸前であり、そのために家全体が引張られて、著しく西側に傾いている状態であった。 家屋の状態はと言えば、 留守をしている我が家は、施錠しているのであるが、サッシ窓の掛金がすべてはずれ、 西側擁壁の崩壊によって、 六年前に増築したばかりの二階建四部屋

Þ

の苦労は、

挙げればきりがない。このような苦労は孫子にはさせたくないと思いつつ、

大事な品

々を含め家屋までの物損、

後片付け、

引越し、

宅地及び家屋

落下したり明けはなたれている状態で、 かかって寝る場所をつくるだけが精一杯であった。 それ程大きな揺れだったのである。 その夜、 遅くまで

L 復旧造成で、崩れた土砂を取除いてみてわかったことであるが、谷状に盛土された部分が崩 を数えただろう。 には亀裂が走り、 こたのであった。まさしく、谷は生きておったと言えそうである。 近隣の状況はと言えば、我が家を南端にして北側一帯の西擁壁が大きく崩壊し、 全 く、 倒壊してしまったアパートを含めて、 自ら経験したことも見たこともない惨状であった。 我が家と同様全壊に近い家は二十 後の我が 道路や宅地 家の宅地

の水道が設置され はプロパンの は水であった。電気の復旧は早かったが、ガス、水道はそういうわけにはい さて、それからの苦労がまた大変なことであった。危険な二階建部分の取壊し撤 被害の比較的少かった家の御好意によったが、 宅地の再造成と家屋の新築まで、ほぼ二年を要した。 使用で何とか切り抜けられたが、水は、毎日の給水車に始まり、 たのが 一か月後とあり、 殊更に暑い夏であったため洗濯や入浴が大変であ 遠く国見の知人宅に何度も貰い風呂に行 また、 この震災の直 十字路に共同栓 かなかった。 |後最も苦労した 去 から始 ŧ

の再建に至るまでの数 193

擁壁

#### 傾きかけた我が家

数員

大 大

E

橋

Æ

昭

当り眺望の良い、夏涼しく冬暖かい好環境条件のところ、これが緑ヶ丘団地でした。 仙台市南部の小高い山の斜面をそれぞれひな墩のように造成した約九百数十戸の団地で、 Н

とのない出来事でした。発生時の昭和五十三年六月十二日五時ごろ、私は学校で勤務中で、校

夢にも考えなかったここに、突如襲って来たのが宮城県沖地震でした。脳裏から消え去るこ

小会議室で同僚と話し合いをしている最中です。 『地震だク』お互いに立ち上がろうと しまし 舎内も校庭にも数十名の生徒がおりました。五時十分ごろ校舎が大きく揺れ動きました。私が

たが、とても歩くことなどできません。あっという間の二、三十秒でした。

緑ヶ丘団地の入口を登りかけ、

わが家の建っているのが見えた時はほっとしました。

のつけようがありませんでした。 が倒れて図書が床になげ出され、 ブル、椅子を押しのけどまん中に居座り、動かすことなどできたものではなく、 ました。とても整理などできる状況ではありません。校長室の重要書類の大金庫などはテー 情報などもあることからすぐ下校するよう指示し、 め校庭に誘導、 トランジスターラジオで知り得た情報をもとに簡単な注意などを与え、 実習室は戸棚が倒れ器具が壊れて床は足の踏み場がなく、 校内の状況を手分けし点検することになり 図書室は書架 津波の

アを開け部屋を飛び出て生徒の確認に各自急ぎましたが、幸い全員無事でした。

動揺を静

半分くらいが地に埋まってたり、自動車道に面した東北大の寮の高さ約二㍍くらい 十~四十ぷくらいにわたって倒れてたり、 部まで送ってもらい、わが家へと急ぎました。途中完全に家が倒れていたり、 滅は見られず、 ともかく仙台在住の方も多いことなどから一応帰ることになり、同僚の車で帰途につきまし 途中値台に近づくほど被害が大きくなっているのに気付きました。 不安が刻々胸に迫って来ました。とにかく可能なところまでということで市内の長 ブロック塀の倒壊、 屋根瓦の破損などが目立ち、 もし通行人があったらなどと考えると背筋 家の傾きも目につき始めまし 停電のため信号機の点 二階建ての一階 の の寒くな 塀 ۱ij が三 中 央

い感じを受けました。家の前に家族を見つけた時は言葉もありませんでした。無事を喜び合い く違って何かどす黒い波がおし寄せる感じの中で人が行き交う動きに、思わずただごとではな ス通りから自分の家の通りに入った時、いつもはひっそりと明るく静まっている通りが、全

は机にしがみついて、ガラス戸を開けたものの強い力で戸はすぐ閉まりだし、戸ごしに庭を見 地震の時二階で机に向かっていた息子は、椅子から放り出され、廊下で仕事をしていた家内

ました。でも家は傾いておりました。

る思いでした。 な家族の姿に安堵し改めて家を見ると、見ていけばいくほど地震の恐しさが頭にたたきこまれ やると、スウーッと沈んでいくのが目に入って恐怖で声も出なかったそうです。ともかく無事

この部分まで建っていた家屋の約三分の一ほどが宙に浮いている状態。向かいの家には私の家 屋は陥没部に傾き、倒壞ははっきり予測されるほどでした。さらに別のお隣は庭半分が陥沈し、 上げるともう大分傾いているのがわかりました。地続きの隣りの庭も陥没し、庭に増築した部 分するかのように走っています。庭の大部分は大きく陥没して、庭木は目下に見え、二階を見 三歩いくと、幅約一・二尉くらいの、深さが一・五尉ぐらいでしたか、大きく深い亀裂が家を二 玄関はゆがみ、戸は開くことも閉めることもできませんし、むろん入ることも不可能。二、

の亀裂と同列のが家屋の中央を走り抜け、倒壊のおそれをまざまざと感じさせていました。



大きく深い亀裂が家を二分

三日後、

市当局、

自衛隊の協

した。 は、 ねないかもしれないという状況 次の災害を起こす引金になりか の住宅地に流しこみ、二次、三 それがきっかけで土砂を下 私達にも予測されることで

どはできっこありません。しばらくして午前一時すぎ、市消防署の警告で、雨が降り出し危険

私達は近くの方のお世話になることになりました。が、眠ることな 夜を過ごす場所も必要です。

ある人は友人のとこ

夕刻も迫り、

夕食はとらねばならないし、

ある人は親せきにと。

なので緊急に下の鹿野小学校の体育館に避難するようにとのこと。そこで約十日間の避難生活

ません。深くくい入った亀裂と陥没、傾きかけた家が、雨によっては最悪の事態

当時は梅雨時でもあり、天気予報も芳しくなく、

いつ本降り雨が来るかもしれ

家が倒壊

を送りました。

その

後市の懸命な努力、

住民の団結

撤去作業が行われました。 力もあって最初七戸の取り壊し

できるようになり、現在の生活基盤を得ることができました。 の力、さらには市、県、国会議員の方々の協力等で、都市型災害に対する援助を受けることが

この宮城県沖地震で強く感じたことは、「災害は忘れたころにやって来る」ではなくて、災

害を天災にしない努力を私達は常にしなければならないということです。

(被災地 仙台市緑ケ丘一―六―四五)

目前で地割れ

主婦

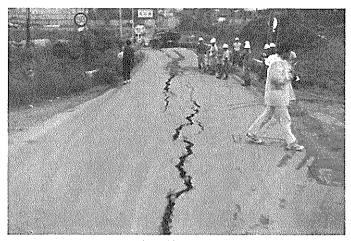
佐々木

々木 妙

子

ドッスン、バタン」と、この時マグニチュード七・四である。 保育所に、二人の子供を自転車で迎えに行き、その帰りの出来事でした。午後五時十四分、ア ラッ…ハンドルがとられる。熱があるせいか調子が悪いなと、思いきや「ガチャガチャーン、 昭和五十三年六月十二日、この日は、かぜで勤めを休み、子供の大好きなカレーを作って、

#### 第二部 悪夢のような惨事



地割れ

は、もう駄目かと……

を走った。でも、走る目前が地割れした時にしないですむとの確信、とっさの計算が頭の中

側のアパートが倒れても、私達は絶対にケガを

にかけ登り、公園の真ん中まで逃げました。両カゴからサイフをとり、二十数段の階段を一気

自転車を倒し、二人の子供を両脇にかかえ、

今にして思うと、よくもまあ…とタメ息がでる。揺れがおさまり、気持ちが落ち着くと家のる。揺れがおさまり、気持ちが落ち着くと家のもこわれまわりはベタベタ、テレビは、二ばもとばされ寝ているし、タンスは、泥棒にでも入とばされ寝ているし、タンスは、泥棒にでも入られたみたいになって中の物はでてきて倒れてられたみたいになって中の物はでてきて倒れているし、まともに立っているのは、二段ベット

だけ。おまけに、今晩のおかずは、タップリ作ったのに、しゃもじでもすくえないくらいしか

剤とおしめをもって、いさんで飛んでいった。この、あさましさに私自身あきれてしまうこと ピリの期待があった。それにしても、水がほしく、水道宮が破れたときは、トップを切って洗 帰ってきて、やっとバッテリーから電源をひき、我が家だけ灯りがコウコウとついた。でもラ 残っておらず……。 も大変、しかし考えてみると、戦争を味わったことのない私は、昔にもどったみたいでチョッ ジオを聞きながらも余震が続き不安でいたたまれなかった。明日からは、しばらく食事の用意 くてはと思いながらもなかなかはかどらず、そして子供達は恐怖のあまりそばから離れずで… ガスは出ず、主人に連絡と電話入れても通じず、ロウソクの灯りで、少しでも多くかたづけな ハリキッテいるのはバカだけはひくといわれている夏カゼをひいた母親だけかも……。主人が の際と思い台所に水をまいて油分を取り終え、飲み水をヤカンにとったとたんに断水。停電、 とにかく、台所をかたづけなくてはと、マジックリンをまき、雑布でふき取って捨てた。こ

が、被害があまりにも多く、私もおどろいてしまった。 新聞を見ると、オピサンビルの一階がつぶれ「ピサの斜塔か?」などとシャレて書いてある

この地震で亡くなられた方、ケガをした方、そして家をなくした方達が多い中で、物だけな

くした我が家は、この様な体験しかありません。が、しかし「明日は我が身」と思いつつ、物 の大切さを教えられたことを頭におき毎日の生活をさせていただいている私です。

(被災地

仙台市鶴ケ谷六)

とにかく食べる物と寝る所を

玉 鉄 膱

員

佐 藤

忠

男

くのバス停に並んでいた女の人達は、「キャー」という悲鳴を上げ座り込んでしまった。 見上げるとなるほど電線がゆれていたが、たいしたことはないと思った。駅前のバス停まで歩 いた私は、突然「ドーン」という音にびっくりし、足を止めた。ものすごい揺れとともに、近 六月十二日、午後五時六分ごろ、帰宅途中の私は、「地震かな」と思い、一瞬立ち止った。

建物は

ミシミシという音をたてて揺れている。私は一瞬何をして良いのか判断できず、その場に立ち

ビルの窓からガラスの破片が落下し、近くを走っていた車は前のタクシーと衝突し、

すくんでしまった。その激しい揺れは、とても長い時間と恐怖を与えた。

なか通ぜず、不安はますますつのってきた。五回目でやっと通じ、妻に詳細をたずねると、 揺れが止んだ直後、近くの電話ボックスに飛び込み、家へ連絡しようと思った。 電話はなか

時間半もかかったという。 の中が惨澹たる状態であるというので、すぐタクシーに飛び乗った。が、しかし、交通が渋滞 し十分のところを三十分もかかった。後で友人から話を聞くと、三十分ぐらいは良い方で、一 家へ着くと、妻と子供は外に出たままで家の中へ入ろうとしなかった。 家の中は手のつけら

ラジオからは各地の被害の状態や、無事を伝え合う人々の情報……大きな地震であったことを も登山の経験が役に立ち、飯ごうでご飯を炊いたが、ろうそくの灯の下で簡単な食事となる。 場もなかった。携帯ラジオからは各地の状況が刻々と伝えられていた。午後八時過ぎようやく けた。倒れたタンス、食器棚、サイドボードのガラスが壊れ、室内はガラスの破片で足の踏み れない状態だった。とにかく、食べ物と寝る所を確保しなくてはならないと思い、夢中で片付 段落し、夕食をとった。電気もガスも水道も止まり、現代の文明を全く失った生活。 幸いに

元通りにしたころ、時計は午後十一時を過ぎていた。 食事を終えた後、 近所の人達と協力し、 各家々の外れた玄関の戸を直し、倒れたタンス等を

あらためて感じた。

パーでは食料や乾電池が売り切れ、野菜の値段が暴騰した。快適な生活に慣れた私達に自然は とも運転の見込みがたたないということであった。交通機関は完全なマヒ状態に陥 翌日、 出勤すると、 線路は各地で分断し、鉄橋、 トンネル、架線等に異常が見つかり、 た。 各線 ス ĺ

警告を与えてくれた。 これらの教訓を生かし、 我が家では防災対策をたて、 各個の安全点検を実施した結果、

危険な個所が見つかり改善した。 一、食器棚、サイドボード等のガラス類の置き場所が不安定な場所であるため、 位置の変更と

防護設備(タンスガードの設置、

- 釘の打ちつけ) の強化

ろうそくなど) 三、緊急持出袋や、 二、室内の上の部分にはなるべく物を置かない、かざらないこと(額や人形ケース、 非常用の食料、燃料等の用意。(缶詰、 ラーメン、医療品、 携帯用の燃料、 花びん)

吗 以上、五つの項目を週に一度点検し、点検表に記録し、完全に実施するようにしている。 その他として自転車の整備 風呂には毎朝必ず水を入れ、 (道路が渋滞すると自転車が意外な効果を発揮する) 非常用の飲料水、 防火用水に使用する。

「災害は忘れたころにやってくる」を念頭に、いつ災害にあっても最小限の 被害で食い 止め

震後は点検表の成績も良かったが、最近では、下がりぎみである。

ŧψ

### 我れ先きにとバスへ

主

婦

柏

<

マグニチュード七・四の強震が宮城県一帯を襲った昭和五十三年六月十二日午後五時十四

分、私は帰宅途中の満員バスに揺られていました。 の異様な光景を目の当たりにしました。 バスが花京院交差点を左に折れ、仙台駅に向けて走り出して間もなく、私は歩道にいる人々

あっちによろよろ、こっちによろよろ、樹木にしがみついている人、またそれにすがる人、

しゃがみ込む人もいました。

「あの人達、何をふざけているんだろう?」と、私は直感しました。

(被災地 仙台市中央一)

**泛発生という外部の異変に気づきました。** その時です。 バスが止まり、 前の方から「地震だ!」という声があがり、 乗客ははじめて地

スが駅前に到着した時、私はまたも異様な光景に出合たのです。 パニック状態とはこのこ

とを言うのでしょう。 電気の消えたデパート、 ホテル、駅や店々から続々と人が吐き出され、

見る見るうちに、 あの広い駅前の歩道が身動きできないほどに人の波で埋まってしまいまし

た。

の屋上から滝を流したように、 カー、 やっとの思いでバスを降り、 救急車、 消防車のけたたましいサイレンの音が耳元に迫り、私はこれまでに経験した ザアーザアーと水が流れ落ちてきました。時を同じくして、 人波の中を日乃出会館前にたどりついた時でした。 突然、 ビル

しばらく呆然としていた私は、ふと我に帰り、 出掛ける際に留守を頼んだ中学三年の娘のこ

ことのない恐怖感をおぼえました。

とを思い出し、 心配になりました。

ません。タクシーを拾おうと思っても尚更無理でした。 電話をかけようと思っても公衆電話の前はどこも行列で、いつ順番が回ってくるかもわかり

仕方なくバスで帰ることにしてバス停に並びましたが、 パ スが着くたびに列を乱して我先に それが発車を遅らせる始末

と人が殺到し、バスの入口だけゴタゴタしてなかなか中に進まず、

で見ていて本当にいらいらしました。子供達の事、アパートの事で頭がいっぱいでした。五台

目ぐらいのバスが来た時でしょうか。私は、恥も外聞もなく大声で叫びました。

「うしろの方がガラ空きだからつめてください!」こんな時、先を急ぐのは皆同じなんだか

ち一つ目や二つ目の停留所で降りる人もいましたが、「足が丈夫なら歩いた方が速いのに」と やっとの思いでバスに乗り、ほっとしましたが、今度はノロノロ運転にイライラです。駅か

他の二人の娘がかいがいしく後片付けをしていました。それをみてほっと一息。それと同時に 办 家に着いたのは普通の時より四十分も遅れた六時過ぎでした。家に入ってみると中三の娘と 「いや絶対に歩くべきだ」などとイライラが高じて腹立たしく思いました。

私の家は十一階建てのアパートの二階の一番端のため幸いあまり被害もなく、それにも安心し

害の状況を調べて廻りました。 私はこのアパート(百三十世帯の公団住宅)の管理連絡員をしていますので、十一階から被

じ地震の物凄さを物語っていました。 き落されていました。また、 まず驚いたのは、十一階の廊下天井に据えつけられた直径二十珍、長さ六十尉のパイプが叩 四階から七階にかけては壁が崩れ落ちたり、亀裂が四方八方に生

人は、「エレベーターに閉じ込められなくてよかった、もしそうなったらと思うと今でも震え ある人は、ドアを苦労して開けたが、今度は閉まらなくなってしまった」と嘆き、またある

がくる。本当に不幸中の幸いでした。」などと語ってくれました。

非常時の備えこそ平常時に一層必要なことだと痛感しました。 巡回するにつれて、私は地震の大きさに驚きを増すばかりでしたが、心の中で、このような

(被災地 仙台市花京院 二

# 車体が大きく揺れ、ハンドルが取られそう

ク シ ] 運 転

IJ

木

秀

飯

した。後部座席に妻と母を乗せ、 最初の弱い地震を感じたのは、 私は車を運転しておりました。妻は八カ月の身重でした。 仙台バイパス蒲ノ町交差点で信号待ちの時でした。初めかす

その日の夕刻私は、入院中の妻の父を見舞った後、妻の母を深沼の実家に送る途中でありま

車両の通行によっても橋の上などでは揺れますので、地震だと思ったのは走り出してからであ かな揺れを感じた時は、直接地震とは思えませんでした。車には緩衝装置がありますし、 208

) E

速三十m前後だったと思います。最初に体が沈むのを感じました。続いて車体が左右に大きく 二度目の、あの大きな地震に遭ったのは、深沼小学校の手前約五百岁付近でした。

話し中のアナウンサーが、「ただ今地震を感じました……」と言ったのを覚えておりますが、 付いたのは、ややあってからでした。ちょうど、放送中のラジオから、東京にあるスタジオで 揺れ、ハンドルが取られそうになり、"地震だ!" と直感できました。どうにか事を停止させ ますと、前方にある松林がゆさゆさと揺れているのが見えました。後部の二人が地震だと気が

いました。実家は停電になっていましたが、さほどの損傷もなく、地震の大きさはその時に しばらく様子をうかがっておりましたが、事態が急変する様相もないように思え、 実家に向

この話の直後、放送は途絶え、他の局に回しても同じでありました。

り、仙台市近辺が相当の被害を受けていることが刻々知れるようになりました。

は実感できませんでした。まもなく再開されたラジオ放送によって、震源地が宮城県沖であ

入院中の父の無事を確認して後、私達は自宅に帰ることにしました。午後六時過ぎだったと

思います。唯一の情報源であるラジオは、退社時と重なった市内各所での交通混乱を伝え、干

覚えております。 したが、市外へ向かう道路は渋滞がひどく、ほとんど停車したままの状態でした。名取橋近 の つれて程度が大きくなっているようでした。停電のため、 止)を渡っていったん南に向かい、四郎丸を通り中田町に出て再び名取橋を市中心部方向 代大橋は通行不能である旨の放送をしておりました。 いました。 る逆のコースをとって自宅へと走りました。途中の道路添いには、 踏切の非常電源による赤色点滅機が、薄暗く静かなあたりに異様に光っていたのを、今でも 傾いた家、 倒れた塀、 門柱、橋と道路との取り付け部の段差等々、 私達は、閖上大橋 各交差点では交互に通行しておりま 地震の被害が各所に残って (後日損傷のため通行 自宅が近づくに

品 開い 壁から落ちた額やラックから飛び出した書籍類とともにほこりの下にありました。 にして斜めになっていました。壁の石こうが部屋中にちらばり、どういうわけか押入れ 現れていました。 ままで中に入り、隣の部屋を見ますと、 ました。が、ドアを開けたとたん、初めて地震のすさまじさが直接私達に身近かな姿となって 家に着いたのは、 て布団類も下に落ちていました。 棚から落ちた鍋等々、 割れたしょう油びんや食器類、 午後七時過ぎでした。自宅のあるアパートは、 台所は異様な臭気とともに足の踏み場もないありさまでした。 居間では片隅に置いたテレビが部屋の中ごろに転がり、 たんすは倒れる途中で引戸が開いたのか、つっ 倒れた油缶、冷蔵庫の戸が開いて落ち どうにか無事に建っており の戸が か た食 靴 棒 Ø

りに、何から手を付けるべきかも考えられず、あ然とする妻とともにとにかく寝る場所を作る あたりは真っ暗闇でありました。ガス管亀裂の可能性もあるとのことで、懐中電燈だけを頼

ことだけで、長い一日を終えました。

り、銭湯のある旧市街へ向かうため、御利用下されたのでした。 団地内の主たるガス配管の損傷のため、お風呂を使えない人々が、あきらめて実家に帰った 地震の被害のため、タクシーを利用されるお客様がありました。それは、銭湯に通う人です。 地震後、タクシーを運転していてお客様との話は、もっぱら地震の話でした。そのなかには

(被災地

仙台市中倉三—一六)

こわくておばあちゃんにすがりつく

仙台市立鹿野小学校二年(当時)

らき みちこ

わたしは、じしんのあった日、夕がた、おばあちゃんに、

がっていました。

かりのさんが、

「だいじょうぶよ。」「だいじょうぶよ。」

と、せがみました。おばあちゃんは、 「おさん歩に、行こう、行こう。」

『それでは、しかたがないから、かりのさんのうちに、行きましょう。』

と、いいましたので、わたしは、うれしくなりました。

うら道を、おばあちゃんと、手をつないでのぼるとき、夕日がさして、あつかったです。か

りのさんのうちについたら、かりのさんのおばさんが、

と、いいました。 「さっき、かるいじしんがあったんですよ。**」** 

「歩いたけど気がつきませんでしたよ。」

わたしの、おばあちゃんが、

と、いいました。

それから、おみやげをだしました。

しばらくたつと、ガラガラと、おうちがゆれました。わたしは、こわくておばあちゃんにす

211

といって、かりのさんのおばさんが、わたしの手を、つよくつかんで、ガラス戸をあけまし

きました。わたしは、

「かえる。」「かえる。」と、いったら、

ぱいで、いそいで緑ヶ丘のうちへ帰りました。

おにいちゃんが、ラジオをききました。つなみがこないのであんしんしました。

つと、おにいちゃんが、友だちと帰ってきました。それから、おばあちゃんが、おうちがしん

ウイスキーのびんがこわれて、ウイスキーのにおいが、プンプンとにおいました。すこした

ました。じゅうたんに、ウイスキーのびんが、おちて、あるけませんでした。

わたしは、じぶんのうちへはしっていきました。おうちにはいったら、たんすがたおれてい

たしがびっくりしました。

「もうすこし、まちなさい。」と、いわれて、しずかになってから帰りました。

とちゅうのかいだんに、ブロックべいが、くずれてこわれていました。おばあちゃんと、わ

た。そのとき、前のうちのおにわが、がけの下にくずれました。男のこがじてんしゃで、見に 212

「外に出て下さい。ゆっくりでいいですよ。」

# 断水で貰い水

仙台市立鹿野小学校六年

山 子

たこともなくみんなもそんなに気にしないでおわった。 前の方にすわっていた男の子たちがわざとゆらしているのだと思った。その時は、たいし

私は、六月十二日の地しんの時YMCAの仙台館にいた。まず、一番初めの弱い地しんの

畤

でもぐった。すると、 は、なにもしないでぼんやりしてたら、みんなが、長いつくえの下にもぐったので私もいそい すると、その地しんからあまり時間もたってないころ、すごいゆれの地しんがまた来た。私

時は、そんなにこわくなかった。むしろまっさおになって、顔がヒクヒクひきつっている友達 という声がきこえたので、私もみんなといっしょにかいだんをいそいでおりた。でも私はその

213

私は一番うしろにちかかった。外に出るのには、くつをはかなければと思ってスリッパをぬご の顔がおもしろく思ったくらいだった。なかのいい友達もどんどん前の方にいってしまって、

うとすると、YMCAの男の人の声で、

「スリッパのままでいいですから、早く外に出て下さい。」

は、火事になってるんじゃないかなぁ。つぶれてるんじゃないかな。妹や母は、だいうょうぶ 私はそれまでそんなにこわくもなかったのにいろんな人の泣くのを見て不安になってきた。家 かなぁ。考えれば、考えるほど不安はつもってくる。 いように見えるのになぁと私は思った。もう、みんなもだんだん心配そうな顔になってきて、 りする音がきこえた。そのうちに、家がラーメン屋の女の子が泣いてしまった。すごく気が強 というのがきこえて、みんなスリッパのまま外に出た。外に出ると、消ぼう車の行ったり来た

「みんなでうたでもうたおう。」

れない様子だった。 と言うので、みんなでうたをうたった。でも、みんなの餌を見ると、不安やこわさはかくしき

「今日はこれでおしまいにします。」

母さんの車がまっていた。車の中にすわっていると、今度はお父さんのことが心配になって という声がきこえると、みんなはいっせいに出ていった。YMCAの門をくぐると、友達のお

だ。ラジオをきいていると、ガス局は、やはり火事になっていた。だいじょうぶかなぁと心配 するしかないので、しかたなくまたラジオに耳をかたむけると、 来た。うちのお父さんのつとめている会社は、東洋せいかんといってガス局のならびにあるの

「私の家では、テレビがひっくりかえったんですよ。」

とか、

「電しんばしらの下じきになって二人の人がしんでいます。」

とか、おそろしいじょうほうがつぎつぎにきこえてきた。

と友達のお母さんが教えてくれた。友達と、 「今、病院にガラスのびんで、うで切った人が血をダラダラながしてきたよ。」

「こわいね。」

「電話したの。」

「家だいじょうぶかなぁ。」

「電話つうじないんだってさ。」

「ふうん。」 友達と不安をまぎらわすためにしゃべっているけど、しゃべってることはぜんぜん話題が

215

ラバラだ。やっと家のちかくまでいくと「ガスもれのため、のりものはダメ」と書いた紙がは

りつけている。私は、いっしゅん私のうちかなぁと思った。でも、ちかくの家の人が、うちで

はない家でワイワイやっていたのでどうやらうちではないようだなぁと思った。

216

妹が口をはさむ。

いっしょに直したからもうだいじょうぶだけど。」

とコップのこわれたのをはきながらこたえてくれた。そうすると、

「おねえちゃんの部屋の本だなの本全部出てきてたいへんだったんだってば。でも今ママと

んだよ。」

と私が聞くと、お母さんがほうきかた手に、

「うん。うちこそ、だいじょうぶだった。<u>」</u>

妹がまた同じしつもんをする。

「おねえちゃん、だいじょうぶだった。」

「 うん。」

げんかんに立つなりお母さんにきかれた。

「直子、だいじょうぶだった。」

家に帰ると、お母さんと妹がろうかに立っていた。

「うちは、コップが二、三こわれたくらいよ。直子のことすご く由美子と二人で心配して た

「本当だ。だいじょうぶかしらね。」 「お父さんの会社だいじょうぶかなぁ。」

お母さんの顔がまた心配そうになった。

ともりあがっていた。それまで家がぶじだったので少し安心したが、それを見てまたこわくな 私は、妹とまわりの家を見てこようと思って外に出てみた。すると、道路のまん中がボ

コッ

った。とりあえず同じクラスの三浦さんのところにおつかいもかねて見に行った。三浦さんち

の前までいくと三浦さんの家のとなりの小さい男の子が、 「うちで、水が出ないんだよ。トイレの戸もしまんなくなっちゃった。」

出て来て、 と教えてくれた。それは、たいへんだと思って三浦さんのうちのお店までいくと、三浦さんが

と安心した。 と三浦さんも教えてくれた。どうやらこのへんでは、大きなけが人や死者はいないみたいだな 「うちは、このとおり。けいこうとうがおっこちたり、せとものがわれただけだよ。」

えばかん電池をうっているおみせに人がならんでいたのを思い出した。かいちゅうでんとうの かん電池がなくなっていたのでろうそくをひっぱり出してろうそく二、三本で食事をした。食 家にもう一度帰ると、電気もガスもこないのであかりもつかないし食事もできない。そうい

た。 くるとあぶないのでふくのままでねた。すると電話のベルがなりだした。お父さんからだっ 事もあるものだけですまして、なにもすることがないのでねることにした。夜にまたじしんが

「だいじょうぶだった。」

ļ

と聞くと、

なんだかつかれたような声だった。でもとにかくだいじょうぶという声を聞いて安心した。 「だいじょうぶだけど、今夜は少しおそくなるかもしれないから先にねてなさい。」

の時までぐっすりねむっていた妹が、 いくらねむろうと思ってもねむれない。その時小さなゆれだったけど、よしんがあった。そ

「こわい。こわい。」

といっているのが聞こえた。お母さんが、

たのでゆっくりゆっくりかいだんをおりていった。ろうそくの火でかげが大きく見えるので妹 というので三人で下におりていった。ろうそくがたおれそうだし、私と妹は、毛布をもってい 「あぶないから下にいってお父さん帰ってくるのまってよ。」

うとうととしているとお父さんが帰ってきた。かん電池とジュースをたくさん買ってきた。

も私もとてもこわかった。

す」といってもしばらくの間うちではずうっと水は出ていた。でも急に出なくなったらたいへ 水がなくてたいへんだと思ってジュースを買ってきたそうだ。ラジオでは「水が出なくなりま

んだと思ってバケツややかんなどにだいぶ入れといた。

できない。ためていた水もだんだんなくなってきてこれからどうしようかと思ってるやさきに 電気コンロでおかずを作ったりできた。でも米をとぐのにもやさいをあらうのにも水がないと 十三日の朝は、もう電気はきていた。そのかわり水が出なくなっていたが、電気がきたので

「うちの水出ますから、よかったらどうぞ、おつかい下さい。」

といってくれた。水をもらいにいくとうちだけではなくたくさんの人がもらいに来ていた。大

私の家の前の人が来て、

水道料金だけでもたいへんだろうなぁとかんしんした。それに前の家の人は、 きな大きなポリバケツをもってくる人、小さい入れ物で何回も何回もくる人、人それぞれだ。

て下さい。」 「おふろも都市ガスだったらたいへんでしょう。うちプロパンですから、どうぞはい りにき

と思った。 ともいってくれた。自分の家もコンクリートがもりあがったりでたいへんなのにえらいなぁ

よく見ると、うちにも亀裂が何力所か、かべやプロックのへいなどにもはいっていた。でも

すっかり有名にもなった。地しんのひがいで有名になるなんて何か変なかんじだ。 した。ガスも出るのは二十日すぎぐらいになるそうだ。緑ケ丘も鹿野小学校も新聞やテレビで 校になって十六日にやっと学校に行ったら当分の間学校は、休みになるとしらされてびっくり まわりのひどいひがいにあった人たちとくらべるとまだまだいい方だ。学校も三日間りん時休

この地しんで私は、あらためて地しんのおそろしさを知った。

なんて話をきくと、本当に二度とこんなじしんがこないことを私はねがう。 「もう一回こんな大きなじしんがあったら私の家つぶれるわ。」

(被災地 仙台市鹿野ニー九ー!)

万一の備え

有 川 圭 仙台市立六郷中学校二年(当時

有 川 佳 子

の大きな宮城県沖地震は、忘れる事ができません。 も少なくなって来ました。でも私が体験した中で最も大きかった、 あの六月十二日のM七・四

「なぁーんだ、小さいの。今のは震度二か三だな。」と言った調子で、余り気にもかけなかった だわ。」と言いながら、火元の点検をしていたようです。揺れは少ししておさまったので、 揺れませんでしたが、 あれはちょうど、私が友からの電話を受けていた時の事です。一回めの地震の時は、 一応電話を切り、おさまるのを待ちました。母は、「あらいやだ。 さほど

た くなり、「逃げなくては…」と、思い急いで玄関まで行き、鳥かごを持って外に飛び出しまし たら、ドーンという音がして、よりいっそう揺れが激しくなり、もう居てもたってもいられな 地震だ。でもさっきのより大きいような…」。そう思いながら、地酸のおさまるのを待ってい それから二、三分たった頃でしょうか。 急にまたグラグラと来たのです。 あれ また

が外に出た時は、歩くのもやっとで、立っていられなくて、母も庭にしゃがんでいまし 電柱も

曲がってみえました。弟は、 そして目にした光景は、二重、三重といくつも重なった、ぶれた写真の様でした。 「近くで建て前のおもちまきがあるから拾ってくるね。」と出てい

たので、私が呼びにいくと、

中腰で走ってくるのが見えたので、一まず安心。ようやく地震が

いものか分からぬくらいでした。冷蔵庫は倒れ、上に上げていたものは落ちる、 おさまって、家の中に入ってみると、もうめちゃくちゃになっていて、どれからかたづけてい 食器、ガラス 222

気をつけるように。物は買えても命は買えないから。」とのことでした。その後は、混練して で、電話の所へ行くまでもたいへんでした。それは、出張先の父からの電話で、「くれぐれも まで、落ちたのです、その地震直後電話が来ましたが、ガラスの破へんだらけになっていたの いて、通じませんでした。

類も大分こわれ、ピアノまで、三十センチ以上動き、たんす、本だなは、ひっくり返って電灯

だったので、外見上もかなり壁はくずれ落ちたりしました。友の話によると、他の家もずい分 ませんでした。 その夜、一応かたづけた二階の一部屋で寝ましたが、たびたび起こる余震でなかなかね 次の日、学校があるのを聞いて、いつものとをり出ましたが、 六中は木造校舎

こわれた様で、全壌や半壊などの人も多いようで、柱が曲がったとか、家がかたむいたとか、 ひどいようです。

てしまったのです。二年二組も三十珍程ずれた様でした。この地震の時は中体連期間だったの でした。二月の地震でヒビが入り、ぬりかえしたばかりの壁もまた大きくヒビが入り、落ちてき でした。黒板は教室のまん中まで飛んでいて、天井は落ちて来ていて、見るも無惨なありさま その次の日、学校内の清掃をしましたが、その時、みてびっくりしたのが、三年三組

打っていて、 で、学校にだれもいなくて良かったと思います。もしいたら…と考えるだけでゾッとします。 のブロックべいが倒れ、死者が多く出ました。六郷地区でも、沖野の小学生がブロックの下敷 六郷地区の市内に行く途中の道路は、ガードレールが下に落ちて、端の方は、 地震のすごさが、またここで改めて恐しく感じました。それからこの地震で多く ぼこぼこと波

に、水をもらいに来たりしました。幸いに、私の家は市の水道だったので、あれからずっと使 さなければならないということです。それに都市ガスを使っている家は、 えたのです。ところが、家で、災害用にとくんでおいた水が、この地震でひっくり返って台所 い分不自由をしました。電気も通らない時があったので井戸水を使っている家の人が、私の家 ガスを止められ、

となりました。この地区はずい分ひどい地区だったけれど、緑ケ丘住宅方面でも家をとりこわ

地震予知ができるといいナーと思います。それに、「備えあれば憂いなし」とことわざにもあ この事を通して思ったことは、地震は天災でどうすることもできないけれども、 日頃の備えが必要だと思いました。 私の家では、静岡にいた頃の習慣で、万一の備 ある程度の

うな惨事

分からないものだネ。」とため息をつきながら、言っていました。

中、水びたしになってしまったのです。母は、

かたづけながら、「地震は経験してみないと、

とまとめにしておいたことです。その他、今回は水の缶詰も売ってたらいいのに…と思いまし

えをしておいたので、今回は助かりました。例えば、懷中電燈、食品缶詰類、軍手、

お金をひ

です。最後に地震に会った時はあわてず、冷静な判断をとる心得も大切に…と思います。 た。それから、家で決めた避難場所に、避難してみんな無事であったことは、とても良かった

# その時、学校にいた私は

仙台市立図南高等学校二年(当時)

佐 藤 昌

市

しい体験だった。 恐ろしかった、実に恐ろしかった。六月十二日午後五時十四分、二度と味わいたくない恐ろ 私が給食室でお盆に、パン、スプーン、おかず、牛乳をのせ窓際の食卓に坐ろうとした時、

にもだぶって見え、調理室では釜がひっくりかえり、おかずはほこりにまみれ、牛乳はテープ 地震はやって来た。初めは大した事もないだろうと思いそのまま椅子に坐ったのである。する 急に椅子が激しく揺れ始め、私は無意識のうちに立ち上がっていた。周囲が二重にも三重

(被災地 仙台市飯田字上屋敷五〇一二)

してここから逃げ出さなければ!」と気がついたのです。 いられないほど揺れがひどくなり、それまでただ茫然と周囲を眺めていた私はこの時「何とか

みるみるうちに床に広がっていった。何かにしがみついていないと立って

ル

から落ちて砕け、

治まるのを待つしかなかった。 それでも私は必死になってその窓から逃げようとした。ところが窓の外には壁がボロボ ちていて逃げようにも逃げられなくなってしまった。私には食卓の下にでも潜り込んで地震が 私 は慌てて窓から逃げようとした。アルミサッシの窓枠が変形して半分しか開 いかなか ロと落 っ たが

ていた。 が倒れていた。一人、また一人と食卓の下から這い出して来た人達は声も無く呆然と立ち尽し れたように亀裂が入り、窓という窓は歪み、ガラスは砕け散っていた。 わすと何とも言いようのない光景が目に入った。柱は何トンもある鉄の塊にでもたたきつけら 地 震が始まった時、 室内はとても静かで話し声も聞こえなかった。立ち上がって周囲を見ま 食卓の列が乱れ、

れた。 話に駆け寄った。 「鬼に角、我々は無事だったのだ。」そう思うと今度は職場の様子が気になり事務室前の赤電 無事だった。 なかなか通じなかったが、それでも何度か試みているうちにやっと連絡 私はほっと胸を撫で降ろした。 張りつめた気分がふっと柔らいだ時、 背後 がと

グランドに出るように。」という先生の声が響いてきた。廊下を通っ

の方から「生徒は全員、

ぼんやり「助かったんだなあ…。」と心の隅で思いながら出口に向かっていたのでした。 て外に出るまでの、あの不安と安堵の入り混じった気持はいまだに忘れることができません。

(被災地

他台市五輪一—四— I Q)

宮城県沖地震と仙台市の対応

仙台市災害対策本部事務局員(当時)記

昭和五十三年六月十二日 一七時十四分

○地震発生

度四の地震発生)季節 夏(夜間雨あるも天気は良)

震度五、マグニチュード七・四(八分前の十七時六分震度二、同年二月二十日震

〇本庁内の状況

樋口第二助役(故人)、数人の局長及び幹部は在庁中。

退庁時刻が十六時四五分なので職員の大部分が帰路についたが職員若干名、

な状態になった。」

(四階用地部内の状況) —用地部 (当時) 職員談

初の二~三秒の揺れはカタカタという静かな揺れで、丁度トイレにいた職員二人は「オヤ、 また地震だね」と声を交わした。途端、 「十七時六分の地震で帰り仕度を急いでいた時、突然激しい揺れの地震がおそってきた。 最 ズボンのチャックを閉めるのも忘れ、五層先の部屋へかけ戻った。 激しい揺さぶりに会い、 一人の職員は、 小便が止ま

スが壊われる」と叫び、誰一人ドアや窓に近付こうとしなかった。 外、その他の者は足が立ちすくんで一歩も動きがとれず、 ろ」と叫び、 部屋には数人の職員が居たが、一人が机の下に潜り込み、一人が柱のそばに身を寄せた以 またキャビネットケースが窓ガラスの方に倒れるのを見たある者は、 ある者は「早く窓やドアを開け 一窓ガラ

き落され、 机や図面ケースの引き出しは全て外へはじき出され、書庫や窓ぎわの植木鉢は全部床に叩 室内は言い様のな ·無慘

六分後の十七時二十分災害対策本部を設置した。 地震直後の庁舎内の被害状況をもとに、樋口第二助役と在庁中の局長が協議の結果、

置し、 六階に消防局司令室があるので、 両所より情報を入手し、被害状況、 情報入手のため、 余震情報等を黒板や壁に貼り出した。 司令室へ係一名及びラジオ係二名を配

# 十七時三十二分 各局に第三次非常配備指令庁内残留者七一四名

帰宅した局長等幹部へは停電のため自動車バッテリーを使用し「災害応急復旧用無線電話

機」により連絡をとった。

庁内各局への連絡は、電話不通のため徒歩で行った。

名、無線電話での連絡二名、電話応待十二名の計二十名の要員を配置した。

情報収集作業には、ラジオからの情報収集二名、情報の整理二名、整理した情報の浄書二

第一報(二~三分後)東北大学化学棟出火以後一一九番(二七回線で全線入電、同時は四

台だけ)は鳴りっぱなしで当夜六〇〇件あった。その内訳は、火災三九件、救急関係二二二

件、ガス漏れ、家屋倒壊、その他であった。

一○時現在一、四六四名、二四時現在一、五六○名であった。 職員の集合状況(本庁職員のみ)は、十八時現在一、○六四名、十九時現在一、三六四名、

置の停止により、人命に危険があってはとの判断から供給停止を決定した。 十八時〇〇分、都市ガス全面供給停止、相次ぐガス漏れ通報と停電による港工場の製造装

底を図った。 市民への広報のため直ちに広報事とラジオを用いた。また翌日は新聞、セスナ機で周知徹

地震後一時間ぐらい経って庁内の電話がスムースに通じるようになった。更に一時間後市

庁内での電話の輻輳、 民からの被害通報や問合せ等が相次いだ。それでも庁内から庁外への電話は通じなかった。 庁外での電話の輻輳が解消し始めたのは二一時頃であった。

## 〇本部の動き

六月十二日一九時 第一回目の対策本部会議

情報の収集、火災発生の防止、 ガス事故防止に万全を期するよう指示。

○ブロック塀が倒れた 市民から情報が続々入る。

労務三課のある三階大部屋、建築指導課、宅地保全課への通話の振り分けにてんてこ舞いで この間一一九番は鳴りっぱなしであった。電話交換台は本部事務局、 ○家が倒れた 〇水が出ない、 など。 消防局、

庶務

あった。電話の通じない人は直接出向いても来た。そして救いを求めた。 大部屋だけで明け方まで約二、〇〇〇本の電話が入った。更にこの頃から

停電の問い合せ、列車の問い合せ等が相次ぎ、それに対してラジオで知った情報を中心に答

えるようになった。

記録によると、

以上東北電力仙台営業所の対策本部から一方的に連絡をもらうことにした。 事務局としては正確な情報を早く市民に伝えたいので、 電力情報については一 一時間に 

電力会社への市民の問い合せが殺到したため電話の話し中が続き、市民や報道機関は仕方

なく市の対策本部へ問い合わせてくるという事態となった。

これに対し、市職員が電話口で直接スピーカーで答える方法をとった。 NHKでも、ラジオ情報に重点を置き、夜半過ぎまで約三〇分間隔で問い合わせてきた。

その回答内容は

○停電地区、列車の状況、市バス・宮城バスの運行状況及び見通し等

〇中央卸売市場の平常業務、 給水車のフル運転、 都市ガスの復旧作業が円滑に運べるよう

元栓閉鎖の連絡等

死者一〇名、火災一〇件、ビル倒壊二棟、ガス漏れ七カ所、 二〇時、消防局無線車の管内巡視による被害状況調査

がけ崩れ二カ所、断水四カ所

市民からの情報

○ブロック塀が倒れそうだ

○高層アパートの電気がつかないので不安だ ○柱が曲ったので住めるかどうか見て欲しい

○避難所を設けて欲しい など

(本部事務局内) —事務局員談

「外は真暗である。まだ電気がつかない。ローソクの灯で書類が何とか読める程度。 乾電

六月十三日

池が届いたので無線電話機の電池を交換し、室内に設置した。そうしているうち、 ら発電機が届き、 り一時的にも緊張が解けた感じがした。 白熱灯一個だけで薄ぼんやりした光であったが、皆の顔が見えるようにな 管財課か

だが、それも束の間、宅地保全課から緑ケ丘でがけ崩れが発生しているという緊急連絡が

入った。

せつけられ、新しい対応の仕方の検討に迫られ、復旧対策も遅れがちで、いらだちが増すば かりであった。 災害対策本部会議は、逐一入ってくる新しい情報に、都市災害の恐ろしさをまざまざと見 こうした中にあっても、 本部会議は、 全市あげて復旧対策に取り組む決議を行い、 そのた

による全市一斉調査の実施を決定した。 めに被害の全貌を明らかにする必要があると判断。 一三日早朝五時から七時まで消防局職員

夜も更けて十二時を廻った頃、ようやく庁内の電灯がついた。」

○時三○分 緑ケ丘団地の一部に避難勧告。 外はにわか雨。緑ケ丘の避難所として鹿野小学

校の体育館を開放した。 各避難所へ毛布・食糧等を配布。 仙台駅に泊まる人達のために毛布五〇枚を貸

五時〇〇分 一〇段ぐらい降り雨は止んだ。

避難所の現況調査をした。(ただし収容避難所は十二カ所開設) め指定しておいた避難所は利用されなかった。念のため、市内二七カ所ある指定

地震直後、最も恐れていた大きな火災はなかった。当然、火災から身を守るた

**纂の定、各避難所に避難者はいなかった。ただ、専売公社仙台工場の職員の話** 

め折れ、電線を切り、そのスパークでホルダーに引火しその炎は一〇数好に達 によると、 ということであった。 これは、昭和三二年ガス局に建設された有水式ガスホルダーの支柱が地震のた 地震直後、ガス局近くの公団アパートの住人五〇人程度が避難してき

的なパニック状態になりながらも避難したものであった。 両隣りに球型ホルダーが三個あったため、住民は爆発の危険を察知し、一時

(有水式ガスホルダー震災目撃者談―「宮城県沖地震 と都市 ガス」社団法人日

本瓦斯協会より)

鳴りを伴う激しい左右上下揺れの地震に遭った。直立歩行が困難になり、 「退庁のため六○♪LPG貯槽南側約一○㍍の路上を酉から東に歩行中、 中腰で 突然地

五〇輝ぐらいの高さの感じで水が押し寄せていた。 沈むように下降しているところであった。と同時に六〇ジLPG貯槽の脚柱の下 から熱調室の方向に目を移した時、海岸の砂浜に波が押し寄せるように四〇~ すでに炎上し、支柱がガス槽に崩れ落ちて、ガス槽が左側 回側 に傾きながら 激しい揺れがやや治まるのを待った。その直後、有水式ガスホルダーを見たら、

頃、滅多に縁のない工場と付近住民のコミュニケーションを恐しい地震が仲立ち したということは全く寄遇というべきものである。 折から雨が降り出したため早速テントを張り出して、避難者の保護に努めた。 専売公社では、工場のガラスや壁が見るも無惨に飛び散り、足の踏み場もない 怖におそわれたが、気を取り直して夢中で屋外消火栓設備の場所に走った。」 また、ガス局向いの市の東分庁舎三階に市職員の独身寮があり、 予想もしない激しい地震とホルダーの炎上で、言葉では表現できない不安と恐 後片付けもそこそこに付近住民の避難に温かい手をさしのべたという。 地震発生当時

員としての使命感からか、住民のパニック防止のため、有水式ガスホルダーの炎

一〇名程の職員が帰宅していた。この職員達は、地域住民として、

あるいは市職

対策本部会議開催

被害情報に基づく対策を協議

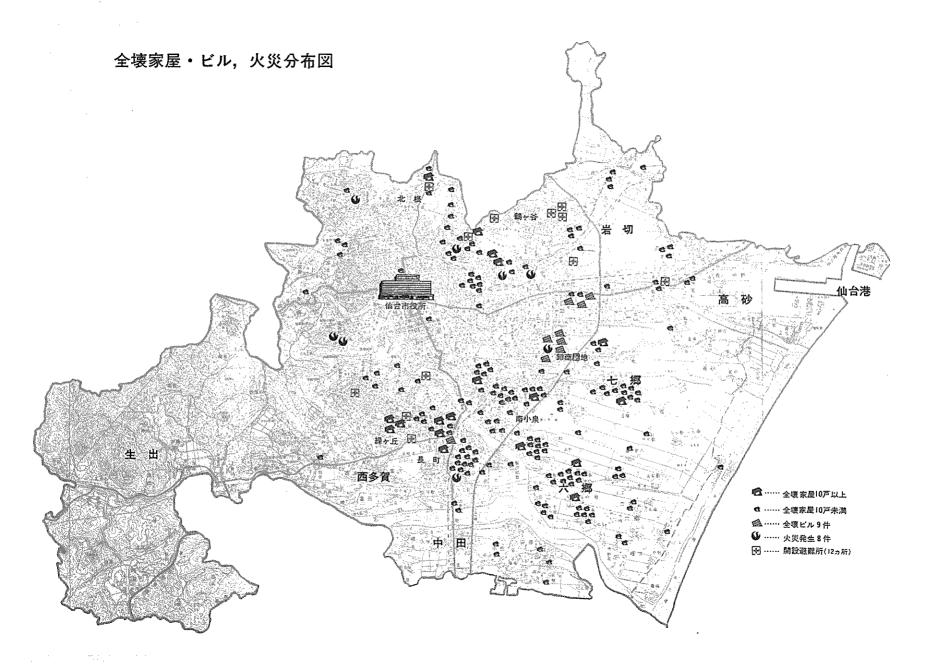
十一時〇〇分 七時〇〇分 市長が知事を訪問 災害教助法の適用について協議、

災害敷助法の適用について要請

十三時〇〇分 本日、災害教助法が適用される 市長・知事・国・出先機関の長が合同会議

復旧活動が延々と続いたのである。

以上が地震発生直後から二日間の本部の対応の概略であるが、以後市民、本部一体となった



#### '78 宮城県沖地震体験者被災地

凡例					○ 自然示什地展件状有放火地
<i>f</i> 6. 頁	No.		No.	頁	
① 190	(3)	68, 85, 87 89, 93	(25)	207	
2 198	(1)	73, 81, 201	26	36	
③ 113	(13)	12	Ø	26	
46	<b>(B</b> )	204, 224	28)	155	
(5) 21		60, 121	<b>(3)</b>	·	
<b>6</b> 136, 158	~ <del>}</del>	9	9)	210, 213	
7 175	(9)	151	(3)	42	
<u>8</u> 187	20	103	12	117	() () () () () () () () () () () () () (
(9) 108	(2)	94	(3)	220	
125, 128, 132 114, 147		98	30	50	
0 30	(23)	.i	35	163, 179, 183	
② 64	··÷	170, 172   報道を示す。		<u> </u>	(5) 室 (6) 東仙台 仙 五 越 (8) 進
					(1) (日) (日) (日) (日) (日) (日) (日) (日) (日) (日

### 宮城県沖地震仙台市の被害状況

[ E	<i>y</i>	遊位	数 量	被害额(**)	- 格
٨	死 者	人	13		
	<b>配傷者</b>	,	170		
	怪 傷 者	ſ	9,130		
	小 計	*	9,313		
	全赖家屋	F3	769	8,182,160	
l‡	半線家器	*	3,481	19,772,080	
L.	一作政划	,	74,487	47.816,030	小藏 40.850.830千円。大藏 6.965.200千円
	非住家・家具	*	112,874	33,506,260	
- R	宅地·門哥	,	42,631	17.395.510	
-38%	公营住宅	#	2,048	206,208	形界住宅 2.08月 206.208 FPI
	小 針			126,960,248	
辦	南院 - 参接所	件	418	559,200	公立 49 株 298、260 千円 369 株 260 949 千円
<i>""</i>	衛生施設	¥	13	116,205	発稿所、火券場など
4	<b>府招集</b> 数	*	16	200,572	施設 195、065 平円 名理場 5、536 千円
-4.	ላ åt		447	875.978	4444
商	大 企 業	#	272	19,578.670	
	中小企業	¥	21,934	37.)95.510	
I	小 新	,	22,206	56,774,180	
	Q (F th	ka	100	20,000	
森	良基施設	拌	3,935	745,804	така жазан жаз Жазан жазан жа
	新產業及		1	30,454	
藻	林集施設		Ţ	65	
<u> </u>	小 耕	*****		796,323	

#### (昭和54年3月31日現在)

	区分		数量	技容額 (+n)	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
	小学校	核	64	202,517	公文 60枚 189.747千円 1 校 12.770千円
教	中学校	ž	28	128,480	
	高等学校	,	26	1,008,785	form to the
質	各種学校	7	101	265,534	公文 製页   3数 30.867千円 38数 234.727千円
H	文 化 財	件	2	6,440	
	小計			1.611.756	
展	保育所	件	30	12,000	再文   模立   20 mm 4.678 子円 10 mm 7.322 千円
生	社会福祉施設	z	30	202,234	市立 私立 16 株 22,854 千円 14 株 179,380 千円
	小計	,	60	214,234	
	道 路	件	166	402.627	市道 闘・楽盛 194か所 994,827 子丹 62か所 7,800 千円
Ŀ	核 型	Æ	20	92,817	市 四・県 12か所 89.537 千円 多か系 2.880 千円
	河 川	2	84	1,001,322	市 日本
水	公図	#	19	70,744	
-11-	砂筋	ź	1	97,993	短導沢地区(緑ケ丘並丁目)
	小 計	s	290	1,665,503	
	交通施設	#	23	52,000	市交通 6か所 52,000 千円
	水道能設	*	23	255,000	程水 新水 非議 1.062か所 7.000戸 3.750件
馝	下水道施設	,	41	37,000	
俥	ガス施設	*	370	728,773	工場等 尋替 3か所 95.3億千円 267か新 633.425千円
施	能力能設	,		2,033.000	
段	通信施設	•	2,650	850,000	( 套接通信服整件 )
	公共燃物等	,	89	1,110,759	市15件 205.068千円 東42件 802.380千円 国22件 103.311千円
	小 計	•	3,206	5,066,532	
ð	at at			193,964.754	住案做著 124.950.248 平内 公共能验等被害 67.004.505 子内

震度